

埼玉県病害虫防除所業務年報 (令和5年度)

埼玉県病害虫防除所

埼玉県病害虫防除所の沿革

年 月	概 要
昭和 27 年 7 月	植物防疫法（昭和 25 年 5 月 24 日法律第 151 号）に基づき、「植物防疫施設に関する条例」（昭和 27 年 7 月 18 日条例第 55 号）が公布され、県内 8 か所の地方事務所、北足立、入間、比企、秩父、児玉、大里、北埼玉、埼玉葛の各病害虫防除所が設置された。1 防除所当たり 1～2 人の専任技術職員が配置され、所長は地方事務所長が兼務した。
昭和 31 年 8 月	地方事務所が廃止され新たに農林事務所が設置されたことに伴い、各農林事務所に病害虫防除所が併設され、専任職員に加えて 1 防除所当たり 3～7 人の農林事務所兼務職員が配置された。なお、所長は農林事務所長が兼務した。
昭和 53 年 4 月	秩父農林事務所が廃止され秩父農林振興センターが設置されたことに伴い、秩父病害虫防除所は秩父農林振興センターに併設された。
昭和 58 年 4 月	8 か所の病害虫防除所を 1 か所に統合し、熊谷市の農業試験場（現：農業技術研究センター玉井試験場）内に「埼玉県病害虫防除所」が設置された。各農林事務所及び秩父農林振興センターには、駐在職員及び兼務職員が配置された。
平成 9 年 4 月	川越、東松山、行田の各農林事務所の廃止に伴い、新たに設置された農林振興センターに駐在職員及び兼務職員が配置された。その後、農林事務所が順次廃止され、新たに設置された農林振興センターに駐在職員及び兼務職員が配置された。
平成 17 年 4 月	職員の駐在制が廃止され本所に集約された。なお、兼務職員は引き続き各農林振興センターに配置された。
平成 22 年 4 月	組織改正により、農林総合研究センター水田研究所から肥飼料検査業務が移管された。
平成 27 年 4 月	農林総合研究センター水田農業研究所の廃止に伴い、農業技術研究センター（熊谷市須賀広）に事務所を移転した。
平成 30 年 4 月	農業技術研究センター病害虫防除対策担当との兼務になった。

＜参 考＞

植物防疫の施設に関する条例（昭和二十七年七月十八日 条例第五十五号）								
第一条	植物防疫法（昭和二十五年法律第百五十一号）第三十二条第二項の規定による病害虫防除所の位置、名称及び管轄区域並びに第三十三条第一項の規定による病害虫防除員を置く区域は、この条例の定めるところによる。							
第二条	病害虫防除所の名称、位置及び管轄区域は、次のとおりとする。							
	<table><tr><th>名 称</th><th>位 置</th><th>管 轄 区 域</th></tr><tr><td>埼玉県病害虫防除所</td><td>熊 谷 市</td><td>埼 玉 県</td></tr></table>	名 称	位 置	管 轄 区 域	埼玉県病害虫防除所	熊 谷 市	埼 玉 県	
名 称	位 置	管 轄 区 域						
埼玉県病害虫防除所	熊 谷 市	埼 玉 県						
第三条	病害虫防除員を置く区域は、市町村の区域とする。							
第四条	この条例施行に関し必要な事項は、知事が定める。							

目 次

1 埼玉県病害虫防除所の概要

(1) 名称及び所在地	1
(2) 病害虫防除所の業務	1
(3) 組織体制	2
(4) 職員及び事務分担	2
(5) 病害虫防除員等の設置	3

2 病害虫発生予察

(1) 対象作物及び有害動植物	4
(2) 予察ほ場及び巡回調査地域等	
ア 県予察ほ場	8
イ 予察灯設置ほ場	8
ウ 巡回調査地域	9
エ フェロモントラップ等調査	10
(3) 令和5年度の主な病害虫の発生とその防除対策	
ア 主要病害虫の発生と防除対策の概要	11
イ 令和5年度病害虫発生程度別及び防除面積	23
(4) 令和5年度の病害虫発生予察情報等の発信	
ア 病害虫発生予察警報、注意報及び特殊報等発表状況	28
イ 発生予察情報（発生予報、注意報、特殊報等）、病害虫発生現況報告等の外部への提供	29
ウ 発生予察ツールを用いた発消長予測情報の提供	30

3 病害虫防除指導

(1) 病害虫防除手法等に関する相談	31
(2) 無人ヘリコプター等による空中散布等の防除指導	31
(3) 県内市町村の病害虫防除協議会等における指導	31
(4) 農薬展示ほ設置等に関する指導	32
(5) 研修会等の指導	32
(6) 防除対策資料等の作成	33

4 侵入警戒有害動植物の侵入調査

(1) フェロモントラップ調査	34
(2) 目視調査	34
(3) 新規病害虫まん延防止対策調査結果	35

5 農薬安全使用対策

- (1) 農薬危被害防止対策 3 6
- (2) 農薬販売者の届出店舗数及び立入検査結果 3 6

6 病害虫関係資料

- (1) 令和5年度発表の病害虫発生予察注意報等
 - ア 注意報（第1号、第2号、第3号、第4号、第5号） 3 8
 - イ 病害虫防除情報（オオタバコガ、ニカメイガ、イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ）） 5 3
- (2) 病害虫発生予察調査等結果
 - ア 水稻・麦
 - (ア) フタオビコヤガ(イネアオムシ) のフェロモントラップ調査（4～9月） 6 1
 - (イ) 麦ほ場におけるウンカ・ヨコバイ類の生息密度調査（5月） 6 2
 - (ウ) 水稻予察灯調査（5～9月） 6 3
 - (エ) いもち病（葉いもち）感染好適条件出現状況（BLASTAM）（5～9月） 6 8
 - (オ) トビイロウンカ、セジロウンカ、コブノメイガ飛来予測日回数（5～9月） 7 0
 - (カ) スクミリンゴガイの被害状況調査（6～7月） 7 1
 - (キ) 水稻観察地点調査（6～9月） 7 2
 - (ク) イネツトムシ発育予測（7月） 7 4
 - (ケ) フタオビコヤガ（イネアオムシ）発育予測（7月） 7 4
 - (コ) いもち病発生状況調査結果（7月） 7 5
 - (サ) 水稻の斑点米カメムシ類の畦畔・雑草地発生調査結果（7月） 7 6
 - (シ) ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果（2月） 7 7
 - (ス) 農業技術研究センター 県予察ほ場（玉井試験場）調査結果（6～9月） 7 9
 - イ 野菜等
 - (ア) ハスモンヨトウのフェロモントラップ調査（4～11月） 8 1
 - (イ) オオタバコガのフェロモントラップ調査（4～11月） 8 1
 - (ウ) シロイチモジヨトウのフェロモントラップ調査（4～11月） 8 2
 - ウ 果樹
 - (ア) ナシヒメシンクイのフェロモントラップ調査（3～10月） 8 2
 - (イ) 果樹カメムシの予察灯調査（4～10月） 8 3
 - (ウ) 果樹カメムシのフェロモントラップ調査（4～10月） 8 4
 - (エ) 果樹カメムシ類の越冬密度調査結果（3月） 8 5
 - エ 茶
 - (ア) チャハマキのフェロモントラップ調査（4～11月） 8 7
 - (イ) チャノコカクモンハマキのフェロモントラップ調査（4～11月） 8 7
 - (ウ) チャノホソガのフェロモントラップ調査（4～11月） 8 7
 - (エ) 茶業研究所 県予察ほ場調査結果（4～3月） 8 8

(3) その他	
ア 令和5年度熊谷地方気象台の気象観測データ	9 0
イ 無人ヘリコプターによる防除実績	9 1
ウ 過去の病虫害発生予察警報、注意報、特殊報発表状況	9 2

7 肥料検査の概要

(1) 検査	9 6
(2) 登録及び届出	1 0 0
(3) 調査事業等	
ア 肥料生産量調査	1 0 3
イ 肥料流通量調査	1 0 6
(4) 畜政推進事業	1 1 0

8 飼料検査の概要

(1) 検査	1 1 1
(2) 調査事業	1 1 4

1 埼玉県病害虫防除所の概要

(1) 名称及び所在地

名 称	位 置	電 話 番 号	管轄区域
埼玉県病害虫防除所 (埼玉県農業技術研究センター) (病害虫防除対策担当)	〒360-0102 熊谷市須賀広784 埼玉県農業技術研究センター内	電話:048-539-0661 (病害虫関係) 048-539-0662 (肥飼料関係) F A X:048-539-0663	埼 玉 県

(2) 病害虫防除所の業務

ア 病害虫発生予察

- (ア) 主要 16 農作物の 167 病害虫発生予察調査の実施
- (イ) 病害虫発生予察会議の開催及び発生予報の作成
- (ウ) 警報、注意報、特殊報等の発表
- (エ) ホームページによる情報発信

イ 病害虫防除対策

- (ア) 検疫病害虫侵入リスク管理対策
- (イ) 重要害虫の防除対策
- (ウ) 新規病害虫のまん延防止対策
- (エ) 病害虫診断と防除指導
- (オ) ホームページ、SNS 等による情報発信
- (カ) 無人ヘリコプターによる空中散布の防除指導
- (キ) 病害虫や農薬に関する相談への対応
- (ク) 特別栽培農産物の認証への協力

ウ 農薬安全使用対策

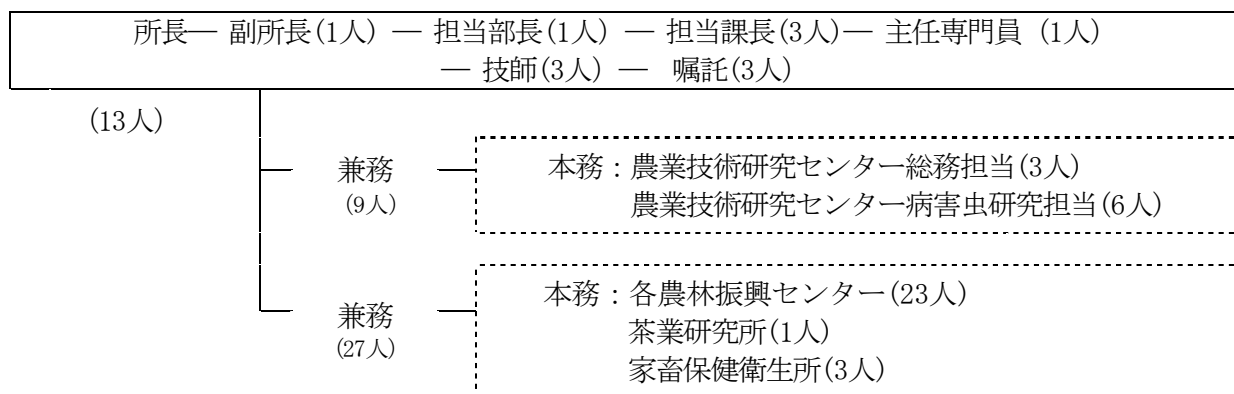
- (ア) 農薬適正使用対策の推進
- (イ) 農薬取締法に基づく農薬販売届の受理及び販売店の立入検査、指導
- (ウ) 農薬取締法に基づく指導

エ 肥飼料検査業務

- (ア) 肥料の品質の確保等に関する法律に基づく肥料の検査及び指導
- (イ) 肥料の品質の確保等に関する法律に基づく肥料の登録及び届出の受理
- (ウ) 肥料生産量及び流通量の調査
- (エ) 飼料の安全性の確保及び品質の改善に関する法律に基づく飼料の検査
- (オ) 飼料の製造及び流通、飼料添加物の生産・流通量等の調査

(3) 組織体制

◎農業技術研究センター病虫害防除対策担当が防除所（本所）を兼務



(4) 職員及び事務分担

令和5年度病虫害防除所（農技研病虫害防除対策担当）職員事務分担

職 名	氏 名	担 当 作 物 等	担 当 農 林
所 長	原 弘信	所内(担当内)総括	
副 所 長	酒井和彦	所内(担当内)総括補佐・予算の総括	
担当部長	柄本利道	肥飼料検査・指導	
担当課長	川井明子	花き・特産	さいたま・川越
担当課長	横山素之	肥飼料検査・指導	
担当課長	大宅秀史	普通作物	加須・秩父
主任専門員	江森 孝	農薬取締法に関する事務・予察等に関する事務	
技 師	松本はるか	野菜・果樹	本庄・大里
技 師	高橋 諒	普通作物	東松山
技 師	大野泰紀	果樹・野菜	春日部
嘱 託 (会計年度任用)	西 玲子	肥飼料検査事業の補助	
嘱 託 (会計年度任用)	福井朋子	発生予察事業・農薬取締法関係事務の補助	
嘱 託 (会計年度任用)	久保田篤男	発生予察事業の補助・検疫病虫害侵入リスク管理対策事業の補助	

(5) 病虫害防除員等の設置

ア 病虫害防除員の設置

植物防疫法第 33 条第 1 項の規定に基づき、病虫害防除員を 16 人（農業協同組合職員 12 人、農業者 4 人）に委嘱した。

病虫害防除員は、病虫害防除所の地域担当職員と連携して、次に掲げる項目について業務を実施した。

- (ア) 病虫害発生状況の把握及び報告
- (イ) 病虫害発生状況に関する情報提供と防除指導
- (ウ) 農薬の安全使用指導
- (エ) その他、植物防疫事業に関する指導及び協力

イ 病虫害防除協力員の設置

病虫害発生予察事業に係る情報網の充実を図るため、病虫害防除員に加えて、病虫害防除協力員として農業共済組合職員 10 人に協力を依頼した。

病虫害防除協力員は病虫害防除所の地域担当職員と連携して、病虫害の発生動向の把握に努めた。

2 病虫害発生予察

農業生産の安定と生産性の向上を図るとともに、高品質で安全・安心な農産物を生産するため、主要 16 作物に被害を与える 176 病虫害の発消長や農作物の生育状況等を調査した。これらの調査結果と病虫害の生態、気象の経過と予報等を基に、病虫害の発生時期や発生量を予察し、生産者を始め農業団体や市町村、関係機関等に情報を提供し、病虫害の的確な防除を推進した。

(1) 対象作物及び有害動植物

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注 1）	県の有害動植物（注 2）
普通作物	水 稲	いもち病、紋枯病、白葉枯病、ばか苗病、もみ枯細菌病、ごま葉枯病、縞葉枯病、稲こうじ病、ニカメイガ、セジロウンカ、トビイロウンカ、ヒメトビウンカ、ツマグロヨコバイ、イネドロオイムシ、斑点米カメムシ類（アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシ、シラホシカメムシ、イネカメムシ、ミナミアオカメムシ）、フタオビコヤガ、コブノメイガ、イネミズゾウムシ	イチモンジセセリ（イネツトムシ）、スクミリンゴガイ
	麦	うどんこ病、赤かび病	黒穂病類（裸黒穂病、なまぐさ黒穂病）、黒節病 アブラムシ類（ムギヒゲナガアブラムシ、ムギクビレアブラムシ）、ムギダニ、シロトビムシ類
	小 麦	さび病類（赤さび病）	縞萎縮病
	大 麦	さび病類（黄さび病、小さび病、黒さび病）	縞萎縮病、斑葉病
	かんしょ	ナカジロシタバ、ハスモンヨトウ	つる割病、立枯病、基腐病 イモキバガ（イモコガ）、食葉性チョウ目幼虫

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注1）	県の有害動植物（注2）
普通作物	大豆	紫斑病、 アブラムシ類（ダイズアブラムシ）、ハスモンヨトウ、マメシンクイガ、吸実性カメムシ類（アオクサカメムシ、ホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシ、ミナミアオカメムシ）、フタスジヒメハムシ	ウイルス病、立枯性病害、葉焼病、べと病、茎疫病 コガネムシ類（アカビロウドコガネ、アオドウガネ、ドウガネブイブイ、オオクロコガネ、ヒメコガネ、マメコガネ）、食葉性チョウ目幼虫、シロイチモジマダラメイガ、ダイズサヤタマバエ、ウコンノメイガ
果樹等作物	なし	黒斑病、黒星病、赤星病、 シンクイムシ類（ナシヒメシンクイ、モモシンクイガ）、ハダニ類（カンザワハダニ、ミカンハダニ、ナミハダニ、リンゴハダニ）、 カイガラムシ類（クワコナカイガラムシ、ナシマルカイガラムシ）、 ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ、チャハマキ）、果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシ）、アブラムシ類（ナシアブラムシ、ワタアブラムシ、ユキヤナギアブラムシ）	うどんこ病、輪紋病 ニセナシサビダニ
	茶	炭疽病、 ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ、チャハマキ）、チャノミドリヒメヨコバイ、 ハダニ類（カンザワハダニ）、 アザミウマ類（チャノキイロアザミウマ）、チャノホソガ、 カイガラムシ類（クワシロカイガラムシ）、チャトゲコナジラミ	もち病、輪斑病 カメムシ類（ツマグロアオカスミカメ）、ヨモギエダシヤク

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注 1）	県の有害動植物（注 2）
野菜	ト マ ト	疫病、灰色かび病、葉かび病、黄化葉巻病、うどんこ病、すすかび病、 アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ）オオタバコガ、 コナジラミ類（オンシツコナジラミ、タバココナジラミ）、 アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ワタアブラムシ）、ハスモンヨトウ	萎ちょう病類、青枯病、 ハモグリバエ類、
	な す	うどんこ病、灰色かび病、すすかび病、 アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ）、オオタバコガ、ハスモンヨトウ、 アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ジャガイモヒゲナガアブラムシ、チューリップヒゲナガアブラムシ、ワタアブラムシ）、 ハダニ類（カンザワハダニ、ナミハダニ）	褐紋病、褐色腐敗病、半身萎ちょう病、青枯病、 ハモグリバエ類、ホコリダニ類
	きゅうり	べと病、炭疽病、うどんこ病、斑点細菌病、灰色かび病、褐斑病 アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ）、コナジラミ類（オンシツコナジラミ、タバココナジラミ）、 ハダニ類（ナミハダニ）、 アブラムシ類（ワタアブラムシ、モモアカアブラムシ）、ハスモンヨトウ	モザイク病、菌核病、黄化えそ病、退緑黄化病、 ハモグリバエ類、食葉性チョウ目幼虫

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注1）	県の有害動植物（注2）
野菜	ブロッコリー	コナガ、ハスモンヨトウ、ヨトウガ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ	黒腐病、べと病、軟腐病、花蕾腐敗病、黒斑細菌病、黒すす病、アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシ）、ハイマダラノメイガ
	ねぎ	さび病、黒斑病、べと病 ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、アブラムシ類（ネギアブラムシ、ワタアブラムシ）、ハモグリバエ類（ネギハモグリバエ）、アザミウマ類（ネギアザミウマ）、ネギコガ	萎縮病、小菌核腐敗病、軟腐病、白絹病、葉枯病、黒腐菌核病
	さといも	アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシ）、ハスモンヨトウ	汚斑病、疫病、ハダニ類（カンザワハダニ）
	ほうれんそう	アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシ）、ハスモンヨトウ	べと病、立枯病、シロオビノメイガ、アザミウマ類（ミナミキイロアザミウマ）、ケナガコナダニ、
	いちご	灰色かび病、うどんこ病、炭疽病、ハスモンヨトウ、アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ）、アブラムシ類（ワタアブラムシ、イチゴネアブラムシ）、ハダニ類（ナミハダニ、カンザワハダニ）コナジラミ類（オンシツコナジラミ、タバココナジラミ）、オオタバコガ	萎黄病、輪斑病、ホコリダニ類、
小 計		16 作物、104 病虫害	16 作物、72 病虫害
合 計		16 作物、176 病虫害	

（注1）「国の指定有害動植物」とは、国が指定有害動植物発生予察事業計画で定めた発生予察事業の対象病虫害。

（注2）「県の有害動植物」とは、埼玉県が国と協議して設定した発生予察事業の調査対象病虫害。

(2) 予察ほ場及び巡回調査地域等

ア 県予察ほ場

区 分	対象作物	箇所数	ほ 場 所 在 地
普通作物	水 稲	1	熊谷市玉井（農業技術研究センター玉井試験場）
	麦	1	熊谷市玉井（農業技術研究センター玉井試験場）
果樹特産	なし	1	久喜市六万部（農業技術研究センター久喜試験場）
	茶	1	入間市上谷ヶ貫（茶業研究所）
野 菜	トマト	1	熊谷市須賀広（農業技術研究センター）
	きゅうり	1	熊谷市須賀広（農業技術研究センター）
	いちご	1	熊谷市須賀広（農業技術研究センター）
計		7	

イ 予察灯設置ほ場

区 分	対象作物	箇所数	ほ 場 所 在 地
普通作物	水 稲	6	川越市南田島、川島町上八ツ林 本庄市児玉町吉田林、熊谷市玉井、加須市大越、春日部市樋籠
果樹特産	な し	3	上里町長浜、春日部市内牧、久喜市六万部
	茶	1	入間市上谷ヶ貫（茶業研究所）
計		10	

(注) () 書きのある予察灯は、() 内の機関が調査している予察ほ場である。

ウ 巡回調査地域

区 分	対象作物	箇 所 数	ほ 場 所 在 地
普通作物	水 稻 (早植)	8	川越市小中居、毛呂山町箕和田、吉見町西吉見、 熊谷市中曾根、加須市麦倉、春日部市樋籠、 幸手市神扇、吉川市中井
	水 稻 (普通植)	6	坂戸市横沼、川島町曲師、嵐山町吉田、 本庄市児玉町吉田林、美里町小茂田、加須市大越
	麦 (大麦)	3	川島町東部、加須市大越、白岡市太田新井
	麦 (小麦)	8	川越市古谷上、坂戸市片柳、川島町東部、 本庄市児玉町吉田林、熊谷市飯塚、熊谷市樋春、 行田市前谷、蓮田市駒崎
	かんしょ	2	川越市中台南、三芳町上富
	大 豆	6	川越市古谷上、滑川町福田、熊谷市板井、熊谷市樋春、 加須市間口、蓮田市駒崎
果樹特産	な し	7	鴻巣市常光、神川町植竹、上里町長浜、加須市鴻荃、 加須市上種足、春日部市内牧、白岡市下大崎
	茶	4	所沢市下富、狭山市南入曽、入間市根岸、 日高市森戸新田
野 菜	トマト	7	川越市南田島、川島町上大屋敷、本庄市仁手、 上里町勅使河原、深谷市普濟寺、加須市栄、 越谷市東町
	な す	3	本庄市児玉町小平、熊谷市小江川、杉戸町大塚
	きゅうり	7	川越市大中居、川島町吉原、本庄市田中、熊谷市樋春、 深谷市高畑、深谷市下手計、加須市大室
	ブロッコリー	3	本庄市田中、深谷市針ヶ谷、吉川市川藤
	ね ぎ	5	さいたま市岩槻区大野島、本庄市田中、熊谷市飯塚、 深谷市下手計、越谷市中島
	さといも	3	川越市中福、所沢市下富、狭山市堀兼
	ほうれんそう	3	川越市中福、狭山市堀兼、深谷市上手計
	いちご	5	吉見町久保田新田、本庄市台町、加須市本郷、 春日部市内牧、久喜市菖蒲町菖蒲
計		80	

(注) 水稻（早植）：5月中旬までの移植、水稻（普通植）：5月下旬以降の移植。

エ フェロモントラップ等調査

対象作物	対象害虫名	箇所数	設置場所
水 稲	ニカメイガ	3	吉見町西吉見、加須市麦倉、幸手市神扇
	フタオビコヤガ	2	熊谷市中曽根、加須市戸室
な し	ナシヒメシンクイ	5	飯能市双柳、鴻巣市常光、上里町長浜、 加須市鴻荃、春日部市内牧
	果樹カメムシ類	1	寄居町鉢形
茶	チャハマキ	2	所沢市下富、入間市根岸
	チャノコカクモンハマキ	2	所沢市下富、入間市根岸
	チャノホソガ	2	所沢市下富、入間市根岸
野 菜	オオタバコガ	5	本庄市児玉町小平、深谷市針ヶ谷、 加須市間口、越谷市中島、杉戸町大塚
	ハスモンヨトウ	3	熊谷市樋春、深谷市針ヶ谷、久喜市菖蒲町小林
	コナガ	1	深谷市新戒
	シロイチモジヨトウ	3	深谷市新戒、越谷市中島、杉戸町大塚
計		29	

(3) 令和5年度の主な病害虫の発生とその防除対策

ア 主要病害虫の発生と防除対策の概要

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稻 (早植) 5月中旬までの移植	葉いもち	平年：やや遅 前年：やや早	平年：並 前年：多	平年よりやや遅い7月第2半旬に初発生を確認し、発生面積は7月に最大となった。発生量は平年並だった。	5～6月の多雨によりいもち病感染好適日が平年よりかなり多かったが、7月中旬以降は高温少雨が継続したため、多発には至らなかった。	抵抗性品種への転換が進みつつある。常発地では、育苗箱施用薬剤の利用が一般技術となっている。
水稻 (早植) 5月中旬までの移植	穂いもち	平年：並 前年：－	平年：並 前年：－	平年並の8月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年並だった。	出穂期以降は高温少雨が継続したが、8月第3半旬～第5半旬に曇雨天が継続したため、平年並の発生となった。	感染好適日の発生状況を15日おきに発表し、必要に応じた葉いもちの防除を周知することにより、穂いもちの予防につなげた。
水稻 (早植) 5月中旬までの移植	紋枯病	平年：早 前年：早	平年：並 前年：やや少	平年より早い6月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年並だった。	作期中ずっと高温であったが、8月中旬及び9月上旬以外は少雨傾向だったため、多発には至らなかった	多窒素栽培を避けるなどの耕種的防除、薬剤による防除を組み合わせ実施している。
水稻 (早植) 5月中旬までの移植	ばか苗病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	種子更新と種子消毒の徹底について情報発信を実施した。JA米では種子更新が徹底されている。
水稻 (早植) 5月中旬までの移植	もみ枯細菌病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	8月第2半旬に初発生を確認した。	本作型では過去10年発生が見られなかったが、出穂期以降の高温と8月第3半旬～第5半旬の曇雨天により、一部地域で発生が見られた。	種子更新と種子消毒の徹底について情報発信を実施した。また普及している箱施用薬剤の中には、本病に有効な薬剤がある。
水稻 (早植) 5月中旬までの移植	縞葉枯病	平年：早 前年：早	平年：並 前年：多	平年より早い6月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は7月に最大となった。発生量は平年並だった。	ヒメトビウンカ越冬世代幼虫の保毒虫率は過去10年で最も低く、ヒメトビウンカの本田での発生量もやや少なかったが、本作型では感受性品種の作付け比率が高いため、平年並の発生となった。	保毒虫率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、防除に取り組むよう呼びかけている。抵抗性品種への転換が進みつつある一方で、感受性品種ではウンカ類に対する育苗箱施用薬剤の使用を徹底している。
水稻 (早植) 5月中旬までの移植	稲こうじ病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	7月が高温少雨であり、本病の感染に好適な気象条件とならなかった。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稻 (早植) 5月中旬までの移植	※ごま葉枯病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	一部の限られたほ場でのみ散发程度の発生が確認された。	高温で肥切れが早く感染しやすい状況にあったが、長期の高温で病原菌の活動も抑制されたため、極めて限定的な発生にとどまった。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稻 (早植) 5月中旬までの移植	※白葉枯病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	過去10年発生が無く、伝染源が極めて少ないと考えられる。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていないが、普及している箱施用剤には細菌病に有効なものがある。
水稻 (早植) 5月中旬までの移植	ニカメイガ	平年：早 前年：早	平年：多 前年：多	平年より早い6月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。予察灯誘殺数が平年より多く、本田での発生量も多い結果となった。	この作型では秋耕い定着しているため、水田内の越冬場所が減少しており、近年少発生傾向であったが、品種構成の変化（稈の太い品種の作付）などにより、世代を重ねることに増加した。特にチョウ目害虫対象の箱施薬を実施していない地域において、発生が増加した。	絶対量としてはそれほど多くなく、減収につながる被害とはなっていないため、他の害虫との同時防除に対応している。
水稻 (早植) 5月中旬までの移植	セジロウンカ	平年：早 前年：やや早	平年：やや少 前年：少	平年より早い6月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は7月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	本田の初発生は早かったが、予察灯への誘殺は平年より遅く、誘殺数もかなり少なかった。セジロウンカの飛来数が少なく、あまり本田に定着しなかったため、発生量が平年よりやや少なかったと推察される。	セジロウンカ・トビイロウンカの飛来予測日数の動向を15日おきに発表し、注意喚起した。
水稻 (早植) 5月中旬までの移植	トビイロウンカ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	本田での発生は確認されなかったが、予察灯への誘殺は過去10年で最も多かった。	飛来予測日数は2日と少なかったが、実際の飛来日数はもっと多かったと推察される。しかし、1回当たりの飛来数が少なかったため、本田定着には至らなかったと考えられる。	セジロウンカ・トビイロウンカの飛来予測日数の動向を15日おきに発表し、注意喚起した。
水稻 (早植) 5月中旬までの移植	ヒメトビウンカ	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：並	平年より早い5月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	5月に調査した麦ほ場での成幼虫密度は過去10年で2番目に高かったが、7月～9月の異常高温により発育が抑制され(発育上限29℃、発育停止40℃)、発生量はやや少となった。	保毒虫率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、防除に取り組むよう呼びかけている。ウンカ類に対する育苗箱施用薬剤の使用を徹底している。
水稻 (早植) 5月中旬までの移植	ツマグロヨコバイ	平年：やや早 前年：並	平年：やや少 前年：やや少	平年より早い6月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	予察灯誘殺数も平年より少なかった。原因は定かではないが、在来種のため、夏期の長期にわたる異常高温が影響した可能性は否めない。	ヒメトビウンカに対する育苗箱施用薬剤の使用徹底により、ヨコバイ類への防除も同時に行われている。
水稻 (早植) 5月中旬までの移植	斑点米カメムシ類	平年：早 前年：早	平年：並 前年：多	平年よりかなり早い5月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は6月に最大となった。発生量は平年並だったが、県東部及び北東部の一部地域でイネカメムシが多発し、大きな被害を与えた。	7月中旬実施の畦畔及び雑草地における県内一斉調査では、過去10年で最も多かった。注意報を発表して防除圧が高まったことから、発生量は平年並にとどまった。	斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査及び注意報を発表し、防除を呼び掛けた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稻 (早植) 5月中旬までの移植	イチモンジセセリ	平年：－ 前年：並	平年：やや少 前年：－	6月第6半旬に初発生を確認したが、散発程度で、その後発生は見られなかった。	夏期の長期にわたる異常高温により発生が抑制され(本虫は30℃以上で若齢幼虫の生育遅延や老齢幼虫の死滅が報告されている)、発生量はやや少にとどまった。	生育予測システムを活用して第2世代幼虫孵化最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稻 (早植) 5月中旬までの移植	フタオビコヤガ	平年：早 前年：－	平年：並 前年：－	平年より早い5月第6半旬に初発生を確認したが、その後発生は見られなかった。	フェロモントラップの誘殺数は年々減少傾向にあり、ほ場での発生も減少しているため、少発生が平年並となる。	生育予測システムを活用して第2世代成虫最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稻 (早植) 5月中旬までの移植	コブノメイガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	過去10年発生が無いため、無発生が平年並となる。	減収につながる被害とはなっていないため他の害虫との同時防除で対応している。
水稻 (早植) 5月中旬までの移植	イネミズゾウムシ	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年より遅い5月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は7月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	本虫の多発地は4月下旬移植地域が主体で、通常は移植後すぐに発生が確認されるが、1月～4月が高温に経過したため、越冬世代成虫の活動開始時期が水稻移植前に早まり、本田での確認が第1世代成虫になった可能性が考えられる。発生量は、年々減少している。	越冬場所(森林、堤防沿い)に近接する常発地帯では、育苗箱施用薬剤の使用が基本技術となっている。
水稻 (早植) 5月中旬までの移植	スクミリンゴガイ	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：－	本作型では、地域による被害の多少の差が大きかったが、発生量は平年より少なく、前年並かやや多かった。	本県では、冬季の低温が本種の越冬を阻害するため、常発地は限られている。前年の発生量が少なかったこと、常発地での防除が徹底されてきたことから、越冬個体数が減少傾向にある。	耕種的防除が中心であるが、常発地帯では薬剤防除も実施されている。薬剤防除に助成する地域防除協議会もある。
水稻 (早植) 5月中旬までの移植	※イネドロオイムシ	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	一部ほ場で散発程度の発生が確認された。	本虫は寒冷地型であり、本県では4月下旬移植の一部地域でわずかに発生が見られる程度である。	常発地域が非常に限定的であり、当該地域では育苗箱施用薬剤の使用が基本技術となっている。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	葉いもち	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年より遅い8月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は8月が最大となった。発生量は、平年よりやや少なかった。	6月の降水量は多かったが、7月が極端な高温少雨だったため初発が遅れ、気象条件がやや緩んだ8月になってから一部で日照りいもちが発生した。7月7日以降県内で感染好適日は出現していないため、発生量も抑制された。	ほぼ抵抗性品種となっているが、一部に常発地がある。常発地では、育苗箱施用薬剤の利用が一般技術となっている。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	穂いもち	平年：早 前年：早	平年：並 前年：多	平年より早い8月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は9月が最大となった。発生量は、平年並だった。	葉いもちの発生量はやや少なかったが、9月上旬の降水量が多かったため、平年並の発生となった。	感染好適日の発生状況を15日おきに発表し、必要に応じた葉いもちの防除を周知することにより、穂いもちの予防につなげた。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	紋枯病	平年：遅 前年：早	平年：並 前年：並	平年より遅い8月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は9月が最大となった。発生量は、平年並だった。	8月～9月の気温は高かったが、菌の生育適温を超える時間帯が長く、降水量は平年並かやや少なかったため、多発には至らなかった。	多窒素栽培を避けるなどの耕種的防除、薬剤による防除を組み合わせ実施している。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	ばか苗病	平年：遅 前年：－	平年：多 前年：－	一部地域で散発程度の発生が確認された。	平年の発生量が非常に少ないため、一部で散発程度の発生であっても、平年比は多となる。	温湯消毒の実施と育苗苗処理剤の励行を実施。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	もみ枯細菌病	平年：早 前年：－	平年：多 前年：－	平年より早い8月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は9月が最大となった。発生量は平年より多かった。	8月中旬の降水量が多く、その時期に出穂した作期・品種で散発～少程度の発生が見られた。平年の発生量が少ないため、少発生でも平年比は多となる。	種子更新と種子消毒の徹底について情報発信を実施した。また普及している箱施用薬剤の中には、本病に有効な薬剤がある。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	縞葉枯病	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：並	平年より遅い8月第2半旬に初発生を確認し、発生面積は8月が最大となった。発生量は、平年よりやや少なかった。	本作型では、近年感受性品種から抵抗性品種への転換が急速に進んでいる。また、ヒメトビウンカ越冬世代幼虫の保毒虫率は過去10年で最も低く、ヒメトビウンカの本田での発生量もやや少なかったため、本病の発生もやや少となった。	ほぼ抵抗性品種となっている。保毒虫率及びまほ場の生息密度の調査結果を発表し、感受性品種を作付けている場合は防除に取り組むよう呼びかけている。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	稲こうじ病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	7月中旬～8月上旬が高温少雨であり、本病の感染に好適な気象条件ではなかった。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	※ごま葉枯病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	過去10年で1年のみ散発程度の発生だったため、無発生が平年並となる。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	※白葉枯病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	過去10年で1年のみ散発程度の発生だったため、無発生が平年並となる。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていないが、普及している箱施用剤には細菌病に有効なものがある。
水稻 (普通植) 5月下旬以降の移植	ニカメイガ	平年：早 前年：早	平年：並 前年：少	平年より早い7月第3半旬に初発生を確認したものの、発生は散発にとどまった。本年は予察灯誘殺数が平年より多かったが、本田での発生量は平年並であった。	本作型では米麦二毛作が多く、米収穫後すぐに耕耘するため、平年の発生量が非常に少ない。散発1か所で平年並の発生となる。	絶対量としてはそれほど多くなく、減収につながる被害とはなっていないため、他の害虫との同時防除で対応している。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	セジロウンカ	平年：早 前年：早	平年：並 前年：やや少	平年より早い7月第2半旬に初発生を確認し、発生面積は8月が最大となった。発生量は、平年並だった。	本田の初発生は早かったが、予察灯への誘殺は平年より遅く、誘殺数もかなり少なかった。飛来予測日数も少なかったが、南方系のため、7月以降の異常高温で定着促進され、平年並の発生量となったと推察される。	セジロウンカ・トビイロウンカの飛来予測日数の動向を15日おきに発表し、注意喚起した。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	トビイロウンカ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	本田での発生は確認されなかったが、予察灯への誘殺は過去10年で最も多かった。	飛来予測日数は2日と少なかったが、実際の飛来日数はもっと多かったと推察される。しかし、1回当たりの飛来数が少なかったため、本田定着には至らなかったと考えられる。	セジロウンカ・トビイロウンカの飛来予測日数の動向を15日おきに発表し、注意喚起した。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	ヒメトビウンカ	平年：遅 前年：やや早	平年：やや少 前年：並	平年より遅い6月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	5月に調査した麦ほ場での成幼虫密度は過去10年で2番目に高かったが、7月～9月の異常高温により発育が抑制され(発育上限29℃、発育停止40℃)、発生量はやや少となった。	保毒虫率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、防除に取り組むよう呼びかけている。ウンカ類に対する育苗箱施用薬剤の使用を徹底している。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	ツマグロヨコバイ	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：並	平年より遅い6月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は9月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	予察灯誘殺数も平年より少なかった。原因は定かではないが、在来種のため、夏期の長期にわたる異常高温が影響した可能性は否めない。	ヒメトビウンカに対する育苗箱施用薬剤の使用徹底により、ヨコバイ類への防除も同時に行われている。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	斑点米カメムシ類	平年：並 前年：やや早	平年：多 前年：並	平年並の6月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は7月に最大となったが、9月まで同程度の発生面積が継続した。発生量は平年より多かった。	7月中旬実施の畦畔及び雑草地における県内一斉調査では、過去10年で最も多かった。7月下旬に注意報を発表したが、本作型の防除時期より1か月早かったため防除圧が高まらなかった。また、7月、9月の高温少雨で発生が助長された。	斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査及び防除情報を発表し、注意喚起した。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	イチモンジセセリ	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年より遅い8月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は9月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	夏期の長期にわたる異常高温により発生が抑制され(本虫は30℃以上で若齢幼虫の生育遅延や老齢幼虫の死滅が報告されている)、発生量はやや少にとどまった。	生育予測システムを活用して第2世代幼虫孵化最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	フタオビコヤガ	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	弱齢幼虫は高温・乾燥に弱いため、7月中旬～8月上旬の高温少雨により発生が抑制された。	生育予測システムを活用して第2世代成虫最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	コブノメイガ	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	減収につながる被害とはなっていないため他の害虫との同時防除で対応している。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	イネミズゾウムシ	平年：－ 前年：並	平年：やや少 前年：－	5月第6半旬に一部地域で散発程度の発生を確認したが、その後の発生は見られなかった。	従来からこの作型ではあまり発生が見られない。	この作型ではあまり発生が見られないため、特に防除はしていない。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	スクミリンゴガイ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生量は平年並だったが、一部に壊滅的被害を受けたほ場が見られた。	本県では、冬季の低温が本種の越冬を阻害するため、常発地帯は限られている。1月～4月が高温傾向で経過したため、前年発生の多かった地域の越冬個体数が多かったと推察される。前年被害が多かった地域で、本年休耕したほ場の近接ほ場で、ほとんど欠株となったほ場が数筆見られた。近接ほ場でもほとんど被害がなかったほ場もあるので、防除対策を怠ったほ場が集中的に加害されたものと思われる。	耕種の防除が中心であるが、常発地帯では薬剤防除も実施されている。薬剤防除に助成する地域防除協議会もある。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	※イネドロオイムシ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	過去10年で1年のみ散発程度の発生だったため、無発生が平年並となる。	特に防除はしていないが、普及している箱施用剤には、コウチュウ目に有効なものもある。
麦	黒さび病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
麦	赤さび病	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：多	平年より遅い4月第6半旬に初発を確認し、発生面積は5月が最大となった。発生量は平年並だった。	2～3月の高温によりムギが軟弱に生育し、同時期の降水量も多かったものの、昨年の発生量が少なかったため、菌密度が低く、発生は一部のほ場にとどまった。	赤かび病との同時防除可能な薬剤の選択。
麦	黄さび病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
麦	小さび病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
麦	うどんこ病	平年：遅 前年：遅	平年：多 前年：並	平年より遅い4月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は5月に最大となった。発生量は平年より多かった。	昨年の発生量が多かったため、菌密度が高く、3月の高温多雨でムギが軟弱に生育したことにより発生が助長された。	赤かび病の防除で同時防除されている。
麦	赤かび病	平年：やや早 前年：早	平年：並 前年：少	平年よりやや早い5月第3半旬に初発生を確認し、発生量は平年並であった。	4月15日以降の赤かび病子のう胞子飛散好適日の出現日数は平年よりやや多かったが、大小麦とも出穂が早く、4月第3半旬までに開花したため、抵抗性の弱い品種のみの発生となった。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
麦	黒穂病類	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	種子更新、種子消毒を実施している。
麦	黒節病	平年：やや遅 前年：遅	平年：やや少 前年：多	平年よりやや遅い3月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は5月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	種子消毒の不徹底により、一部地域にて発生した。	種子更新、種子消毒を実施している。
麦	オオムギ縞萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	近年、抵抗性品種や「彩の星」の導入より発生が極少となっている。
麦	コムギ縞萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	近年、抵抗性品種「さとのそら」の導入より発生が極少となっている。
麦	オオムギ斑葉病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
麦	アブラムシ類	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：少	平年より早い11月第6半旬に初発生を確認し、冬期は発生がおさまったものの、4月から再発生し、発生面積は5月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	暖冬傾向であったため、初発は平年より早まったものの、再発生時期である3月中下旬にまとまった降雨があったため、発生が抑制された。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。
麦	ムギダニ	平年：遅 前年：－	平年：やや少 前年：－	平年より遅い4月第3半旬に、初発生を確認した。発生量は平年よりやや少なかった。	第1世代虫が発生する2月上旬及び第2世代虫が発生する3月中下旬にまとまった降雨があったため、散発程度の発生にとどまった。	本害虫による被害は稀なため防除対策は実施していない。
麦	シロトビムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
かんしょ	つる割病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	苗の消毒、土壌消毒を実施している。
かんしょ	立枯病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	苗の消毒、土壌消毒を実施している。
かんしょ	イモキバガ (イモコガ)	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	9月第3半旬に初発が確認されたが、防除により、ほとんど被害は出なかった。	6～10月の高温で発生が促進された。	ハスモンヨトウを対象とした防除により同時防除されている。
かんしょ	ナカジロシタバ	平年：早 前年：－	平年：多 前年：－	6月第6半旬に初発が確認された。その後も継続して発生が見られたため、平年よりも発生量は多かった。防除により被害は拡大しなかった。	6～10月の高温で発生が促進された。	ハスモンヨトウを対象とした防除により同時防除されている。
かんしょ	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：早	平年：並 前年：－	6月第6半旬に初発が確認されたが、防除により、ほとんど被害は出なかった。	6～10月の高温で発生が促進された。	薬剤防除を実施している。
かんしょ	食葉性チョウ目幼虫	平年：遅 前年：遅	平年：－ 前年：少	10月第1半旬に初発が確認された。その後食害は増えたが、収穫間際だったため収量に影響は無かった。	6～10月の高温で発生が促進された。	ハスモンヨトウを対象とした防除により同時防除されている。
大豆	紫斑病	平年：遅 前年：－	平年：－ 前年：－	収穫期の子実調査で、一部地域で散発程度の発生が確認された。	本県の奨励品種である「里のほほえみ」は本病への強い抵抗性を持つため、偶発的に発生したものと考えられる。	奨励品種が紫斑病に強い「里のほほえみ」に切り替わった。種子消毒、無人ヘリによる一斉防除を実施している。
大豆	立枯性病害	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	一部地域で散発程度の発生が確認された。	種子消毒の不徹底により、一部地域にて発生した。	種子消毒を実施している。
大豆	べと病	平年：やや早 前年：早	平年：やや多 前年：並	平年よりやや早い8月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は10月に最大となった。発生量は平年よりやや多かった。	主力品種が感受性の「里のほほえみ」や在来品種のため、発生が増加傾向にある。7月中下旬の少雨により、播種・生育が順調に進み、感染しやすい生育ステージで8月中旬の降雨を受けたため、発生時期は平年よりやや早くなった。9月上旬は台風接近等の影響で、曇雨天が継続したため、発生が助長された。	種子更新、ほ場内の残さ処理による耕種的防除を実施している。
大豆	葉焼病	平年：早 前年：早	平年：並 前年：少	平年より早い8月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は10月に最大となった。発生量は平年並であった。	8月中旬と9月上旬の降雨日が多く、高温傾向が続いたため、発生が助長された。	種子更新、ほ場内の残さ処理による耕種的防除を実施している。
大豆	ウイルス病	平年：遅 前年：遅	平年：多 前年：並	収穫期の子実調査で、一部地域で褐斑粒の発生が確認された。生育期のモザイク葉は確認されなかった。	8月上旬は高温少雨傾向で経過したためアブラムシ類の発生が助長されたが、8月中旬と9月上旬のまとまった降雨によって発生が抑制された。しかし、本ウイルスに感染していた株が一部存在したのと考えられる。発生の絶対量としては多くないものの、発生が過去10年間で昨年のみであったため、発生量は平年より多くなった。	－
大豆	萎疫病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
大豆	アブラムシ類	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：－	平年より早い8月第1半旬に、一部地域で発生を確認したが、その後の発生は見られなかった。	8月上旬は高温少雨傾向で経過したためアブラムシ類の発生が助長されたが、8月中旬と9月上旬のまとまった降雨によって、発生が抑制されたため、極少発生にとどまった。	は種時の薬剤処理と適期防除を実施している。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
大豆	コガネムシ類	平年：並 前年：早	平年：少 前年：少	平年より早い8月第1半旬に、一部地域で発生を確認したが、その後の発生は見られなかった。	発生量が少なかった原因は定かではないが、在来種のため夏期の長期にわたる異常高温が影響した可能性は否めない。	本害虫による被害は稀なため防除対策は実施していない。
大豆	ハスモンヨトウ	平年：早 前年：やや早	平年：やや少 前年：やや少	平年より早い8月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は9月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	フェロモントラップでの誘殺数が近年減少傾向にあり、ほ場でもオオタバコガ、シロイチモジヨトウが優占し、本種は減少している。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。
大豆	食葉性チョウ目幼虫	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：並	本年は平年より早い7月第4半旬から発生が確認され、発生面積は10月に最大となった。発生量は平年よりやや多かった。	6月～9月の高温少雨傾向により、オオタバコガ、シロイチモジヨトウのフェロモントラップ誘殺数が平年より大幅に増加し、ほ場での発生も助長された。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。オオタバコガは注意報を発表し、防除を呼びかけた。
大豆	ダイズサヤタマバエ	平年：遅 前年：遅	平年：少 前年：少	収穫期の子実調査で、一部地域で散発程度の発生が確認された。	9月上旬の降雨によって発生が抑制された可能性がある。また、在来種のため夏期の長期にわたる異常高温が影響した可能性は否めない。	本害虫による被害は稀なため防除対策は実施していない。
大豆	マメシクイガ	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：並	平年より早い9月第3半旬に、一部地域で被害莢が確認された。発生量は平年よりもやや多かった。	大規模粗放栽培のほとんど防除を行っていない調査地点において、ほ場調査で成虫が確認できるほどの発生だったため、子実調査では甚発生となり、平年よりやや多い発生となった。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。
大豆	シロイチモジマダラメイガ	平年：早 前年：早	平年：並 前年：多	平年より早い8月第6半旬に、一部地域で被害莢が確認された。発生量は平年並であった。	初発生以降被害の進展は見られず、被害莢が認められた調査地点の子実調査でも少発生にとどまった。被害莢が確認できなかった調査地点でも、子実調査では散発程度の発生が認められたため、全体としては平年並の発生となった。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。
大豆	吸実性カメムシ類	平年：早 前年：早	平年：多 前年：並	平年より早い8月第4半旬に初発生を確認し、9月中旬以降にミナミアオカメムシが優占してから発生面積が拡大した。発生量は平年より多かった。	近年、他種の寄生が減少する9月中旬から収穫期近くまで寄生するミナミアオカメムシが急速に増加しており、9月～11月上旬まで高温に経過したため、子実被害が助長された。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。
大豆	フタスジヒメハムシ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	播種時期の遅れ等により、本種第1世代虫の発生時期とダイズの生育ステージがずれている可能性が考えられる。	本種を対象とした防除は行われていないが、他の害虫と同時防除されている。
大豆	ウコンノメイガ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生が確認されなかった。	－	－
なし	黒斑病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生が確認されなかった。	－	－
なし	黒星病	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：並	平年より早い4月第4半旬に初発を確認したが、8月以降は発生が確認されなかったため、発生量は平年よりやや少なかった。	前年の秋の発生量が少なかったため、春の発生量が少なくなり、高温で推移したため発生が抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	赤星病	平年：早 前年：早	平年：並 前年：多	平年より早い4月第4半旬に初発を確認した。その後平年並で推移したが、前年より発生量は多かった。	3月に高温少雨となったため発生が早まり、5月以降も高温多雨が続いたため前年より発生が多かった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	うどんこ病	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：やや多	平年より早い8月第1半旬に初発を確認した。発生量は平年よりやや多かった。	8月は収穫最盛期にあたるため、適期防除が難しく発生量が増加した。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	輪紋病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
なし	シクイムシ類	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：少	平年より遅い9月第3半旬に初発を確認したが、その後は発生が確認されなかった。	全体的に防除対策が行われており、発生は一部にとどまった。	フェロモントラップデータを県のウェブサイトに掲載し、注意喚起と適期防除を呼びかけた。
なし	ハマキムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
なし	ハダニ類	平年：早 前年：並	平年：やや多 前年：並	平年より早い5月第1半旬に初発を確認した。その後発生量は平年よりやや多く推移した。	6月から9月にかけての高温により発生が助長され、平年よりやや多くなった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	カイガラムシ類	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：並	平年並みの9月第3半旬に初発を確認した。その後発生量は平年よりやや少なくて推移した。	全体的に防除対策が行われており、発生は一部にとどまった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	アブラムシ類	平年：早 前年：早	平年：並 前年：やや多	平年より早い3月第3半旬に初発を確認した。その後平年並みで推移した。	3月の高温により平年よりも早く発生が見られた。その後防除対策が取られ平年並の発生に落ち着いた。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	ニセナシサビダニ	平年：早 前年：早	平年：多 前年：多	平年より早い5月第1半旬に初発を確認した。その後徐々に発生が増え、平年より多い発生量となった。	3月・4月の高温が発生を早め、6月以降高温で発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
なし	果樹カメムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	果実被害の発生が確認されなかった。 フェロモントラップ等による調査では7月 から8月の発生が多いが、8月から9月の 発生が多かった。	7月から8月にかけての顕著な高温はか えって発生を抑制した。また、カメムシ の種類により発生消長が異なった。	フェロモントラップデータを県の ウェブサイトに掲載し、注意喚起 と適期防除を呼びかけた。
茶	炭そ病	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	二番茶摘採以降、7月第3半句から8月第4 半句にかけて発生が見られた。ほ場ごと の発生量は少なく、発生地域も限定的で あったため、平年に比べやや少となっ た。	8月第6半句から9月第1半句の少雨の影響 により発生は落ち着いた。	発生予察情報等の防除指導によ り、適期防除を実施した。
茶	もち病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	越冬菌密度が低く、適切に防除されてい るためと思われる。	－
茶	輪斑病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	適切な防除が行われているため発生が抑 えられている。	－
茶	チャノコカクモン ハマキ	平年：早 前年：並	平年：やや少 前年：少	フェロモントラップでの調査では、越冬 世代成虫、第1世代成虫の発生は平年よ りも早かった。発生量は7月中旬以降減 少し第2世代成虫は大きく下回った。幼 虫は、期間を通じて茶園での発生はほと んど見られなかった。	適切な防除が行われているため発生が抑 えられている。	フェロモントラップデータを県の ウェブサイトに掲載し、注意喚起 と適期防除を呼びかけた。
茶	チャハマキ	平年：早 前年：並	平年：並 前年：やや少	フェロモントラップでの調査では、越冬 世代成虫、第1世代成虫の発生は平年よ りも早かった。発生量は7月中旬以降減 少し第2世代成虫は大きく下回った。幼 虫は、茶園での発生は平年よりも早かつ た。8月第1半句以降は発生量は減少し たが、一部の園では10月第6半句以降の発 生量が増えた。	夏期の高温の影響や、一番茶・二番茶の 摘採、その後の整枝作業により物理的に 除去され個体数が減ったことによると思 われる。	フェロモントラップデータを県の ウェブサイトに掲載し、注意喚起 と適期防除を呼びかけた。
茶	チャノホソガ	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：－	フェロモントラップでの調査では、越冬 世代成虫は平年よりも早かった。発生量 は7月中旬以降減少し、第3世代成虫の発 生はほとんど見られなかった。幼虫は、 期間を通じて茶園での発生はなかった。	適切な防除が行われているため発生が抑 えられている。	フェロモントラップデータを県の ウェブサイトに掲載し、注意喚起 と適期防除を呼びかけた。
茶	チャノミドリヒメ ヨコバイ	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：少	期間を通じて発生はあまり見られなかつ た。	適切な防除が行われているため発生が抑 えられている。	発生予察情報等の防除指導によ り、適期防除を実施した。
茶	カンザワハダニ	平年：早 前年：早	平年：並 前年：並	2月第1半句から発生は見られたが、二番 茶摘採後は発生は見られなくなった。	一番茶や二番茶の摘採、一番茶摘採後の 深刈りにより、物理的に除去されたほ か、適切な防除により発生は抑えられ た。	発生予察情報等の防除指導によ り、適期防除を実施した。
茶	チャノキイロアザ ミウマ	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：少	9月第1半句から発生が見られる園が増 え、10月第1半句には発生量が多い園も 見られたが、その後発生量は落ち着い た。	3月の高温により平年よりも早く発生が 見られたが、適切な防除により発生は抑 えられた。	発生予察情報等の防除指導によ り、適期防除を実施した。
茶	ツマグロアオカス ミカメ	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：－	発生が確認されなかった。	適切な防除が行われているため発生が抑 えられている。	発生予察情報等の防除指導によ り、適期防除を実施した。
茶	クワシロカイガラ ムシ	平年：やや早 前年：並	平年：やや少 前年：少	有効積算温度によるふ化予測では、第1 世代幼虫のふ化最盛期は5月11日（平年 より15日早い）、第2世代は7月16日（平 年より8日早い）、第3世代は9月16日 （平年より3日遅い）となった。	冬季に散布する防除薬剤の普及により発 生量は減少している。	発生予察情報等の防除指導によ り、適期防除を実施した。
茶	ヨモギエダシャク	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	本県での発生は少なく、適切に防除され ていると思われる。	－
茶	チャトゲコナジラ ミ	平年：やや早 前年：早	平年：並 前年：並	裾葉に定着していたが、発生はごくわず かである。	適切な防除が行われているため発生が抑 えられている。	－
冬春トマト (長期一作)	疫病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春トマト (長期一作)	灰色かび病	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：多	平年並の1月第4半句に初発を確認し、そ の後も発生が継続したが少なかったた め、発生量は平年よりやや少なくなっ た。	2月は平年より日照時間が多く、2～4月 が高温だったことから、ハウス内湿度が 上がりにくなり発生が抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が 実施されている。また、施設内の 湿度管理対策として循環扇の導入 が図られている。
冬春トマト (長期一作)	葉かび病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	抵抗性品種の普及により発生は抑制され ている。	抵抗性品種の導入とあわせ薬剤抵 抗性を考慮した薬剤散布が実施さ れている。また、施設内の湿度管 理対策として循環扇の導入が図ら れている。
冬春トマト (長期一作)	青枯病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	抵抗性台木が利用されている。ま た、土壌消毒が実施されている。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
冬春トマト (長期一作)	黄化葉巻病	平年：早 前年：並	平年：やや少 前年：少	平年より早い11月第1半旬に初発を確認し、その後も発生が継続したが、発生量は平年よりやや少なくなった。	一部のほ場でウイルス媒介虫の侵入防止対策が不十分であったため、発生が増加した。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。一部ほ場で耐病性品種が導入されている。
冬春トマト (長期一作)	うどんこ病	平年：遅 前年：遅	平年：やや多 前年：多	平年より遅い12月第6半旬に初発を確認し、4月中旬以降に発生量が増加したため、発生量は平年よりやや多くなった。	平年より4～5月の日射量が多く、ハウス内湿度が低下したため、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春トマト (長期一作)	萎ちょう病類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	抵抗性品種が導入されている。	土壌病害に共通した土壌消毒等の対策がとられている。
冬春トマト (長期一作)	黄化えそ病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春トマト (長期一作)	すすかび病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春トマト (長期一作)	アザミウマ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春トマト (長期一作)	コナジラミ類	平年：早 前年：並	平年：やや多 前年：多	平年より遅い10月第4半旬に初発を確認し、1月以降発生が増加し継続したため、発生量は平年よりやや多くなった。	一部のほ場で侵入防止対策が不十分であった。また、2～4月の高温により、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春トマト (長期一作)	ハモグリバエ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春トマト (長期一作)	アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春トマト (長期一作)	トマトサビダニ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春トマト (長期一作)	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春トマト (長期一作)	オオタバコガ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
夏秋ナス	うどんこ病	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：少	平年より早い5月第4半旬に初発を確認し、7月中旬以降に発生量が増加したため、発生量は平年よりやや多くなった。	7～9月の高温少雨により、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋ナス	灰色かび病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
夏秋ナス	すすかび病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
夏秋ナス	褐紋病	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：多	平年より早い5月第4半旬に初発を確認し、その後発生量が増加したため、発生量は平年よりやや多くなった。	5～6月の多雨により、発生が助長された。	－
夏秋ナス	褐色腐敗病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
夏秋ナス	半身萎ちょう病	平年：早 前年：早	平年：多 前年：やや少	平年より早い5月第6半旬に初発を確認し、一部ほ場で発生が多くなった。その後も発生が継続したため、発生量は平年より多くなった。	一部のほ場で連作により発生が増加した。	抵抗性台木が利用されている。
夏秋ナス	青枯病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	抵抗性台木が利用されている。
夏秋ナス	半枯病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
夏秋ナス	アザミウマ類	平年：早 前年：遅	平年：多 前年：やや多	平年より早い5月第1半旬に初発を確認。6月に発生量が急増し、その後も発生が継続したため、発生量は平年より多くなった。	6～10月の高温により、発生が助長された。	天敵への影響や薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋ナス	オオタバコガ	平年：早 前年：早	平年：多 前年：多	平年より早い5月第4半旬に初発を確認し、その後8月に発生量が急増したため、発生量は平年より多くなった。	7～9月の高温少雨により、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋ナス	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：遅	平年：並 前年：－	前年より遅い10月第1半旬に初発を確認したが、その後発生は確認されず、発生量は平年並となった。	全体的には防除対策が十分行われており、発生は収穫期後半に防除圧が低下した一部のほ場にとどまった。	－
夏秋ナス	ハモグリバエ類	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
夏秋ナス	アブラムシ類	平年：早 前年：遅	平年：多 前年：多	平年より早い5月第1半旬に初発を確認し、その後発生量が急増したため、発生量は平年より多くなった。	4月の高温により発生時期が早まった。また、6月以降も顕著な高温が継続したため、発生量が多くなった。	－

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
夏秋なす	ハダニ類	平年：早 前年：遅	平年：多 前年：並	平年より早い5月第1半旬に初発を確認し、その後も発生量の多い状態が継続したため、発生量は平年より多くなった。	4月の高温により発生時期が早まった。また、6月以降も顕著な高温が継続したため、発生量が多くなった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	ホコリダニ類	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年より遅い10月第1半旬に初発を確認したが、発生量の少ない状態が継続したため、発生量は平年よりやや少なくなった。	全体的には防除対策が十分行われており、発生は収穫期後半に防除圧が低下した一部のほ場にとどまった。	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	べと病	平年：遅 前年：遅	平年：少 前年：少	平年より遅い10月第1半旬に初発を確認したが、その後発生量の少ない状態が継続したため、発生量は平年より少なくなった。	10～11月は平年より日照時間が長く、高温であったため、ハウス内湿度が上がりにくくなり発生が抑制された。	抵抗性品種の導入と、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	炭疽病	平年：— 前年：—	平年：— 前年：—	発生は確認されなかった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	うどんこ病	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年より遅い10月第1半旬に初発を確認したが、発生量の多いほ場は一部であったため、発生量は平年よりやや少なくなった。	全体的には防除対策が十分行われており、発生は収穫期後半に防除圧が低下した一部のほ場にとどまった。	抵抗性品種の導入と、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	斑点細菌病	平年：— 前年：—	平年：— 前年：—	発生は確認されなかった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	モザイク病	平年：— 前年：—	平年：並 前年：—	発生は確認されなかった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	灰色かび病	平年：— 前年：—	平年：並 前年：—	発生は確認されなかった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	褐斑病	平年：遅 前年：早	平年：やや少 前年：少	平年より遅い9月第5半旬に初発を確認したが、発生量の多いほ場は一部であったため、発生量は平年よりやや少なくなった。	9～11月は平年より日射量が多く、高温であったため、ハウス内湿度が上がりにくくなり発生が抑制された。	抵抗性品種の導入と、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	菌核病	平年：— 前年：—	平年：並 前年：—	発生は確認されなかった。	—	作付前の太陽熱消毒等により伝染源である菌核の死滅が図られている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	黄化えそ病	平年：早 前年：遅	平年：多 前年：多	平年より早い9月第3半旬に初発を確認し、その後発生量の多い状態が継続したため、発生量は平年より多くなった。	9～11月の高温によりウイルス媒介虫が増加し、発生が助長された。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	退緑黄化病	平年：遅 前年：並	平年：並 前年：並	平年より遅い10月第1半旬に初発を確認し、その後発生量が急増したが、発生量の多いほ場は一部であったため、発生量は平年並となった。	8～11月の高温によりウイルス媒介虫が増加し、一度感染株が発生したハウス内では継続的に感染が継続したものの、防除圧の高いハウスでは発生しなかった。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	アザミウマ類	平年：早 前年：遅	平年：多 前年：多	平年より早い9月第3半旬に初発を確認し、その後発生量の多い状態が継続したため、発生量は平年より多くなった。	9～11月の高温により、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	コナジラミ類	平年：遅 前年：早	平年：やや多 前年：並	平年より遅い8月第3半旬に初発を確認し、その後発生量の多い状態が継続したため、発生量は平年よりやや多くなった。	8～11月の高温により、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	ハモグリバエ類	平年：早 前年：並	平年：並 前年：少	平年より早い9月第3半旬に初発を確認したが、発生量の多いほ場は一部であったため、発生量は平年並となった。	9～11月の高温により発生が助長されたが、発生は一部ハウスに留まった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	ハダニ類	平年：— 前年：遅	平年：並 前年：—	前年より遅い11月第1半旬に初発を確認したが、その後発生が確認されなかったため、発生量は平年並となった。	一部ハウスで発生が確認されたが、発生確認後に防除が行われ、発生は一時的なものとなった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	アブラムシ類	平年：— 前年：—	平年：やや少 前年：—	発生は確認されなかった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	ハスモンヨトウ	平年：— 前年：早	平年：並 前年：—	前年より早い10月第1半旬に初発を確認したが、その後発生が確認されなかったため、発生量は平年並となった。	一部ハウスで発生が確認されたが、発生確認後に防除が行われ、発生は一時的なものとなった。	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	食葉性チョウ目幼虫	平年：遅 前年：遅	平年：— 前年：—	平年より遅い9月第3半旬に初発を確認したが、発生量の多いほ場は一部であった。	9～11月の高温により発生が助長されたが、発生は一部ハウスに留まった。	—
冬春きゅうり (促成栽培)	べと病	平年：遅 前年：早	平年：やや少 前年：多	平年より遅い2月第4半旬に初発を確認したが、その後発生量の少ない状態が継続したため、発生量は平年よりやや少なくなった。	2～5月は3月を除いて平年より日射量が多く、高温であったため、ハウス内湿度が上がりにくくなり発生量の少ない状態が継続した。	抵抗性品種の導入と、施設内の湿度管理対策として循環扇の導入が図られている。また、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	炭疽病	平年：— 前年：—	平年：— 前年：—	発生は確認されなかった。	—	—

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
冬春きゅうり (促成栽培)	うどんこ病	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：並	平年より早い1月第4半旬に初発を確認したが、発生の多いほ場は一部であったため、発生量は平年よりやや多い程度となった。	一部定植時期の早いハウスで成り疲れして発生したものの、適正な湿度管理や適期防除が行われ、発生が抑制された。	抵抗性品種の導入と、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	斑点細菌病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	モザイク病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	灰色かび病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	2月第4半旬に初発を確認したが、発生が確認されたほ場は一部であったため、発生量は平年よりやや少なくなった。	一部ハウスで発生が確認されたが、発生確認後に防除が行われ、発生は一時的なものとなった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	褐斑病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	抵抗性品種が導入されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	菌核病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	作付後の太陽熱利用等による土壌消毒を行っている。
冬春きゅうり (促成栽培)	黄化えそ病	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：少	平年より早い1月第4半旬に初発を確認したが、発生が確認されたほ場は一部であったため、発生量は平年よりやや少なくなった。	一部ハウスで発生が確認されたが、発生確認後に感染株の抜き取りが行われ、発生は一時的なものとなった。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。
冬春きゅうり (促成栽培)	退緑黄化病	平年：早 前年：早	平年：並 前年：並	平年より早い3月第1半旬に初発を確認したが、発生が確認されたほ場は一部であったため、発生量は平年並となった。	3月の高温によりウイルス媒介虫が増加し、一度感染株が発生したハウス内では継続的に感染が継続したものの、防除圧の高いハウスでは発生しなかった。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。
冬春きゅうり (促成栽培)	アザミウマ類	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：多	平年より遅い4月第4半旬に初発を確認したが、その後発生量の少ない状態が継続したため、発生量は平年よりやや少なくなった。	4月の高温によりハウスへの飛込が増えたが、発生確認後に防除が行われ、発生が抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春きゅうり (促成栽培)	コナジラミ類	平年：早 前年：早	平年：並 前年：多	平年より早い3月第3半旬に初発を確認したが、発生が確認されたほ場は一部であったため、発生量は平年並となった。	3～4月の高温によりハウスへの飛込が増えたが、発生確認後に防除が行われ、発生は一時的なものとなった。	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春きゅうり (促成栽培)	ハモグリバエ類	平年：早 前年：早	平年：多 前年：多	平年より早い3月第3半旬に初発を確認し、5月に発生量が急増したため、発生量は平年より多くなった。	3～4月の高温によりハウスへの飛込が増え、収穫期後半に防除圧が低下した一部のほ場で発生が助長された。	施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春きゅうり (促成栽培)	ハダニ類	平年：遅 前年：やや早	平年：並 前年：やや少	平年より遅い4月第6半旬に初発を確認したが、発生が確認されたほ場は一部であったため、発生量は平年並となった。	定期的な薬剤散布により、発生時期を栽培終了間際まで遅らせることができた。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
冬春きゅうり (促成栽培)	アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	食葉性チョウ目幼虫	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	2月第3半旬に初発を確認したが、発生は一時的であった。	一部ハウスで発生が確認されたが、発生確認後に防除が行われ、発生は一時的なものとなった。	－
冬春きゅうり (促成栽培)	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
ブロッコリー	黒腐病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	細菌病共通の対策として薬剤散布が行われている。
ブロッコリー	べと病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	9～10月の高温少雨で発生が抑制された。	育苗時からの防除対策が始動されている。
ブロッコリー	軟腐病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	細菌病共通の対策として薬剤散布が行われている。
ブロッコリー	花蕾腐敗病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	細菌病共通の対策として薬剤散布が行われている。
ブロッコリー	菌核病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	10月以降の少雨により発生が抑制された。	－
ブロッコリー	黒斑細菌病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	細菌病共通の対策として薬剤散布が行われている。
ブロッコリー	黒すす病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	9～10月の高温少雨で発生が抑制された。	育苗時からの防除対策が始動されている。
ブロッコリー	アブラムシ類	平年：早 前年：早	平年：多 前年：多	平年より早い9月第3半旬に初発を確認し、発生量は平年より多かった。	9月から12月は気温が高く、平年より長い期間で発生が見られた。	育苗～定植時のかん注処理剤が利用されている。他の病害虫との同時防除で対応している。
ブロッコリー	コナガ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
ブロッコリー	ハスモンヨトウ	平年：遅 前年：遅	平年：多 前年：多	平年より遅い10月第1半旬に初発を確認し、発生量は平年より多かった。	定植後はしばらく定植時に処理した薬剤による防除効果が続いていたが、10月～11月の高温の影響で発生が助長された。	育苗～定植時のかん注処理剤が利用されている。フェロモントラップによる発生状況を参考に、薬剤散布が実施されている。
ブロッコリー	オオタバコガ	平年：遅 前年：遅	平年：多 前年：－	平年より遅い10月第4半旬に初発を確認したが、その後の発生は見られなかった。発生量は平年より多かった。	7月～10月に高温により発生が助長された。フェロモントラップの誘殺数も平年より多かった。	フェロモントラップによる発生状況を参考に薬剤散布が実施されている。7、8月に注意報を発表し注意喚起と適期防除を呼び掛けた。
ブロッコリー	ヨトウガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
ブロッコリー	ハイマダラノメイガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
ブロッコリー	シロイチモジヨトウ	平年：やや遅 前年：遅	平年：－ 前年：多	平年よりやや遅い9月第3半旬に初発を確認し、発生量は前年より多かった。	7月～10月に高温により発生が助長された。フェロモントラップの誘殺数も平年より多かった。	フェロモントラップによる発生状況を参考に薬剤散布が実施されている。8、9月に注意報を発表し注意喚起と適期防除を呼び掛けた。
秋冬ねぎ	さび病	平年：早 前年：並	平年：やや多 前年：少	平年より早い5月第4半旬に初発を確認し、6月に急増したため、発生量は平年よりやや多くなった。その後の発生はなかったが、2月に一部ほ場で発生を確認した。	5月の多雨が発生を早めたが、7月以降は高温少雨が続いたため発生が抑制された。2月は暖冬の影響で一部ほ場で発生が確認された。	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	黒斑病	平年：早 前年：並	平年：並 前年：やや多	平年より早い6月第3半旬に初発を確認し、発生量は平年並となった。	梅雨の影響で一時的に多発したが、その後の少雨により抑えられた。その後秋季の高温により発生が増加した。	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
秋冬ねぎ	べと病	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：やや少	平年より早い6月第5半旬に初発を確認したが、その後は発生は確認されなかった。	梅雨の影響で一部地域で発生したが7月以降の少雨により発生が抑えられた。	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	軟腐病	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：並	平年より早い8月第1半旬に初発を確認した。その後発生量はやや多で推移した。	8月以降も気温条件は好適であったが、高温期に降水量が少なかったため、発生がやや抑制された。しかし、平年よりは多かった。	排水対策等の耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	小菌核腐敗病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	9～10月の少雨により発生が抑制された。	－

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
秋冬ねぎ	白絹病	平年：遅 前年：並	平年：やや多 前年：並	平年より遅い8月第4半旬に初発を確認した。平年よりやや多い発生であったが、9月までの発生となった。	8月の高温多湿が発生を助長させた。	耕種防除や薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	黒腐菌核病	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：並	平年より早い1月第1半旬に初発を確認したが、その後は発生が確認されなかった。	暖冬により発生が助長されたが、その後収穫期を迎えたため発生は一時的なものとなった。	土壌消毒と併せ、耕種防除や薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
秋冬ねぎ	シロイチモジヨトウ	平年：早 前年：遅	平年：多 前年：並	平年より早い7月第1半旬に初発を確認した。その後も継続して発生が確認されたため、発生量は平年より多かった。	6月～10月の高温により発生が助長され、12月まで発生が確認された。フェロモントラップ誘殺数も平年より多かった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。8、9月に注意報を発表し注意喚起と適期防除を呼び掛けた。
秋冬ねぎ	アブラムシ類	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：少	平年より早い4月第6半旬に初発を確認したがその後は収まった。10、11月にも発生を確認したが、発生量は平年並であった。	3～4月の高温で発生が助長された。	他の害虫との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	ネギハモグリバエ	平年：早 前年：遅	平年：多 前年：並	平年並の7月第3半旬に初発を確認し、その後も継続して発生が確認されたため、発生量は平年より多かった。	6月～10月の高温により発生が助長された。B系統の発生により被害が増加した。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	ネギアザミウマ	平年：早 前年：遅	平年：多 前年：並	平年より早い4月第6半旬に初発を確認し、その後も継続して発生が確認されたため、発生量は平年より多かった。	一年を通して高温で推移したため、発生が早く、発生量も多かった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	ネギコガ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
さといも	汚斑病	平年：遅 前年：－	平年：やや多 前年：－	8月第1半旬から9月第3半旬まで発生が見られたが、収量に大きな影響は与えなかった。	8月から9月の高温少雨の影響により、葉の老化が早まり発生が助長された。	－
さといも	疫病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	7月の高温少雨により発生が抑制された。	県内主要産地での防除に対する意識が高く、適期防除が行われ、発生は抑制された。ドローンでの薬剤散布が行われるなど防除が徹底された。
さといも	アブラムシ類	平年：早 前年：並	平年：並 前年：多	平年より早い5月第3半旬に初発が確認され、8月第1半旬まで発生が見られた。	5月からの高温で発生が促進されたが、薬剤による防除や天敵等の影響により、発生量は抑えられた。	疫病防除のため、薬剤散布回数が増加した。それに伴い、殺虫剤を散布する機会も増加した。
さといも	ハダニ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	6月第6半旬に初発が確認されたが、その後発生は見られなかった。	6月第6半旬の高温少雨により発生は促進されたが、その後の7月第1半旬の降雨により発生は抑制された。	－
さといも	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春ほうれんそう	べと病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春ほうれんそう	立枯病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春ほうれんそう	アブラムシ類	平年：早 前年：－	平年：並 前年：－	平年より早い11月第3半旬に初発を確認したが、その後は確認されなかった。発生量は平年並となった。	9月～11月にかけて気温が高く発生が助長されたが、適期防除により発生は抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した防除が実施されている。
冬春ほうれんそう	アザミウマ類	平年：遅 前年：－	平年：多 前年：－	平年より遅い11月第3半旬に初発を確認し、その後の発生は確認されなかったが、発生量は平年より多かった。	9月～11月にかけて気温が高く発生が助長されたが、適期防除により発生は抑制された。	播種時の粒剤施用をはじめ薬剤抵抗性を考慮した防除が実施されている。
冬春ほうれんそう	ハスモンヨトウ	平年：遅 前年：－	平年：多 前年：－	平年より遅い11月第3半旬に初発を確認し、その後の発生は確認されなかったが、発生量は平年より多かった。	9月～11月にかけて気温が高く発生が助長されたが、適期防除により発生は抑制された。	フェロモントラップによる発生状況を参考に薬剤散布が実施されている。
冬春ほうれんそう	ケナガコナダニ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春ほうれんそう	シロオビノメイガ	平年：遅 前年：遅	平年：－ 前年：多	平年より遅い11月第3半旬に初発を確認し、その後の発生は確認されなかったが、発生量は前年より多かった。	9月～11月にかけて気温が高く発生が助長されたが、適期防除により発生は抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した防除が実施されている。
いちご (育苗期)	灰色かび病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
いちご (育苗期)	うどんこ病	平年：－ 前年：やや早	平年：並 前年：－	前年よりやや早い5月第6半旬に初発を確認したが、その後は確認されず発生量は平年並となった	適切な肥培管理や適期防除が行われ、発生は一時的なものとなった。	－

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
いちご (育苗期)	炭そ病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	雨よけ施設での育苗と併せ、灌水方法の工夫等、耕種的対策がとられている。
いちご (育苗期)	萎黄病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
いちご (育苗期)	輪斑病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
いちご (育苗期)	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
いちご (育苗期)	アザミウマ類	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：－	前年並の5月第6半旬に初発を確認したが、その後の発生は確認されなかった。	適期防除が行われ、発生は抑制された。	－
いちご (育苗期)	アブラムシ類	平年：早 前年：並	平年：並 前年：並	平年より早い5月第2半旬に初発を確認したが、発生量は平年並となった。	3、4月の気温が高く、5月からの発生が見られたが、薬剤防除が行われ、発生は抑制された。	他の害虫との同時防除で対応している。
いちご (育苗期)	ハダニ類	平年：早 前年：やや早	平年：多 前年：並	平年より早い4月第6半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認され、発生量は平年より多かった。	6月から8月にかけての高温により発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (育苗期)	ホコリダニ類	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
いちご (育苗期)	コナジラミ類	平年：－ 前年：遅	平年：並 前年：－	前年より遅い5月第6半旬に初発を確認したが、その後は確認されず、発生量は平年並となった。	適切な防除が行われ一次的な発生にとどまった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	灰色かび病	平年：遅 前年：遅	平年：やや多 前年：やや少	平年より遅い1月第6半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認され発生量は平年よりやや多かった。	2月～3月の降雨が多かったため発生が助長され、発生が長引いた。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	うどんこ病	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：並	平年より遅い2月第1半旬に初発を確認したが、その後はわずかな発生にとどまったため、発生量は平年よりやや少なかった。	育苗期の6～8月の高温が発生を抑制し、定植後の発生が抑えられた。適正な肥培管理や適期防除が行われたため発生量はやや少にとどまった。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	炭そ病	平年：－ 前年：やや早	平年：やや少 前年：－	前年よりやや早い10月第6半旬に初発を確認したが、その後の発生は見られず、発生量は平年よりやや少なかった。	7月～9月にかけて降雨が少なかったため、発生が抑えられた。早期抜き取りや適期防除が行われたため、発生は一時的なものとなった。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	萎黄病	平年：－ 前年：やや早	平年：やや少 前年：－	前年よりやや早い10月第6半旬に初発を確認したが、その後の発生は見られず、発生量は平年よりやや少なかった。	早期抜き取りや適期防除が行われたため、発生は一時的なものとなった。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	輪斑病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
いちご (生育・収穫期)	ハスモンヨトウ	平年：並 前年：やや遅	平年：並 前年：－	平年並の10月第1半旬に初発を確認したが、その後の発生は確認されず、発生量は平年並となった。	一部ほ場で苗からの持ち込みによる発生が見られたが、その後防除され、発生は抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	アザミウマ類	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：少	平年より早い11月第6半旬に初発を確認し、その後も継続的に発生が確認されたが、発生量は平年並となった。	9月～12月にかけて高温で推移したため、一部ほ場で発生が確認された。終盤になるにつれ発生が見られるほ場が増したが、発生量は平年並にとどまった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	アブラムシ類	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：多	平年より早い10月第1半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認され発生量は平年よりやや多かった。	9月～2月まで気温が平年より高く推移したため、初発後も継続的に発生した。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布や、天敵の活用によるIPMが実施されている。
いちご (生育・収穫期)	ハダニ類	平年：やや早 前年：早	平年：少 前年：少	平年よりやや早い11月第1半旬に初発を確認し、その後も継続的に発生が確認されたが、発生量は平年より少なかった。	定植前の防除が徹底されたため、発生が少なかった。9月～2月にかけて気温が高かったが、天敵の活動も活発になり発生は抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布や、天敵の活用によるIPMが実施されている。
いちご (生育・収穫期)	ホコリダニ類	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
いちご (生育・収穫期)	コナジラミ類	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年より遅い11月第3半旬に初発を確認し、その後の発生も見られたが発生量は平年よりやや少なかった。	定植前の防除が徹底され、発生後も適期防除が行われたため、発生が抑えられた。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。

イ 令和5年度 病虫害発生程度別及び防除面積

作物名 (作付面積)	病虫害名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
早期水稻 13,500ha (5月中旬までの移植)	苗立枯病					-		
	苗いもち					-		
	葉いもち		1	60	1150	1211	6750	6750
	穂いもち				69	69	100	100
	紋枯病	1	23	352	2517	2893	10800	10800
	白葉枯病					-		
	ばか苗病					-	6750	6750
	イネシンガレセンチュウ				9	9		
	イネシンガレセンチュウ(種子消毒)					-	10800	10800
	もみ枯細菌病				9	9		
	もみ枯細菌病(種子消毒)					-	10800	10800
	ごま葉枯病				9	9		
	小粒菌核病					-		
	黄化萎縮病					-		
	縞葉枯病	2	49	534	2896	3481	6750	6750
	黒すじ萎縮病					-		
	萎縮病					-		
	黄萎病					-		
	稲こうじ病					-	10800	10800
	褐色菌核病					-		
	赤色菌核病					-		
	葉しょう褐変病					-		
	褐色葉枯病					-		
	苗立枯細菌病					-		
	ニカメイガ		1	44	944	989	6750	6750
	セジロウンカ			1	262	263	6750	6750
	トビイロウンカ					-	6750	6750
	ヒメビウンカ	1020	3986	5306	2277	12589	6750	6750
	ツマグロヨコバイ	218	794	2073	3684	6769	6750	6750
	イネハモグリバエ					-		
	イネミギワバエ					-		
	イネキモグリバエ					-		
	イネドロオイムシ				156	156	1300	1300
	イネゾウムシ					-		
	イネクロカメムシ					-		
	斑点米カメムシ類	45	262	1029	2812	4148	5400	5400
	イチモンジセセリ					-		
	フタオビコヤガ			1	262	263	1300	1300
	イネヨトウ					-		
	アワヨトウ					-		
	コブノメイガ					-		
	イネミズゾウムシ			6	595	601	1300	1300
	スクミリンゴガイ					-	30	30
普通期水稻 16,500ha (5月下旬以降の移植)	苗立枯病					-		
	苗いもち					-		
	葉いもち				164	164	13200	13200
	穂いもち		0	33	1229	1262	13200	13200
	紋枯病	34	291	1411	4135	5871	13200	13200
	白葉枯病					-		
	ばか苗病				32	32	6600	6600
	イネシンガレセンチュウ					-		
	イネシンガレセンチュウ(種子消毒)					-	13200	13200
	もみ枯細菌病		0	33	1229	1262		
	もみ枯細菌病(種子消毒)					-	13200	13200
	ごま葉枯病					-		
	小粒菌核病					-		
	黄化萎縮病					-		
	縞葉枯病		0	9	609	618	13200	13200
	黒すじ萎縮病					-		
	萎縮病					-		
	黄萎病					-		
	稲こうじ病					-	13200	13200

作物名 (作付面積)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
普通期水稻 (5月下旬以降の 移植)	褐色菌核病					-		
	赤色菌核病					-		
	葉しょう褐変病					-		
	褐色葉枯病					-		
	苗立枯細菌病					-		
	ニカメイガ				32	32	13200	13200
	セジロウンカ	3	74	761	3818	4656	13200	13200
	トビイロウンカ					-	13200	13200
	ヒメトビウンカ	5372	4985	3637	1440	15434	13200	13200
	ツマグロヨコバイ	117	485	1508	3471	5581	13200	13200
	イネハモグリバエ					-		
	イネミギワバエ					-		
	イネキモグリバエ					-		
	イネドロオイムシ					-	8250	8250
	イネゾウムシ					-		
	イネクロカメムシ					-		
	斑点米カメムシ類	964	1535	2611	3641	8751	8250	8250
	イチモンジセセリ				32	32	8250	8250
	フタオビコヤガ					-	8250	8250
	イネヨトウ					-		
	アワヨトウ					-		
	コブノメイガ					-	8250	8250
	イネミズゾウムシ					-		
	スクミリンゴガイ					-	30	30
麦 6,270ha	黒さび病					-		
	赤さび病		1	38	720	759	1250	1250
	黄さび病					-		
	小さび病					-		
	うどんこ病	137	314	691	1265	2407	1880	1880
	赤かび病				1	1	1880	1880
	雪腐病類					-		
	黒穂病類					-		
	黒節病					-		
	麦類縮萎縮病					-		
	小麦縮萎縮病					-		
	大麦縮萎縮病					-		
	雲形病					-		
	斑葉病					-		
	株腐病					-		
	立枯病					-		
	アブラムシ類				68	68	1250	1250
	ムギアカタマバエ					-		
	ハモグリバエ類					-		
	ムギダニ				1	1	1250	1250
かんしょ 365ha	かいよう病					-		
	つる割病					-	50	50
	立枯病					-	50	50
	イモキバガ					-	300	300
	ナカジロシタバ	6	81	190	82	359	300	300
	ハスモンヨトウ					-	300	300
	シロイチモジヨトウ					-		
	ヨツモンカメノコハムシ					-		
	コガネムシ類					-	150	200
大豆 657ha	紫斑病				1	1	330	330
	さび病					-		
	菌核病					-		
	立枯性病害				1	1	330	330
	炭そ病					-		
	黒とう病					-		
	べと病	10	42	112	192	356	330	330
	葉焼病	1	8	44	148	201	330	330
	モザイク病					-		

作物名 (作付面積)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
大豆	萎縮病					-		
	ウイルス病(わい化病除く)				1	1		
	わい化病					-		
	アブラムシ類					-		
	タネバエ					-		
	コガネムシ類				1	1	330	330
	ハスモンヨトウ		0	8	97	105	330	660
	食葉性チョウ目幼虫	23	148	278	150	599	330	660
	ハダニ類					-		
	ダイズサヤタマバエ				1	1	330	330
	マメヒメサヤムシガ					-		
	マメシンクイガ	19	37	75	127	258	330	330
	シロイチモジマダラメイガ		0	5	107	112	330	330
	吸葉性カメムシ類	32	180	279	117	608	330	660
	ウコンノメイガ					-		
	フタスジヒメハムシ					-		
	ヒメサヤムシ類	2	10	35	94	141	330	330
なし	375ha							
	黒斑病					-		
	黒星病				0	-	370	370
	赤星病			0	22	22	370	740
	うどんこ病	43	55	78	88	264	370	740
	輪紋病					-		
	ナシヒメシンクイ				0	-	370	1110
	モモシンクイガ					-		
	ナシマダラメイガ					-		
	ハマキムシ類					-		
	ハダニ類	29	43	69	89	230	370	1110
	カメムシ類					-	370	1850
	カイガラムシ類				0	-	370	370
	アブラムシ類	4	13	36	79	132	370	370
	ニセナシサビダニ		1	7	49	57	370	370
	吸ガ類					-		
	ナシチビガ					-		
茶	783ha							
	炭疽病		2	25	173	200	760	1520
	もち病					-		
	網もち病					-		
	輪斑病					-	760	1520
	チャノコカクモンハマキ		0	5	66	71	760	2280
	チャハマキ	3	18	75	201	297	760	2280
	チャノホソガ					-	760	2280
	チャノミドリヒメヨコバイ	0	5	47	219	271	760	2280
	カンザワハダニ	42	78	139	195	454	760	2280
	チャノキイロアザミウマ	0	5	47	219	271	760	2280
	ツマグロアオカスミカメ					-	760	2280
	クワシロカイガラムシ		0	5	66	71	760	1520
	ヨモギエダシヤク					-	760	760
	チャトゲコナジラミ		0	52	513	565	760	1520
冬春トマト	118ha							
	疫病					-		
	灰色かび病				2	2	110	330
	モザイク病					-		
	葉かび病					-		
	青枯病					-		
	萎ちょう病					-		
	うどんこ病	2	5	11	20	38	110	330
	黄化葉巻病				0	-	110	330
	アザミウマ類					-	110	330
	オオタバコガ					-	110	110
	コナジラミ類		0	4	17	21	110	330
	ハモグリバエ類					-		
	アブラムシ類					-	110	330
	トマトサビダニ					-		
	ハスモンヨトウ					-	110	110

作物名 (作付面積)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
夏秋なす 242ha	うどんこ病	0	2	15	58	75	200	600
	灰色かび病					-		
	褐紋病		0	5	31	36	200	200
	褐色腐敗病					-	200	600
	半身萎ちょう病	3	8	20	43	74	200	600
	青枯病					-	200	200
	アザミウマ類	46	54	62	49	211	200	800
	コナジラミ類			0	44	44	200	600
	オオタバコガ	3	15	50	87	155	200	600
	ハモグリバエ類					-		
	アブラムシ類	0	5	25	72	102	200	600
	ハダニ類	30	63	80	52	225	200	600
夏秋きゅうり 335ha	ハスモンヨトウ					-	200	600
	ホコリダニ類				3	3	200	600
	べと病				0	-	300	300
	炭そ病					-		
	疫病					-		
	うどんこ病		0	2	31	33	300	300
	斑点細菌病					-		
	モザイク病					-	300	300
	灰色かび病					-	300	300
	褐斑病			0	15	15	300	300
	菌核病					-	300	300
	黄化えそ病	1	6	21	57	85	300	600
	退緑黄化病	23	29	47	66	165	300	600
	アザミウマ類	1	7	26	68	102	300	600
	ハダニ類					-	300	300
	アブラムシ類					-		
	コナジラミ類		1	11	77	89	300	600
冬春きゅうり 257ha	ハモグリバエ類			0	20	20	300	300
	ワタヘリクロノメイガ					-	300	300
	オオタバコガ					-		
	ハスモンヨトウ					-	300	300
	べと病		0	2	33	35	250	750
	炭疽病					-		
	疫病					-		
	うどんこ病	3	9	25	54	91	250	750
	斑点細菌病					-		
	モザイク病					-		
	灰色かび病					-	250	750
	褐斑病					-	250	750
	菌核病					-	250	750
	黄化えそ病				0	-		
	退緑黄化病			0	11	11		
	アザミウマ類				7	7	250	750
	ハダニ類				7	7	250	750
	アブラムシ類					-		
	コナジラミ類				7	7	250	750
	ハモグリバエ類		0	3	24	27	250	750
	ワタヘリクロノメイガ					-		
	オオタバコガ					-		
	ハスモンヨトウ					-		

作物名 (作付面積)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
ブロッコリー 1,202ha	黒腐病					-		
	べと病					-		
	アブラムシ類				60	60	1000	1000
	コナガ					-	1000	1000
	ハスモンヨトウ	13	37	99	216	365	1000	1000
秋冬ねぎ 1,777ha	さび病	4	26	110	333	473	980	2940
	黒斑病			9	516	525	980	2940
	萎縮病					-		
	べと病		0	3	100	103	980	2940
	軟腐病		0	7	186	193	980	980
	白絹病	0	3	37	255	295	980	980
	シロイチモジヨトウ	582	1130	65	0	1777	980	1960
	ハスモンヨトウ					-	980	1960
	アブラムシ類				7	7	980	980
	ネギハモグリバエ	265	199	255	307	1026	980	2940
	ネギアザミウマ	582	1130	65	0	1777	980	2940
	ネギコガ					-		
さといも 762ha	汚斑病	32	63	120	183	398	0	0
	モザイク病					-		
	疫病					-	150	300
	アブラムシ類				419	419	300	300
	ハダニ類					-		
	ハスモンヨトウ					-	300	300
ほうれんそう 1,890ha	べと病					-		
	モザイク病					-		
	シロイチモジヨトウ					-		
	アブラムシ類				27	27	200	200
	ヨトウガ					-		
	シロオビノメイガ	0	4	38	247	289	200	200
いちご 100ha	灰色かび病			0	8	8	100	200
	うどんこ病				2	2	100	200
	モザイク病					-		
	炭疽病					-	100	200
	萎黄病					-	100	100
	アブラムシ類	0	1	6	19	26	100	200
	アザミウマ類	13	11	15	19	58	100	300
	コナジラミ類			0	8	8	100	100
	ハダニ類		0	2	17	19	100	300
	ハスモンヨトウ	0	1	4	19	24	100	100

(4) 令和5年度の病虫害発生予察情報等の発信

ア 病虫害発生予察警報、注意報及び特殊報等発表状況

(ア) 警 報

な し

(イ) 注意報

発 表 年 月 日	内 容
令和 5 年 7 月 11 日	野菜類・花き類、オオタバコガ
令和 5 年 7 月 31 日	イネ、斑点米カメムシ類
令和 5 年 8 月 15 日	野菜類・花き類・ダイズ、オオタバコガ
令和 5 年 8 月 15 日	ネギ・ブロッコリー、シロイチモジヨトウ
令和 5 年 9 月 25 日	ネギ・ブロッコリー・ダイズ、シロイチモジヨトウ

(ウ) 特殊報

な し

(エ) 発生予報

予報月	発表年月日	予報月	発表年月日
5 月	令和 5 年 4 月 27 日	11 月	令和 5 年 10 月 25 日
6 月	令和 5 年 5 月 26 日	12 月	令和 5 年 11 月 28 日
7 月	令和 5 年 6 月 28 日	1 月	令和 5 年 12 月 22 日
8 月	令和 5 年 7 月 27 日	2 月	令和 6 年 1 月 26 日
9 月	令和 5 年 8 月 25 日	3 月	令和 6 年 2 月 27 日
10 月	令和 5 年 9 月 26 日	4 月	令和 6 年 3 月 22 日

(オ) 注意を促すための情報

a 病虫害防除情報

防除時期が限定される病虫害や予報に合わせ、特に注意を促す必要がある病虫害について病虫害防除情報としてホームページ上で発信した。

発表年月 日	作物別	内 容
令和5年5月15日	野菜	ナスのオオタバコガについて
令和5年5月26日	普通作物	稲（早期栽培）のニカメイガ（ニカメイチュウ）について
令和5年7月5日	普通作物	イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ）について

b 調査結果等

病虫害の適期防除を促すため調査結果をホームページ上で発信した。

発表時期	内 容
令和5年4月～ 令和6年3月	各種フェロモントラップ等データ
令和5年6月6日	麦類ほ場内のヒメトビウンカの生息密度調査結果
令和5年6～8月	いもち病（葉いもち）感染好適条件出現状況
令和5年6～9月	気象予測データによるウンカ類飛来予測状況 （トビイロウンカ、セジロウンカ）
令和5年7月6日	イネツトムシ発育予測
令和5年7月6日	フタオビコヤガ（イネアオムシ）発育予測
令和5年7月25日	いもち病発生状況調査結果
令和5年7月25日	水稻の斑点米カメムシ類の畦畔・雑草地発生調査結果
令和6年1月15日	ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果
令和6年3月15日	果樹カメムシ類の越冬密度調査結果

イ 発生予察情報（発生予報、注意報、特殊報等）、病虫害発生現況報告等の外部への提供

国（植物防疫課）、関東農政局及び日本植物防疫協会に、発生予察情報（発生予報、注意報等）、病虫害発生現況報告等を提供した。

植物防疫に関するデータベースサービスであるJPP-NET（運用主体：日本植物防疫協会）によって、病虫害防除に関する情報交換を国及び他県等と行い、発生予察及び防除指導に活用した。

ウ 発生予察ツールを用いた発生消長予測情報の提供

県で開発したツールを用いて、気象台の気温観測データと害虫種ごとの発育パラメータから今後の害虫の発生消長を予測し、フェロモントラップデータとともにホームページを通じて情報提供した。

- ・ナシヒメシンクイ 提供日：6月22日、7月6日、7月20日
- ・ハスモンヨトウ 提供日：8月21日、9月5日、9月21日、10月5日

これらの他、ヒメトビウンカの越冬世代幼虫を対象としたイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査において、供試虫採集・ウイルス検定実施時期の決定にも用いた。

3 病虫害防除指導

(1) 病虫害防除手法等に関する相談

生産者、一般県民、県等指導機関（農協、市町村、農林振興センター）、その他団体や業者等から問い合わせ、相談、診断依頼のあった約 130 件の病虫害診断や防除手法に関する案件に対応した。

相談の種類	相談者区分（人数）				
	生産者	一般	県等指導機関	その他（業者・団体等）	計
病虫害（水稻・麦・大豆）	5	0	32	8	45
病虫害（野菜）	7	5	33	7	52
病虫害（果樹）	3	8	5	1	17
病虫害（茶）	0	0	0	0	0
病虫害（花植木）	2	2	8	0	12
農薬・その他	1	2	1	0	4
計	18	17	79	16	130

(2) 無人ヘリコプター等による空中散布等の指導

農林水産航空事業実施指導要領及び無人ヘリコプター利用技術指導指針に基づき、県内の 7,442.3ha で無人ヘリコプター等による空中散布が行われた。内訳は、産業用無人ヘリコプターが 7,152.2ha、マルチローター（ドローン）が 290.1ha で実施された。

水稻では、いもち病、紋枯病、ウンカ類、ヨコバイ類、カメムシ類等の病虫害防除のため 3,555.7ha、麦類では赤かび病等の病虫害防除のため 3,203.1ha、大豆では紫斑病、カメムシ類、ハスモンヨトウ等の病虫害防除のため 179.7ha であった。これら作物の延べ散布面積は 6,938.5ha で前年（6,741.0ha）に比べ 197.5ha 増加／減少した。また、その他として水稻の播種・追肥及び除草剤散布が 69.0ha、ゴルフ場の害虫防除が 144.7ha であった。

これら空中散布等の実施に当たり、予察情報による農薬の選定や安全な実施体制の啓発など実施主体に対し適切な防除指導を実施した。

(3) 県内市町村の病虫害防除協議会等における指導

1) 嵐山町環境保全型農業推進協議会

日 時：令和 5 年 7 月 12 日（水）

対象者：生産者、町職員、県等指導機関職員

内 容：本年多発傾向にある病虫害の発生動向と適期防除指導

2) 熊谷市病虫害防除協議会

日 時：令和 6 年 1 月 31 日（水）

対象者：生産者、市および J A 関係職員、県等指導機関職員

内 容：スクミリンゴガイ防除実証ほの試験成績検討、防除対策指導

3) 美里町無人ヘリ協議会

日 時：令和 6 年 3 月 8 日（金）

対象者：関係会社、町、農業共済組合、J A 関係職員、県等指導機関職員

内 容：気象経過と麦の生育状況に合わせた農薬散布時期の検討、適期防除指導

(4) 農薬展示ほ設置等に関する指導

(一社)埼玉県植物防疫協会が実施した農薬展示ほ等の設置に関し、設計の作成及び成績検討会において、農薬の防除効果の検証および結果の考察等に協力し、必要な助言等を行った。

(5) 研修会等の指導

1) 令和5年度農薬応用研修会

日 時：令和5年5月24日(水) J A全農さいたま東部総合センター(久喜市)

対象者：埼玉県内J Aの営農指導中堅職員 20人

内 容：水稻・畑作物の病虫害発生動向と防除対策

2) 農林部新規採用職員等研修

日 時：令和5年5月29日(月) 農業技術研究センター(本所)

対象者：令和5年度新規採用職員のうち農林部配属49人中20人

内 容：麦類病虫害の調査実技、病虫害防除所の業務について等

3) 病虫害防除員・防除協力員研修会の実施

日 時：令和5年5月30日(火) 農業技術研究センター(本所)

対象者：病虫害防除員・病虫害防除協力員等 15人

内 容：①麦類害虫の調査手法 ②イネ縞葉枯病の近年の発生動向と防除対策

4) 普及指導員を対象とした専門研修「病虫害」「作物」における講師

ア 日 時：令和5年7月21日(金) 農業技術研究センター(本所)

対象者：農林振興センター(技術普及担当)職員等 16人

内 容：①農薬取締法の概要 ②農薬の適正使用、保管

イ 日 時：令和5年9月6日(水) 農業技術研究センター玉井試験場

対象者：農林振興センター(技術普及担当)職員等 6人

内 容：①水稻病虫害の調査手法と本年の特徴(座学) ②水稻害虫調査(実技)

5) 埼玉県農薬適正使用アドバイザー研修会における講師

日 時：令和5年10月27日(金)

(さいたま市浦和区仲町 埼玉県県民健康センター)

対象者：農薬適正使用アドバイザー等 約290人

内 容：病虫害の発生生態と防除

6) 埼玉県農業大学校の講義における講師

日 時：令和5年11月30日(木)

対象者：農業大学校学生等 20人

内 容：講義科目「総合的病虫害管理」

病虫害の発生消長や予察情報の活用方法、天気図の見方

7) 令和5年度埼玉県植物防疫研修会における講師

日 時：令和6年2月22日(木)

(さいたま市大宮区北袋町 埼玉県農業共済会館)

対象者：農薬メーカー、J A等職員、県職員等 60人

内 容：2023年の埼玉県における病虫害の話題

（６）防除対策資料等の作成

国が平成 25 年 4 月 26 日に発出した「住宅地等における農薬使用について」の通知に基づき、住宅地、学校、病院等の近くで農薬を使用する際の事前周知等、危被害防止徹底を図るための啓発チラシを作成し、自治会等への幅広い配布・回覧による周知を図った。

ナガエツルノゲイトウ対策、イネカメムシ対策、ウメ輪紋ウイルス（PPV）対策、ジャンボタニシ対策、農薬適正使用推進など農産物安全課の資料作成に協力し、現地の防除指導に活用した。

4 侵入警戒有害動植物の侵入調査

(1) フェロモントラップ調査

調査対象有害動植物	調査対象作物	設置場所	設置地点数	調査期間 (月～月)	調査回数／ 調査時期	延べ調査回数	調査結果
トマトキバガ	トマト	ほ場	4	4月～7月 9月～3月	月2回／栽培開始～ 収穫終了1月後	88	誘殺なし

(2) 目視調査

調査対象有害動植物	調査対象作物	調査場所	調査地点数	調査期間 (月～月)	調査回数／ 調査時期	延べ調査回数	調査結果
<i>Meloidogyne enterolobii</i>	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症状なし
<i>Columnea latent viroid</i>	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症状なし
<i>Pepper chat fruit viroid</i> (PCFVd)	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症状なし
トマト退緑萎縮ウイロイド (TCDVd)	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症状なし
<i>Tomato apical stunt viroid</i> (TASVd)	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症状なし
<i>Pepino mosaic virus</i> (PepMV)	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症状なし
<i>Tomato brown rugose fruit virus</i> (ToBRFV)	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症状なし
<i>Tomato mottle mosaic virus</i>	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症状なし
<i>Tomato leaf curl New Delhi virus</i> (ToLCNDV)	トマト	ほ場	3	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	3	疑義症状なし
バナナネモグリセンチュウ	トマト	ほ場	3	4月～7月 10月～3月	1回／生育期間中	3	疑義症状なし
コロンビアネコブセンチュウ 栽植用植物	トマト	ほ場	2	4月～7月 10月～3月	1回／生育期間中	2	疑義症状なし
ジャガイモやせいもウイロイド (PSTVd)	トマト	ほ場	2	4月～6月 12月～3月	1回／定植1月後～	2	疑義症状なし
火傷病	なし	ほ場	3	4月～7月	2回／開花後1-2週間 及び果実形成期	6	疑義症状なし
カンキツネモグリセンチュウ	トマト	ほ場	4	4月～7月 10月～3月	1回／生育期間中	4	疑義症状なし
<i>Xylella fastidiosa</i>	なし	ほ場	3	4月～9月	1回／展葉期～果実 肥大期	3	疑義症状なし
イネミイラ穂病菌、イネク キセンチュウほか	いね	ほ場	2	7月～8月	1回／出穂前後	2	疑義症状なし
テンサイシストセンチュウ	ほうれんそう	ほ場	3	9月～2月	1回／生育期間中	3	疑義症状なし
ヘシアンバエ	むぎ	ほ場	3	4月～5月 1月～3月	1回／生育期間中	3	疑義症状なし
<i>Ramularia collo-cygni</i>	むぎ	ほ場	4	4月～5月	1回／開花期以降	4	疑義症状なし
スイカ果実汚斑細菌病菌	きゅうり	ほ場	5	4月～6月 9～3月	2回／果実肥大期～ 収穫期	10	疑義症状なし
ウメ輪紋ウイルス	うめ	ほ場	2	5月～7月	1回／新葉展開後	2	疑義症状なし

(3) 新規病害虫まん延防止対策調査結果

- ・キウイフルーツかいよう病 Psa3 系統の春季調査結果

キウイフルーツかいよう病 Psa3 系統は、平成 26 年 5 月に愛媛県において国内で最初の発生が確認され、平成 30 年には、国内で延べ 16 都県の発生が確認されている。

本県では、「キウイフルーツかいよう病の Psa3 系統の防除対策マニュアル」（平成 30 年 5 月 22 日改訂）に基づき、調査を実施している。

令和 5 年度は、所沢市で 1 件の疑似症状の問い合わせがあったが、調査の結果、本病によるものではなかった。

5 農薬安全使用対策

(1) 農薬危害被害防止対策

ア 農薬の安全かつ適正な使用の推進において、農薬使用の助言者として「農薬適正使用アドバイザー・農薬指導マスター」を県で認定するにあたり、効果的な農薬の使用方法、主要農作物における病虫害防除等の指導を行った。

農薬適正使用アドバイザー・農薬指導マスター認定者数（人）

項目\年度	元年度	2年度	3年度	4年度	5年度
農薬適正使用アドバイザー	301	246	267	222	231
農薬指導マスター	213	207	200	186	152

イ 食品衛生法に関する農薬の残留調査結果に基づき、農薬の安全かつ適正な使用を指導した。

(2) 農薬販売者の届出店舗数及び立入検査結果

ア 届出件数

農薬取締法第17条第1項の規定に基づき、農薬を販売する者から提出された農薬販売届（新規・増設・変更・廃止）を受理した。

令和5年度の届出店舗数は422件であった。

令和5年度届出店舗数（令和5年4月～令和6年3月）

業種\項目	新規届	増設届	変更届	廃止届	販売者数	販売店舗数
農業協同組合	0	1	47	16	19	163
農薬卸商	6	0	4	0	43	44
薬局・医療品販売業	0	40	115	30	136	1236
種苗商	0	0	4	3	88	90
肥料商	1	0	2	2	74	74
ホームセンター	0	7	10	5	18	174
インターネット	9	1	0	1	32	32
その他	34	6	55	23	258	534
計	50	55	237	80	668	2347

イ 農薬販売者に対する立入検査結果

農薬の適正な販売を確保するため、農薬取締法第29条の規定に基づき、農薬販売者に対する立入検査（202件）を行った。

なお、コロナ禍のため保健所との合同調査は実施を見合わせた。

検査の結果、全体の15.8%に当たる32店舗において指摘事項が認められ、是正指導を行った。

なお、指摘事項は、次のとおりである。

令和5年度 検査項目及び不備が認められた店舗数(立入検査時)

(単位:延べ、実店舗数)

業 種	販売者総数	販売所総数	立入検査件数	左記のうち保健所との合同立入検査件数	検 査 事 項																不適数（延数）計	検査結果(実数)			措 置(実数)				備 考
					新規・増設届	変更届	廃止届	毒物劇物販売登録	農 業 の 取 り 扱 い					保 管 管 理			帳 簿			指摘事項無		指摘事項有	その他（店舗無、廃業等）	文書指導	口頭指導	その他（店舗無、廃業等）			
									無登録農薬	不適正表示	虚偽宣伝	登録のない除草剤	有効期限切れ	分割・移し替え	施 錠	食品等との分離	そ の 他	一般農薬（水質汚濁性農薬を除く）	水質汚濁性農薬										
農業協同組合	19	163	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0		
農 業 卸	43	44	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0		
薬局・医薬品販売業	136	1236	103	0	0	3	9	0	0	0	0	6	2	0	0	0	0	0	0	20	82	20	1	0	20	1			
種 苗 商	88	90	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0	0	0		
肥 料 商	74	74	6	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	4	2	0	0	2	0			
ホームセンター	18	174	21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	21	0	0	0	0	0	0		
インターネット	32	32	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
そ の 他	258	534	57	0	0	2	6	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	10	46	10	1	0	10	1			
計	668	2347	202	0	0	5	17	0	0	0	0	6	3	0	0	0	0	1	0	32	168	32	2	0	32	2			

*1指摘延数の実際の数は、32件+その他の2件の34件となる。

*2検査結果と措置は、実販売店舗数。

*3帳簿の一般農薬の内容は、帳簿の記載、帳簿の保管、在庫数量などの確認項目がある。

ウ 農薬販売者に対する郵送調査結果

農薬販売者に対してより幅広く検査を実施するために、調査票を郵送して回答を求める調査を行った。

令和5年度は調査票を405店舗に対し、318店舗から回答(回答率78.5%)、宛先不明5店舗、回答無しが82店舗あり、その結果は次のとおりである。

令和5年度 検査項目及び不備が認められた店舗数(郵送調査)

(単位:延べ、実店舗数)

業 種	販売者総数	販売所総数	郵送調査件数	左記のうち保健所との合同立入検査件数	検 査 事 項																指摘事項有（延数）計	検査結果			措置		備 考
					新規・増設届	変更届	廃止届	毒物劇物販売登録※1	農 薬 の 取 り 扱 い					保 管 管 理			帳 簿			指摘事項無		指摘事項有	未回答・宛名無	電話による口頭指導	郵送調査がきつてく が提出された等		
									無登録農薬	不適正表示	虚偽宣伝	登録のない除草剤	有効期限切れ	分割・移し替え	施錠	食品等との分離	その他	一般農薬（水質汚濁性農薬を除く）	水質汚濁性農薬								
農業協同組合	0	0	31	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	28	1	2	0	1		
農 業 卸	0	0	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	2	0	0		
薬局・医薬品販売業	0	0	221	0	0	1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	160	6	55	1	5		
種 苗 商	0	0	15	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	8	3	4	0	3		
肥 料 商	0	0	14	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	10	1	3	0	1		
ホームセンター	0	0	23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	21	0	2	0	0		
インターネット	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0		
そ の 他	0	0	87	0	0	4	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	58	11	18	0	11		
計	0	0	405	0	0	9	13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	22	296	22	87	1	21		

*さいたま203、川越111、大里42、春日部49

*1毒物劇物販売登録欄には、登録有で指摘事項(不適)がある場合にカウントする。

*2検査結果と措置は、実販売店舗数。

*3帳簿の一般農薬の内容は、帳簿の記載、帳簿の保管、在庫数量などの確認項目がある。

6 病害虫関係資料

(1) 令和5年度発表の病害虫発生予察注意報等

ア 注意報（第1号、第2号、第3号、第4号、第5号）



コバトン



令和5年度病害虫発生予察注意報第1号

令和5年7月11日

埼玉県病害虫防除所

県内のオオタバコガのフェロモントラップによる誘殺数が、4月以降現在まで平年を上回っています。また、調査を行っている4地点のうち3地点では、発生量が多かった昨年度をさらに上回る誘殺数となっています。これまでにナス、スイートコーン、ダイズで幼虫による食害が確認されています。

本虫は野菜、花きを中心として50種類近い作物を加害しますが、本県で被害が懸念される作物は、ダイズ、トマト、ナス、ブロッコリー、レタス、スイートコーン、イチゴ、キク、ガーベラ、宿根アスターなどです。

幼虫は卵からふ化すると直ちに植物の内部へ食入するため、被害を確認したら直ちに防除を実施しましょう。

作物名 野菜類、花き類

病害虫名 オオタバコガ

1 注意報の内容

- (1) 発生地域 県内全地域
- (2) 発生程度 多

2 注意報発表の根拠

- (1) 病害虫防除所が設置したオオタバコガのフェロモントラップへの雄成虫誘殺数が、4か所すべて（本庄市、深谷市、越谷市、杉戸町）で平年より多い傾向が続いており、深谷市、越谷市、杉戸町の3地点では注意報を出した昨年を上回る増加傾向が見られる（図1）。
- (2) 7月6日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並と予想されている。
- (3) 露地ナスほ場で幼虫の食害が確認されており、今後、被害拡大が懸念される。

3 防除対策等

- (1) 新しい食害痕や虫糞を見つけたら、その周辺に幼虫がいる可能性が高いため、発見しだい捕殺する。
- (2) 摘芯した腋芽や花蕾などには卵が産みつけられていたり、若齢幼虫が潜んでいたりすることがあるため、株元などに放置せず、ほ場外で処分する。
- (3) 施設栽培では、開口部に寒冷紗等（5mm目程度の防虫ネット）を張って、成虫の侵入を防ぐ。

- (4) 幼虫が植物体内に食入してしまうと薬剤の効果が低下するため、被害を確認したら直ちに防除を実施する。
- (5) 老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低下するため、薬剤散布は若齢幼虫のうちに実施する。また、同一系統の薬剤の連用は避ける。(表1、表2、表3)

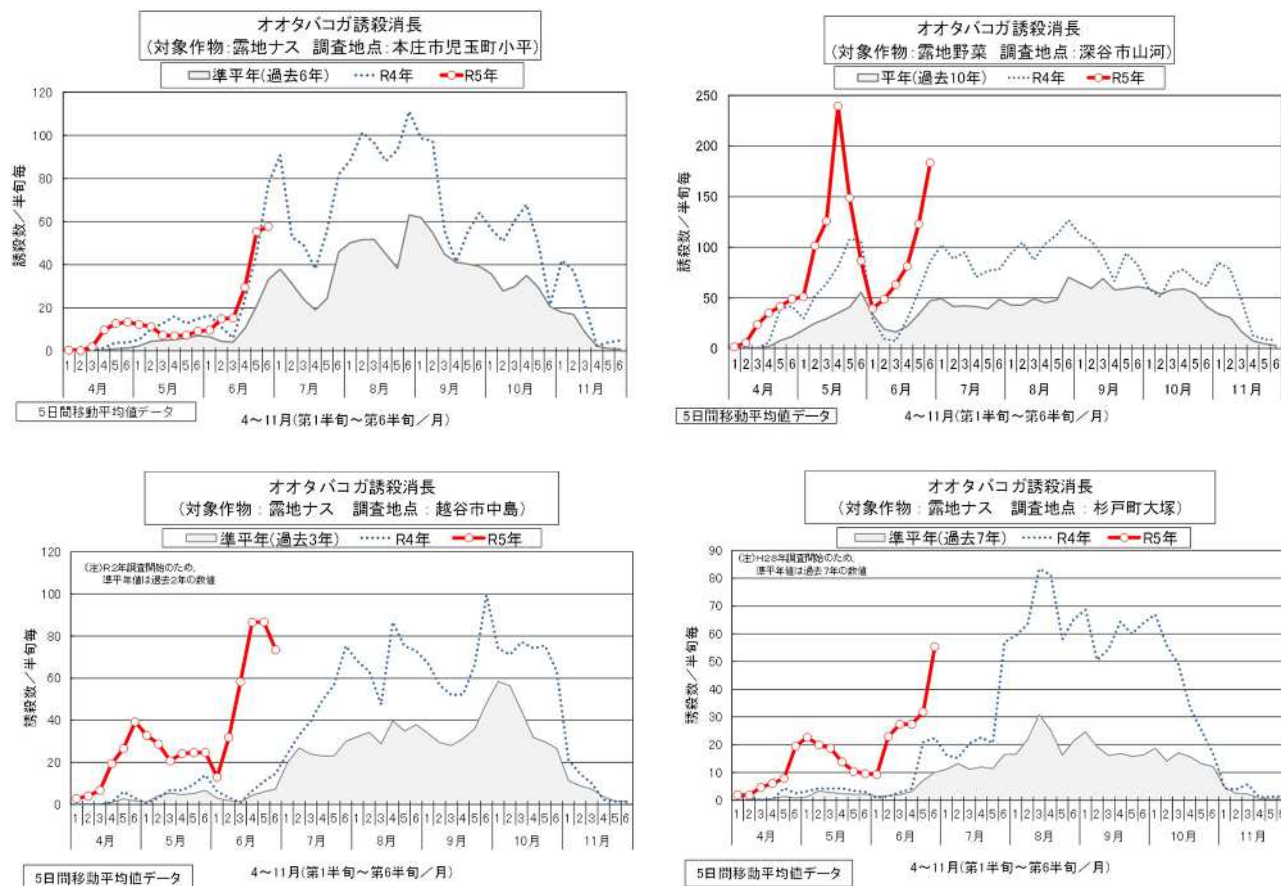


図1 オオタバコガ誘殺消長 (左上から本庄市、深谷市、越谷市、杉戸町)



写真1 オオタバコガ幼虫による葉の食害

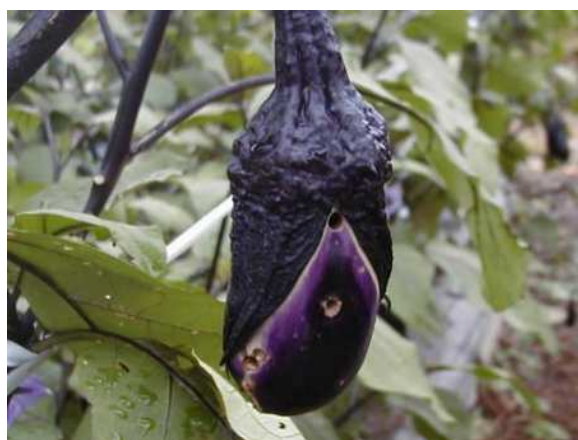


写真2 オオタバコガ幼虫による果実の侵入痕

表1 ナスのオオタバコガの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
スピノエース顆粒水和剤	5	収穫前日まで	2回以内
ディアナSC	5	収穫前日まで	2回以内
アフーム乳剤	6	収穫前日まで	2回以内
カスケード乳剤	1 5	収穫前日まで	4回以内
カウンター乳剤	1 5	収穫前日まで	4回以内
トルネードエースDF	2 2 A	収穫前日まで	2回以内
アクセルフロアブル	2 2 B	収穫前日まで	3回以内
フェニックス顆粒水和剤	2 8	収穫前日まで	3回以内
プレバソnfフロアブル5	2 8	収穫前日まで	2回以内
グレースシア乳剤	3 0	収穫前日まで	2回以内
プレオフロアブル	UN	収穫前日まで	4回以内

(使用基準は令和5年6月30日現在)

表2 トマトのオオタバコガの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
アニキ乳剤	6	収穫前日まで	3回以内
マッチ乳剤	1 5	収穫前日まで	4回以内
ベネビアOD	2 8	収穫前日まで	4回以内※

※定植時までの処理及び定植直後の株元灌注は合計1回以内、定植後の散布は3回以内

(使用基準は令和5年6月30日現在)

表3 スイートコーンのオオタバコガの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
ゼンターリ顆粒水和剤	1 1 (A)	収穫前日まで	—
コテツフロアブル	1 3	収穫前日まで	3回以内
プレバソnfフロアブル5	2 8	収穫前日まで	3回以内

(使用基準は令和5年6月30日現在)

< 農薬使用上の注意事項 >

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、埼玉県農産物安全課ホームページをご覧ください。

<http://www.pref.saitama.lg.jp/a0907/nouann/saishintouroku.jouhou.html>

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！ (令和5年5月1日～8月31日)

4 問合せ先

埼玉県病害虫防除所 電話：048-539-0661



令和 5 年度病虫害発生予察注意報第 2 号

令和 5 年 7 月 3 1 日
埼玉県病虫害防除所

県内各地で実施しているイネ斑点米カメムシ類の畦畔・雑草地における発生調査の結果、1 調査地点当たりの発生量が 60.5 頭と平年 (20.5 頭) の約 3 倍で、過去 10 年で最も多くなっています。

また、5 月下旬以降の移植地域の水田内のすくい取り調査でも、斑点米カメムシ類の捕獲数が平年より多く、イネの斑点米の発生が懸念されますので、出穂期から乳熟期にかけての防除と定期的な除草を行ってください。

なお、出穂前 2 週間と出穂後 2 週間の、生息地（畦畔、雑草地、休耕田など）の除草は、カメムシ類を水田に追い込み、斑点米の発生を助長させるので避けましょう。

作物名 イネ

病虫害名 斑点米カメムシ類

1 注意報の内容

- (1) 発生地域 県内全地域
- (2) 発生程度 多

2 注意報発表の根拠

- (1) 病虫害防除所で 7 月中旬を基準に毎年実施しているイネ斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査の結果、1 調査地点当たりの発生量が 60.5 頭と平年 (20.5 頭) の約 3 倍で、過去 10 年で最も多くなっている (図 1)。
- (2) 7 月中旬に実施した水田内のすくい取り調査においても、5 月下旬以降の移植地域では、6 調査地点のうち 4 地点で捕獲され、うち 2 地点が 11 頭以上の多発生となり、発生量は平年に比べてかなり多い。
- (3) 7 月 27 日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう 1 か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並と予想されており、今後も斑点米カメムシ類の発生に好適な条件が継続し、多発生が予測される。
- (4) 県東部地域でイネカメムシ (写真 1) のイネへの寄生が確認されているほか、県北部地域では畦畔雑草からミナミアオカメムシ (写真 2) が捕獲されており、これら大型種に加害された場合は大きな被害につながる懸念がある。

3 防除対策等

- (1) 本県の水田畦畔等で捕獲される斑点米カメムシ類は、イネホソミドリカスミカメ (写真 3、別和名：アカヒゲホソミドリカスミカメ) とアカスジカスミカメ

(写真4)で約9割を占める(図2)。両種は、成虫の移動能力が高いため、広域的な一斉防除が必要である。

- (2) 近年、県東部地域でイネカメムシ、県北部地域でミナミアオカメムシの水田内での発生が増加傾向にあり、寄生頭数が少ない場合でも大きな被害につながる可能性があるため、これらの大型種を本圃で確認した場合は、必ず薬剤による防除を実施する。
- (3) 生息場所の水田畦畔や休耕田等の雑草管理(除草)を丁寧に行う。ただし、斑点米カメムシ類を水田へ追い込み被害が拡大する恐れがあるので、出穂前2週間と出穂後2週間は除草を行わない。
- (4) 周辺より出穂の早い水田、あるいは周辺より出穂の遅い水田は、被害が集中しやすいので防除を徹底する。
- (5) 農薬による蜜蜂への影響を軽減させるために、蜜蜂の活動が最も盛んな時間帯(午前8時～12時まで)を避け、可能な限り早朝又は夕刻に行うなどの対策を講じる。

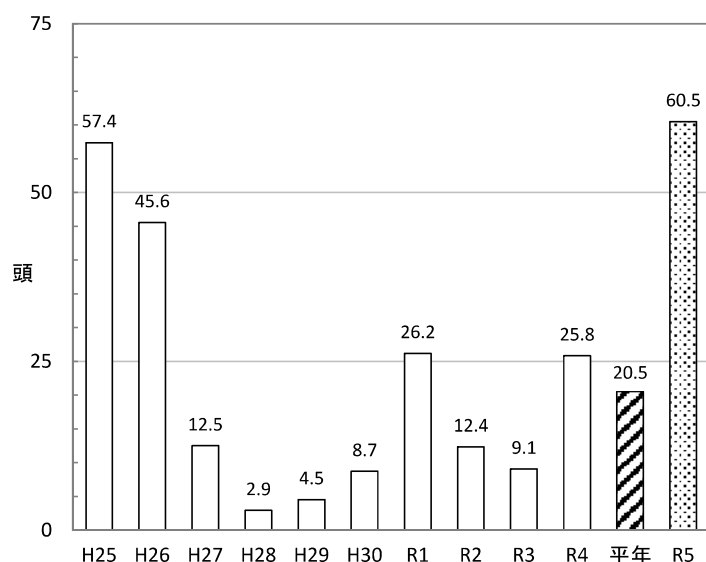


図1 イネ斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査結果(1調査地点当たりの発生量)

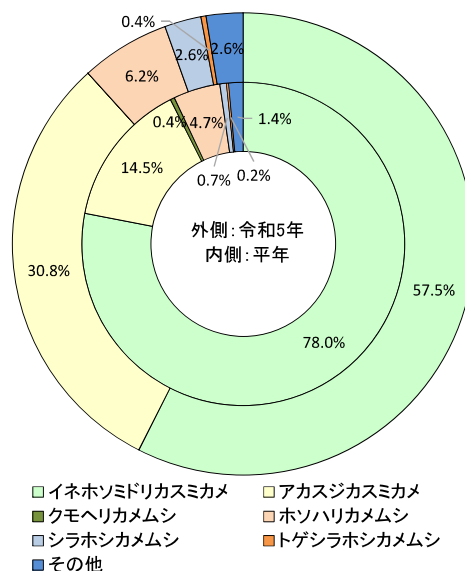


図2 イネ斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査の種構成



写真1 イネカメムシ成虫(体長約12mm)



写真2 ミナミアオカメムシ成虫(体長約14mm)



写真3 イネホソミドリカスミカメ成虫(体長約 6mm)



写真4 アカスジカスミカメ成虫(体長約 5mm)

表 稲のカメムシ類の防除薬剤例(地上防除・無人航空機防除両対応)

薬 剤 名	IRAC コード	使用時期	使用回数
キラップフロアブル	2B	収穫 14 日前まで	2 回以内
ダントツフロアブル	4A	収穫 7 日前まで	3 回以内
エクシードフロアブル	4C	収穫 7 日前まで	3 回以内
エミリアフロアブル	4F	収穫 7 日前まで	2 回以内
スタークル 1 キロH粒剤	4A	収穫 7 日前まで	3 回以内

(使用基準は令和 5 年 7 月 2 5 日現在)

< 農薬使用上の注意事項 >

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム(農林水産省)から検索できます。
農薬登録情報提供システム(農林水産省) <http://pesticide.maff.go.jp/>

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！ (令和 5 年 5 月 1 日～ 8 月 3 1 日)

4 問合せ先

埼玉県病虫害防除所 電話：0 4 8－5 3 9－0 6 6 1



令和 5 年度病害虫発生予察注意報第 3 号

令和 5 年 8 月 15 日
埼玉県病害虫防除所

県内のオオタバコガのフェロモントラップによる誘殺数が平年を上回っており、令和 5 年 7 月 11 日に注意報第 1 号を発表しましたが、その後も全地点で誘殺数が平年比 2 ～ 7 倍と多い状態が続いています。8 月上旬のナスほ場における発生程度は平年比で「多」と被害が広がっており、これから栽培が始まる作物への被害も懸念されます。

本虫は野菜、花きを中心として 50 種類近い作物を加害しますが、本県で被害が懸念される作物は、ダイズ、トマト、ナス、ブロッコリー、レタス、スイートコーン、イチゴ、キク、ガーベラ、宿根アスターなどです。

幼虫は卵からふ化すると直ちに植物の内部へ食入するため、被害を確認したら直ちに防除を実施しましょう。

作物名 野菜類、花き類、ダイズ
病害虫名 オオタバコガ

1 注意報の内容

- (1) 発生地域 県内全地域
- (2) 発生程度 多

2 注意報発表の根拠

- (1) 病害虫防除所が設置したオオタバコガのフェロモントラップへの雄成虫誘殺数が、4 地点（本庄市、深谷市、越谷市、杉戸町）いずれも平年を上回って推移しており、本庄市以外の 3 地点では注意報を発表した今年の 2 ～ 3 倍に達している（図 1）。
- (2) 8 月 10 日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう 1 か月の気温は高く、降水量は平年並か多いと予想されている。
- (3) 露地ナスほ場において、幼虫の食害が平年より多く確認されており、他作物でも今後の被害拡大が懸念される。

3 防除対策等

- (1) 新しい食害痕や虫糞を見つけたら、その周辺に幼虫がいる可能性が高いため、発見しだい捕殺する。
- (2) 摘芯した腋芽や花蕾などには卵が産みつけられていたり、若齢幼虫が潜んでいたりすることがあるため、株元などに放置せず、ほ場外で処分する。

- (3) 施設栽培では、開口部に寒冷紗等（5mm目程度の防虫ネット）を張って、成虫の侵入を防ぐ。
- (4) 幼虫が作物内に食入すると薬剤の効果が低下するため、被害を確認したら直ちに防除を実施する。
- (5) 老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低下するため、薬剤散布は若齢幼虫のうちに実施する。また、同一系統の薬剤の連用は避ける（表1、表2、表3）。

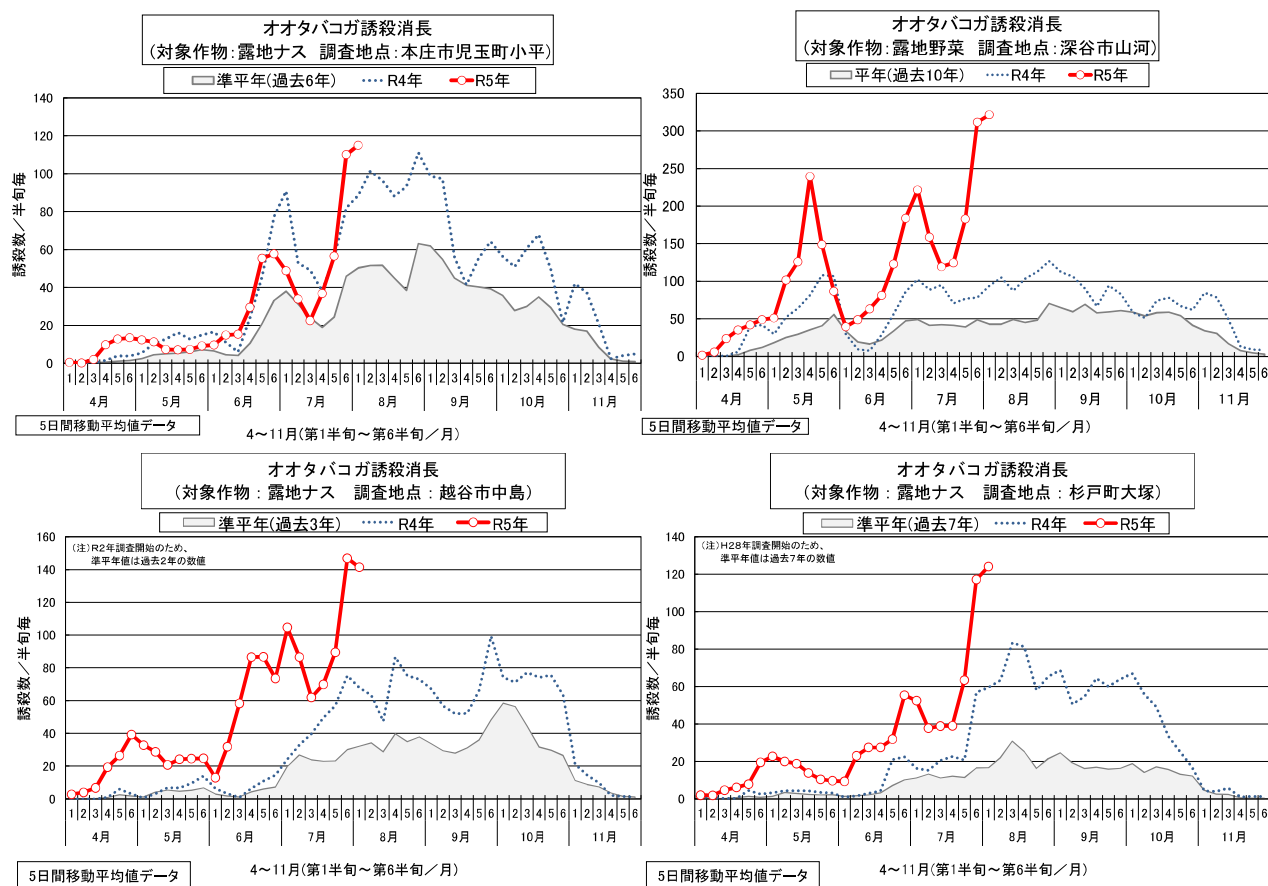


図1 オオタバコガ誘殺消長（左上から本庄市、深谷市、越谷市、杉戸町）



写真1 ナス果実に食入するオオタバコガ若齢幼虫



写真2 食害したナス果実内で蛹化したオオタバコガ

表1 ナスにおけるオオタバコガの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
スピノエース顆粒水和剤	5	収穫前日まで	2回以内
アニキ乳剤	6	収穫前日まで	2回以内
コテツフロアブル	1 3	収穫前日まで	4回以内
カスケード乳剤	1 5	収穫前日まで	4回以内
トルネードエースDF	2 2 A	収穫前日まで	2回以内
アクセルフロアブル	2 2 B	収穫前日まで	3回以内
フェニックス顆粒水和剤	2 8	収穫前日まで	3回以内
プレオフロアブル	UN	収穫前日まで	4回以内

(使用基準は令和5年8月9日現在)

表2 ブロッコリーにおけるオオタバコガの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
ディアナSC	5	収穫前日まで	2回以内
アフーム乳剤	6	収穫3日前まで	3回以内
ゼンターリ顆粒水和剤	1 1 A	発生初期 但し、収穫前日まで	—
グレーシア乳剤	3 0	収穫7日前まで	2回以内

(使用基準は令和5年8月9日現在)

表3 ダイズにおけるオオタバコガの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
デルフィン顆粒水和剤	1 1 A	発生初期 但し、収穫前日まで	—
アタブロン乳剤	1 5	収穫14日前まで	2回以内
プレバソンフロアブル5	2 8	収穫7日前まで	2回以内

(使用基準は令和5年8月9日現在)

< 農薬使用上の注意事項 >

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、埼玉県農産物安全課ホームページをご覧ください。
<http://www.pref.saitama.lg.jp/a0907/nouann/saishintourokujouhou.html>

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！ (令和5年5月1日～8月31日)

4 問合せ先

埼玉県病虫害防除所 電話：048-539-0661



令和 5 年度病虫害発生予察注意報第 4 号

令和 5 年 8 月 1 5 日
埼玉県病虫害防除所

県内のシロイチモジヨトウのフェロモントラップへの誘殺数が平年の 2 ～ 8 倍に達しています。特に 7 月第 6 半旬以降に急増し、ネギほ場では卵塊や幼虫の食害が確認されています。

本虫は野菜、花きを中心として 6 0 種類以上の作物を加害するため、今後ブロッコリー等への被害も懸念されます。

ネギでは、ふ化幼虫が集団で葉の先端や折れた部分から葉身内へ食入してしまうと、薬剤の効果が低下するため、被害を確認したら直ちに防除を実施しましょう。

作物名 ネギ、ブロッコリー
病虫害名 シロイチモジヨトウ

1 注意報の内容

- (1) 発生地域 県内全地域
- (2) 発生程度 多

2 注意報発表の根拠

- (1) 病虫害防除所が設置したシロイチモジヨトウのフェロモントラップへの雄成虫誘殺数が、3 地点（深谷市、越谷市、杉戸町）いずれも平年を上回って推移しており、注意報を発表した昨年度と同様か、地点によっては 7 月第 6 半旬以降に昨年度の 2 ～ 4 倍に達している（図 1）。
- (2) 8 月 1 0 日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう 1 か月の気温は高く、降水量は平年並か多いと予想されている。
- (3) ネギほ場において、幼虫の食害が平年よりやや多く確認されており、今後、ブロッコリー等の他作物でも被害拡大が懸念される。

3 防除対策等

- (1) 早期発見に努め、卵塊やふ化直後の 1 ～ 2 齢幼虫の集団を見つけたら速やかに取り除き、ほ場外で適切に処分する。
- (2) 幼虫が作物内に食入すると薬剤の効果が低下するため、被害を確認したら直ちに防除を実施する。
- (3) 老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低下するため、薬剤散布は若齢幼虫のうちに実施する。また、同一系統の薬剤の連用は避ける（表 1、表 2）。

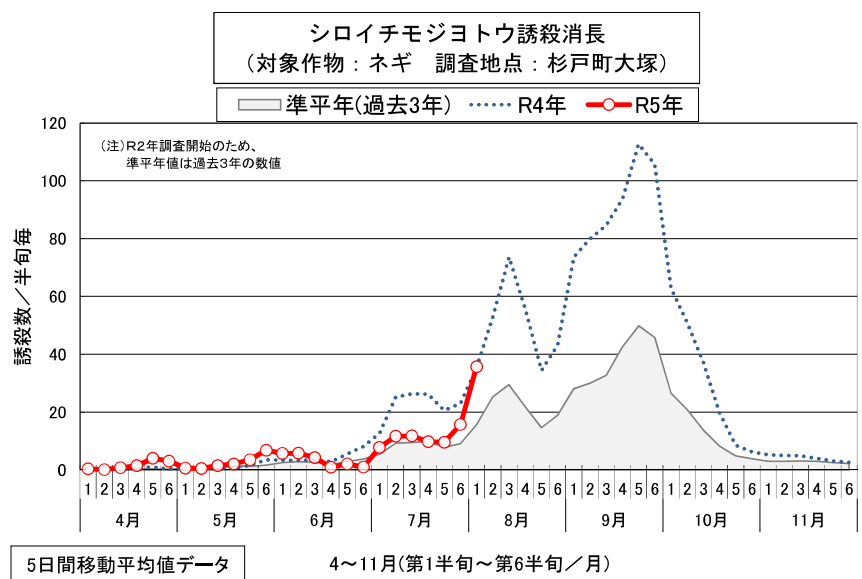
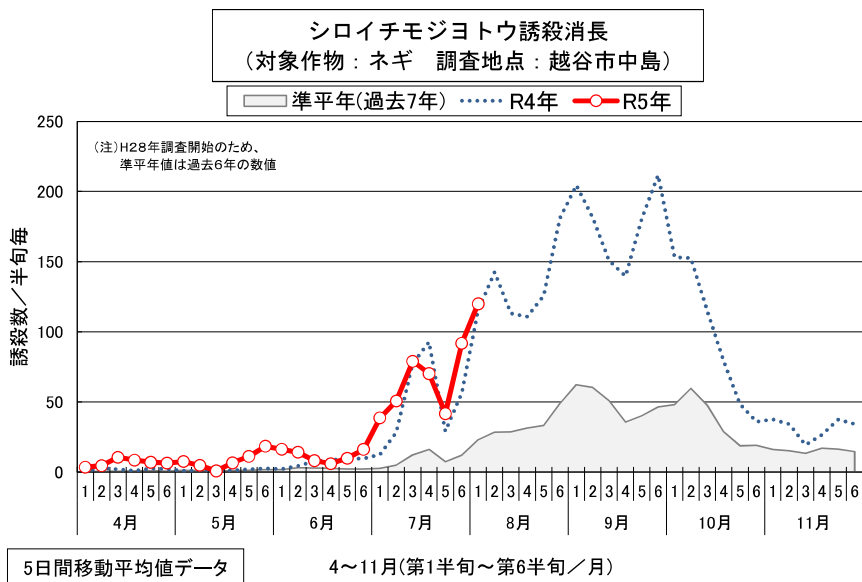
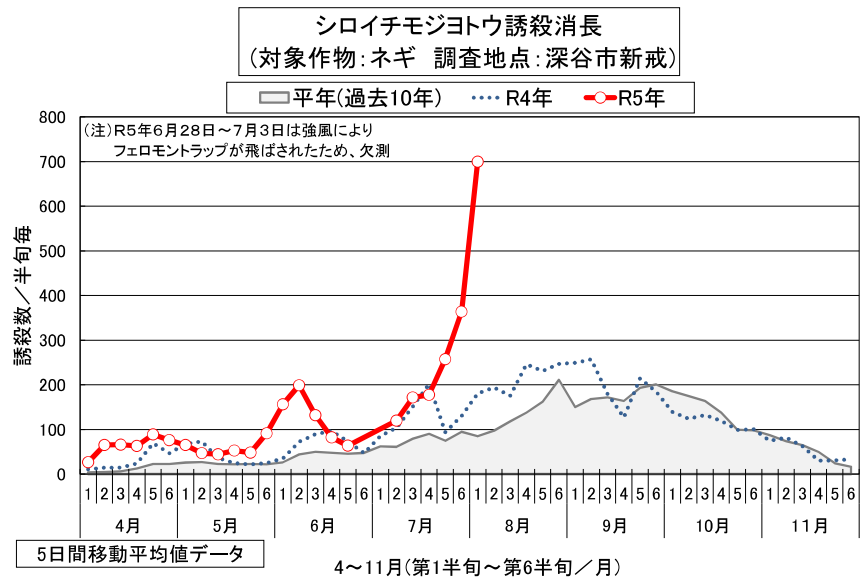


図1 シロイチモジヨトウ誘殺消長 (上から深谷市、越谷市、杉戸町)

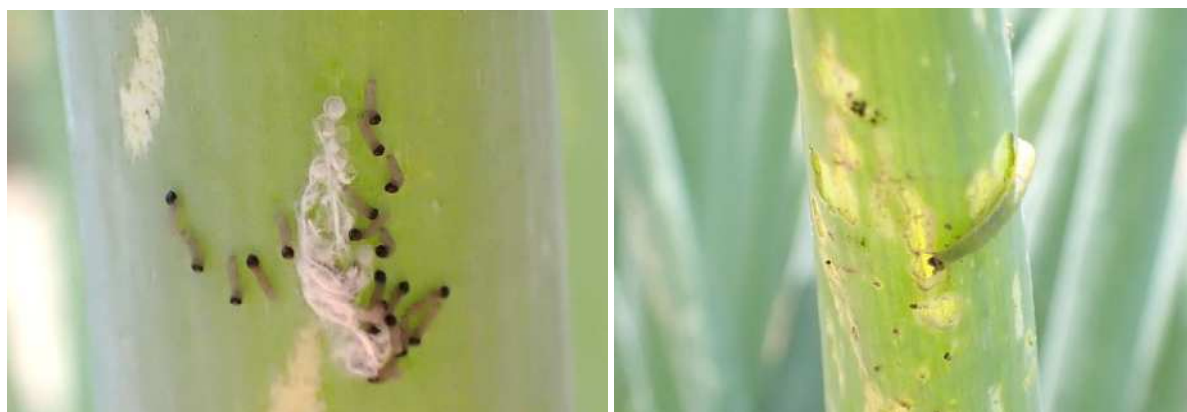


写真1 ふ化直後のシロイチモジヨトウ
若齢幼虫（ネギ葉）

写真2 ネギを食害するシロイチモジヨトウ
中齢幼虫

表1 ネギのシロイチモジヨトウの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
アディオソ乳剤	3 A	収穫7日前まで	3回以内
ディアナSC	5	収穫前日まで	2回以内
アニキ乳剤	6	収穫3日前まで	3回以内
マッチ乳剤	1 5	収穫7日前まで	3回以内
ロムダンフロアブル	1 8	収穫7日前まで	3回以内
トルネードエースDF	2 2 A	収穫14日前まで	2回以内
ミネクトデュオ粒剤	4 A、2 8	収穫3日前まで	3回以内

（使用基準は令和5年8月9日現在）

表2 ブロッコリーにおけるシロイチモジヨトウの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
アフームエクセラ顆粒水和剤	6、1 5	収穫7日前まで	3回以内
ジャックポット顆粒水和剤	1 1 A	発生初期 但し、収穫前日まで	—
ベネビアOD	2 8	収穫前日まで	3回以内

（使用基準は令和5年8月9日現在）

＜農薬使用上の注意事項＞

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、埼玉県農産物安全課ホームページをご覧ください。
<http://www.pref.saitama.lg.jp/a0907/nouann/saishintourokujouhou.html>

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！（令和5年5月1日～8月31日）

4 問合せ先

埼玉県病虫害防除所 電話：048-539-0661



コバトン



令和 5 年度病害虫発生予察注意報第 5 号

令和 5 年 9 月 2 5 日
埼玉県病害虫防除所

県内のシロイチモジヨトウのフェロモントラップへの誘殺数が平年を上回っており、本年 8 月 1 5 日に注意報第 4 号を発表しましたが、その後も依然として多い状況が続いています。9 月中旬のネギほ場における発生程度は平年比で「多」となっております。本年はダイズほ場においても葉の食害及び幼虫が多数確認されています。

本虫は野菜、花きを中心として 6 0 種類以上の作物を加害します。

老齢幼虫では、薬剤の効果が低下するため、被害を確認したら直ちに防除を実施しましょう。

作物名 ネギ、ブロッコリー、ダイズ
病害虫名 シロイチモジヨトウ

1 注意報の内容

- (1) 発生地域 県内全地域
- (2) 発生程度 多

2 注意報発表の根拠

- (1) 注意報第 4 号の発表後も、フェロモントラップへの雄成虫誘殺数が平年を上回って推移している。(図:次項)
- (2) 9 月 2 1 日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう 1 か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並と予想されている。
- (3) 従来目立った加害を受けていなかったダイズほ場において、葉の食害及び幼虫が多数確認されている。
- (4) 9 月中旬のネギほ場(5 地域)の調査結果では平均すると 6 0. 4 %の株で幼虫が認められ、昨年(3 4. 4 %)を大きく上回っている。また、ブロッコリー等の他作物でも、定植間もないほ場で食害を受けると今後の生育に大きく影響することが懸念される。

3 防除対策等

- (1) 早期発見に努め、卵塊やふ化直後の 1 ～ 2 齢幼虫の集団を見つけたら速やかに取り除き、ほ場外で適切に処分する。

- (2) 幼虫が作物内に食入すると薬剤の効果が低下するため、被害を確認したら直ちに防除を実施する。
- (3) 老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低下するため、薬剤散布は若齢幼虫のうちに実施する。また、同一系統の薬剤の連用は避ける（表1～3）。

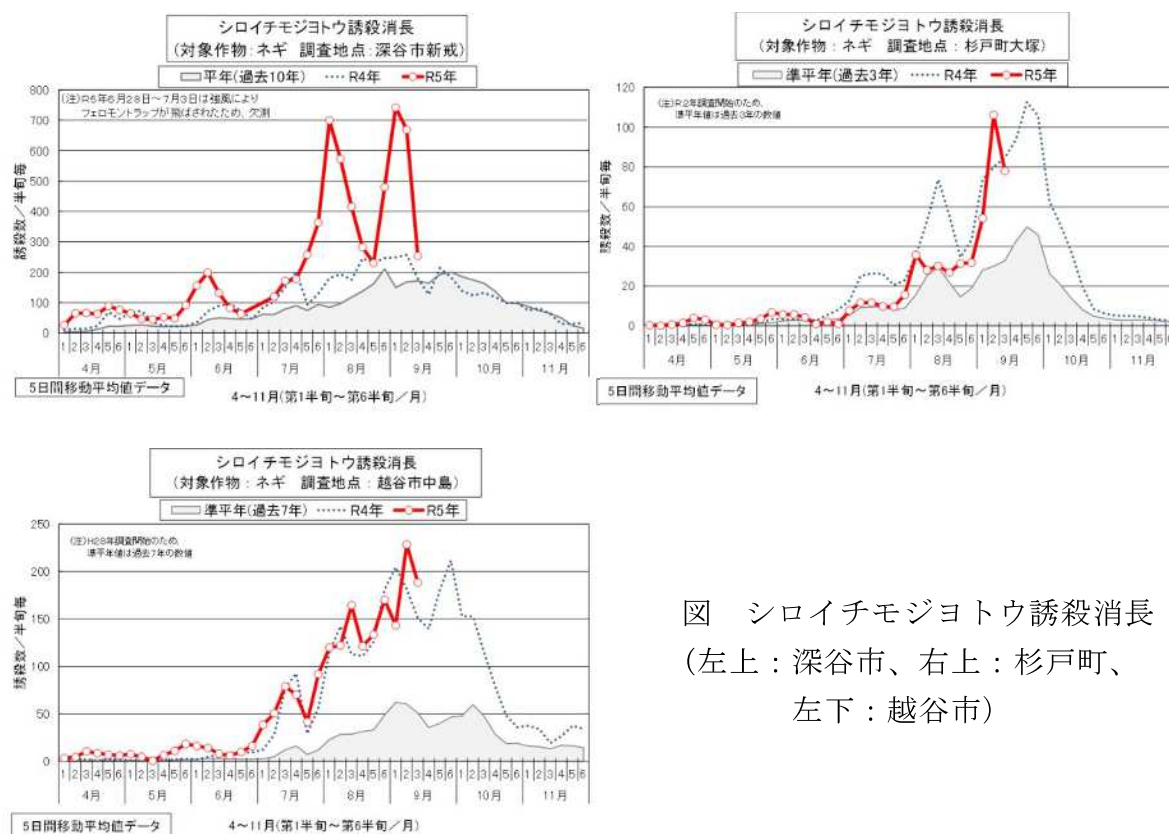


図 シロイチモジヨトウ誘殺消長
(左上：深谷市、右上：杉戸町、
左下：越谷市)



写真1 ブロッコリー葉を食害する
シロイチモジヨトウ老齢幼虫



写真2 ダイズ葉を食害する
シロイチモジヨトウ老齢幼虫

表1 ネギのシロイチモジヨトウの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
アディオソ乳剤	3 A	収穫7日前まで	3回以内
ディアナSC	5	収穫前日まで	2回以内
アニキ乳剤	6	収穫3日前まで	3回以内
マッチ乳剤	1 5	収穫7日前まで	3回以内
ロムダンフロアブル	1 8	収穫7日前まで	3回以内
トルネードエースDF	2 2 A	収穫14日前まで	2回以内
ミネクトデュオ粒剤	4 A、2 8	収穫3日前まで	3回以内

(使用基準は令和5年9月19日現在)

表2 ブロッコリーにおけるシロイチモジヨトウの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
アフームエクセラ顆粒水和剤	6、1 5	収穫7日前まで	3回以内
ジャックポット顆粒水和剤	1 1 A	発生初期 但し、収穫前日まで	—
ベネビアOD	2 8	収穫前日まで	3回以内
グレーシア乳剤	3 0	収穫7日前まで	2回以内

(使用基準は令和5年9月19日現在)

表3 ダイズにおけるシロイチモジヨトウの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
プレオフロアブル	UN	収穫7日前まで	2回以内
デルフィン顆粒水和剤	1 1 A	発生初期 但し、収穫前日まで	—

(使用基準は令和5年9月19日現在)

< 農薬使用上の注意事項 >

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、埼玉県農産物安全課ホームページをご覧ください。
<http://www.pref.saitama.lg.jp/a0907/nouann/saishintourokujouhou.html>

4 問合せ先

埼玉県病害虫防除所 電話：048-539-0661



コバトン

病虫害防除情報



令和5年5月15日
埼玉県病虫害防除所

1 情報名 ナスのオオタバコガについて

2 情報内容

県内のオオタバコガのフェロモントラップへの誘殺数が、全調査地点で平年より多い状態が続いています。5月第1半旬時点で、全地点の平均誘殺数は平年の約6倍となり、多いところでは平年の約30倍となりました。

本虫は野菜、花きを中心として50種類近い作物を加害します。幼虫は卵からふ化すると直ちに、植物の内部へ食入するため、商品価値がなくなります。

向こう1か月の気象予報では、気温が平年並か高い見込みであることから、今後本虫の活動がさらに活発になると予想されます。

被害が拡大する前に、対策のポイントを参考に、状況に応じた防除を実施しましょう。

（1）生態と被害

幼虫は卵からふ化すると直ちに、植物の内部へ食入します。ナスなど果菜類では果実に潜り込み、内部を加害するため、農作物としては経済的に大きな被害となります。本県では主に9～10月に食害が発生しますが、オオタバコガは1年で3～6回発生し、世代を増すごとにその発生量も増加するため、発生初期における防除が極めて重要です。

（2）気象要因

4月の平均気温は平年よりかなり高く（+1.9℃、熊谷）、5月11日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう1か月の平均気温は、平年並か平年より高い確率が各40%、降水量はほぼ平年並の見込みです。



写真1 オオタバコガの老齢幼虫



写真2 オオタバコガ幼虫によるナス果実の食害

（参考）最新の誘殺数の推移は「フェロモントラップ等調査データ」（埼玉県 HP）を参照ください。
<https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/bojo/pheromonetrapp.html>

(3) 対策のポイント

- ア 新しい食害痕や虫糞を見つけたら、その周辺に幼虫がいる可能性が高いため注意深く観察し、見つけ次第捕殺します。
- イ 摘芯した脇芽などには卵や若齢幼虫が見られるので、株元などに放置せず、は場外で処分します。
- ウ 幼虫が作物内に食入してしまうと薬剤散布の効果が低下するため、被害を確認したら直ちに防除を行ってください。
- エ 老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低下するため、薬剤散布は若齢幼虫のうちに実施しましょう。
- オ 施設栽培では、開口部に寒冷紗等（5mm目程度の防虫ネット）を張って、成虫の侵入を防ぎましょう。

表 ナスにおけるオオタバコガの防除薬剤例（使用基準は令和5年5月11日現在）

薬 剤 名	IRAC コード	使用時期	使用回数
ヨーバルフロアブル	28	灌注：育苗期後半～定植当日 散布：収穫前日まで	4回以内 (灌注は1回以内、 散布は3回以内)
スピノエース顆粒水和剤	5	収穫前日まで	2回以内
アフーム乳剤	6	収穫前日まで	2回以内
マッチ乳剤	15	収穫前日まで	4回以内
プレオフロアブル	UN	収穫前日まで	4回以内
エスマルク DF※	11(A)	発生初期但し、収穫前日まで	—

※作物名「野菜類」として登録

3 IRAC コードについて

病害虫の薬剤抵抗性発現防止の観点から、IRAC（世界農薬工業連盟殺虫剤抵抗性対策委員会）の農薬有効成分作用機構分類コードを記載しています。

◎農薬工業会ホームページ <http://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.html>

＜農薬使用上の注意事項＞

- 1 農薬は、必ず最新のデータ及びラベル等を確認の上、使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度、確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬の選定に当たっては、系統の異なる薬剤を交互に散布する。
- 4 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 5 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中（令和5年5月1日～8月31日）

問い合わせ先 埼玉県病害虫防除所 TEL：048-539-0661



コバトン

病虫害防除情報



令和 5 年 5 月 26 日
埼玉県病虫害防除所

1 情報名 稲（早期栽培）のニカメイガ（ニカメイチュウ）について

2 情報内容

（1）稲のニカメイガ（ニカメイチュウ）

ニカメイガは 1960 年代まではヒメトビウンカと並ぶイネの重要な病虫害でしたが、徐々に発生量が減り、本県では 40 年以上大きな被害は発生していません。

これまで、県内の発生予察灯での誘殺数は周期的な増減はあるものの、全体的に減少傾向でしたが、ここ数年は増加傾向にあり、早期栽培地域を中心に被害が散見されるようになっていきます。本年は、予察灯への誘殺が平年より早く、誘殺数もやや多くなっています。



ニカメイガ中齢幼虫(体長約 10 mm)



ニカメイガ成虫(体長約 13 mm)

（2）被害の様子

本虫が加害するのは幼虫期のみです。第一世代幼虫は初期被害として、株元の葉鞘の変色（褐変）症状が発生します。この初期の葉鞘の変色は 1 株あるいは数株に集中して発生することが多く、褐変した部分から葉が折れ、水に流れたようになる流れ葉症状が見られます。その後、幼虫が茎の内部に食入することで被害が進み、心枯れ症状となって現れます。さらに、第二世代の幼虫は稲の出穂後に食害することで白変穂として現れ、被害株は不稔となります。

参照：「農業総覧 病虫害診断防除編」 農山漁村文化協会（1997）



第一世代幼虫による稲の葉鞘の褐変



ニカメイガ幼虫による葉鞘変色茎



第一世代幼虫による稲の心枯れ症状



第二世代幼虫による白変穂(写真中央)

(3) フェロモントラップ発生調査結果

当所で実施している水稻ほ場の病虫害発生状況調査では、令和2年まではほとんど本虫の被害が見られませんでした。令和3年から早期栽培地域の水稲ほ場を中心に、心枯れ症状・白変穂などの被害が確認されるようになっていきます。

このため、14年ぶりに、本年からフェロモントラップによる本虫の発生量調査を再開したところ、幸手市神扇で5月23日までの越冬世代成虫誘殺数が424頭、加須市麦倉で5月21日までの誘殺数が165頭と、早期栽培地域での誘殺数が多くなっています。いずれの調査地点も5月の第1半旬が越冬世代成虫の発生ピークとなっており、越冬世代成虫の誘殺は6月第1半旬ころまで続く見込まれます。

本虫の要防除水準は、越冬世代成虫の1トラップ当たり誘殺数が400～500頭となっていますので、早期栽培地域では防除しないと被害が発生する懸念があります。

(4) 防除対策

本虫の防除は、箱施薬が最も省力かつ効果的です。早期栽培地域で本虫を対象とする箱施薬を実施していない場合は、速やかに本田での薬剤防除を行いましょう。

若齢幼虫のうちの薬剤防除が有効ですが、粒剤は効きははじめが遅いため、早めの散布を行い、散布後1週間は止水してください。

また、窒素多肥は本虫の成長を促進する要因となるため、適切な施肥を心がけてください。

表 ニカメイガ（ニカメイチュウ）の防除薬剤例（本田防除用薬剤）

薬 剤 名	IRAC コード※	使用時期	使用回数
トレボン粒剤	3A	収穫 21 日前まで	3 回以内
パダン 1 キロ粒剤	14	収穫 30 日前まで	6 回以内
スタークル 1 キロ H 粒剤	4A	収穫 7 日前まで	3 回以内
チューンアップ顆粒水和剤	11A	発生初期、 ただし収穫前日まで	—
ディアナ SC	5	収穫 7 日前まで	2 回以内

（使用基準は令和 5 年 5 月 26 日現在）

※ IRAC コード及び FRAC コードについて

病害虫の薬剤抵抗性発現防止の観点から、IRAC（世界農薬工業連盟殺虫剤抵抗性対策委員会）及び FRAC（同連盟殺菌剤耐性菌対策委員会）の農薬有効成分作用機構分類コードを記載しています。

農薬工業会ホームページ <http://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.html>

<農薬使用上の注意事項>

- 1 農薬は、必ず最新のデータ及びラベル等を確認の上、使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍率は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬の選定に当たっては、系統の異なる薬剤を交互に散布する。
- 4 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 5 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中（令和 5 年 5 月 1 日～ 8 月 3 1 日）

問い合わせ先 埼玉県病害虫防除所 TEL：048-539-0661



病虫害防除情報



コバトン

令和 5 年 7 月 5 日
埼玉県病虫害防除所

1 情報名 イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ）について

2 情報内容

（1）イネ縞葉枯病の病徴について

生育初期に感染すると、新葉が黄白色に退色し、こより状に巻いたまま弓状に徒長します。このような株は「ゆうれい」症状とも呼ばれ、分げつが少なく、枯死します。幼穂形成期以降の感染では出穂しないか、出穂しても出すくみ症状となり、これらの症状によって減収します。



縞状病斑とゆうれい症状



出すくみ穂

（2）病原の特徴及び伝染

ヒメトビウンカが媒介する縞葉枯ウイルスによるウイルス病で、一度保毒したヒメトビウンカは死ぬまでウイルスを保毒するほか、卵を通じて次世代にも伝染します。麦類や畦畔雑草地で増殖したヒメトビウンカ第1世代保毒虫が、水田に移動してイネに感染させ、発病します。また、移植時期が6月中下旬のイネでは第2世代成虫が7月上旬頃から水田に飛来し、ウイルスを媒介します。感染・発病しやすい時期はイネの生育初期～幼穂形成期までで、その後は感染しにくくなります。

本県主要奨励品種のうち、本県育成の「彩のきずな」「彩のかがやき」は本病に抵抗性を持っていますが、「コシヒカリ」「キヌヒカリ」は罹病性です。特に、6月移植の「キヌヒカリ」は、本病感受性が高い時期ため、ヒメトビウンカが多発す

ると被害が大きくなる可能性があります。



ヒメトビウンカ 5 齢幼虫 (体長約 2mm)



ヒメトビウンカ雌成虫 (全長約 4mm)

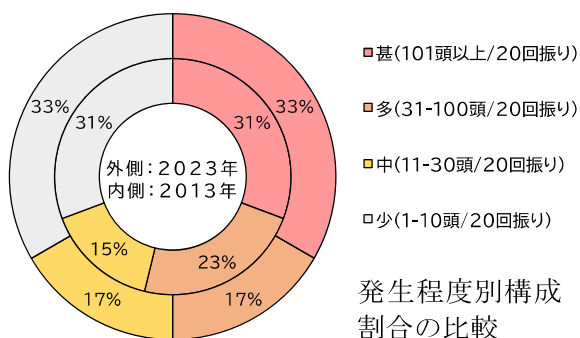
(3) ヒメトビウンカの発生状況

5 月中旬頃実施した麦類ほ場内でのヒメトビウンカの叩き出し調査の結果は 21.8 頭/㎡で、過去 10 年では極端に高かった 2013 年 (74.9 頭/㎡) に次いで高い状況でした。

6 月中旬に実施した本田内のすくい取り調査 (20 回振り) の結果も平均虫数 68.8 頭と、県内で縞葉枯病が多発した 2013 年の平均虫数 90.5 頭に次ぐ本田生息密度となっています。

さらに、すくい取り調査結果を発生

程度別に区分すると、甚発生 3 割以上、甚発生・多発生併せて 5 割以上と、2013 年に非常によく似た発生程度別構成割合となっています。



(4) 防除対策

縞葉枯病は、発生してからの防除はできないので、媒介虫であるヒメトビウンカの防除が重要です。

また、ヒメトビウンカは黒すじ萎縮ウイルスも媒介し、2013 年には「彩のかがやき」等で感染株が見られました。ヒメトビウンカ多発時は、縞葉枯病抵抗性品種であっても防除が必要となります。



黒すじ萎縮病によるわい化株

ヒメトビウンカを対象とする箱施薬を実施していない場合は、速やかに本田で

の薬剤防除を行いましょう。

表 ヒメトビウンカの本田防除薬剤例(地上散布及び無人航空機散布両対応)

薬 剤 名	IRAC コード※	使用時期	使用回数
スタークル1キロH粒剤	4A	収穫7日前まで	3回以内
ダントツフロアブル	4A	収穫7日前まで	3回以内
エクシードフロアブル	4C	収穫7日前まで	3回以内
エミリアフロアブル	4F	収穫7日前まで	2回以内
キラップフロアブル	2B	収穫14日前まで	2回以内

(使用基準は令和5年6月30日現在)

※ IRACコード及びFRACコードについて

病害虫の薬剤抵抗性発現防止の観点から、IRAC（世界農薬工業連盟殺虫剤抵抗性対策委員会）及びFRAC（同連盟殺菌剤耐性菌対策委員会）の農薬有効成分作用機構分類コードを記載しています。

農薬工業会ホームページ <http://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.html>

＜農薬使用上の注意事項＞

- 1 農薬は、必ず最新のデータ及びラベル等を確認の上、使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍率は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬の選定に当たっては、系統の異なる薬剤を交互に散布する。
- 4 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 5 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中（令和5年5月1日～8月31日）

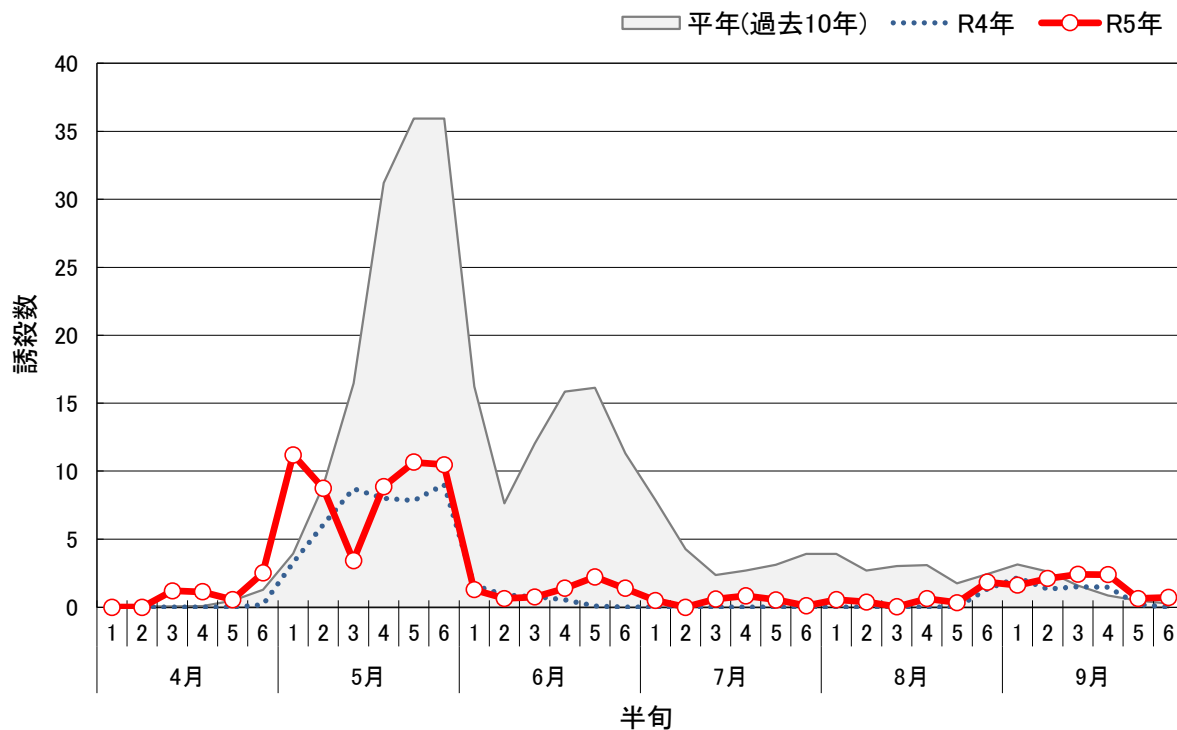
問い合わせ先 埼玉県病害虫防除所 TEL：048-539-0661

(2) 病虫害発生予察調査等結果

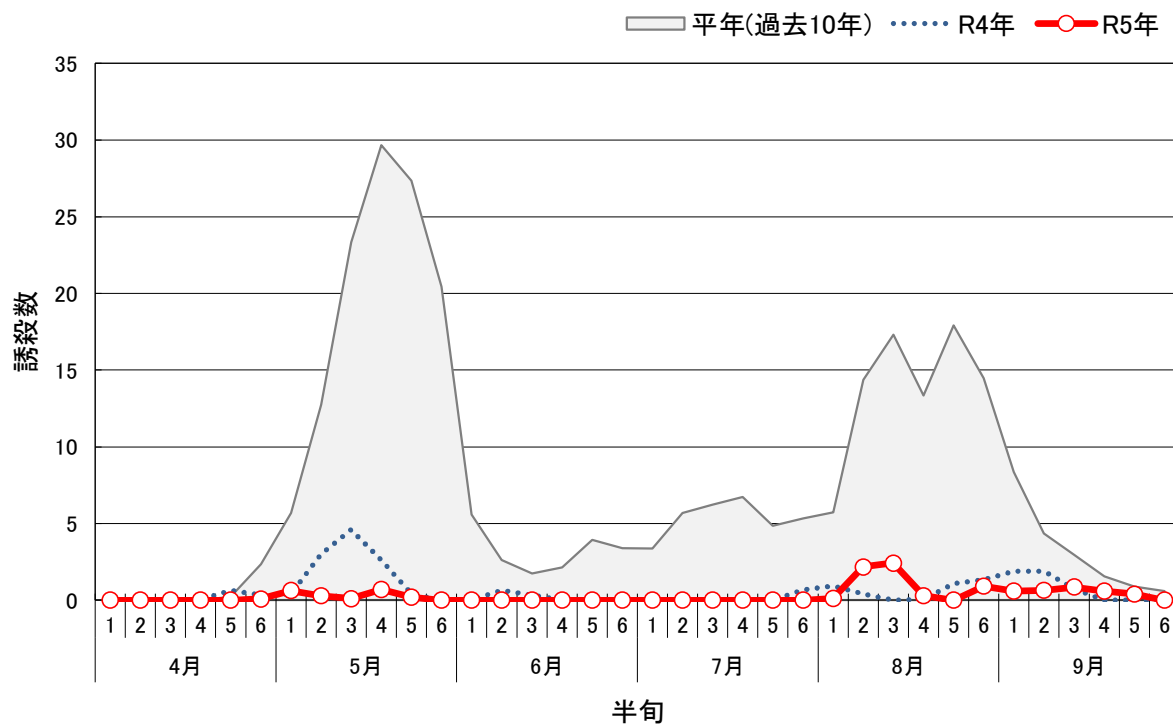
ア 水稻・麦

(ア) フタオビコヤガ (イネアオムシ) のフェロモントラップ調査 (4～9月)

対象作物: 水稻 調査地点: 熊谷市中曽根



対象作物: 水稻 調査地点: 加須市戸室



(イ) 麦ほ場におけるウンカ・ヨコバイ類生息密度調査(5月)

調査方法： 麦類の乳熟期(令和5年5月11日～22日)に、県内15地点の麦類ほ場において、1地点3か所で1m幅(0.2～0.6m²)の麦穂を10回叩いて落ちて来るヒメトビウンカを採取し、1m²当たりの生息密度を算出した。

調査結果： 令和5年度のヒメトビウンカの麦類叩き出し調査の結果は21.8頭/m²で、過去10年では極端に高かった平成25年(74.9頭/m²)に次いで高い。また、調査地点によるばらつきが大きい、約3割の5調査地点で平年(16.7頭/m²)以上の生息密度となっている。

表. 令和5年5月麦類ウンカ・ヨコバイ生息密度調査結果 (単位： 頭/m²)

調査場所	調査月日	麦種	ヒメトビウンカ			ツマグロヨコバイ		
			成虫	幼虫	計	成虫	幼虫	計
川越市古谷上	5/22	小麦	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
坂戸市片柳	5/22	小麦	1.7	5.6	7.2	0.0	2.2	2.2
熊谷市樋春	5/16	小麦	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
熊谷市中曽根	5/16	小麦	0.0	38.9	38.9	0.0	0.0	0.0
川島町戸守	5/17	小麦	0.0	10.0	10.0	0.0	0.0	0.0
熊谷市高本	5/16	小麦	0.0	7.8	7.8	0.0	0.0	0.0
鴻巣市屈巢	5/12	小麦	0.0	4.4	4.4	0.0	0.0	0.0
行田市上池守	5/12	小麦	0.0	6.7	6.7	0.0	4.4	4.4
行田市前谷	5/12	小麦	0.0	13.3	13.3	0.0	0.0	0.0
加須市大越	5/12	小麦	0.0	120.0	120.0	0.0	0.0	0.0
熊谷市飯塚	5/11	小麦	0.0	3.3	3.3	0.0	0.0	0.0
上里町長浜	5/11	小麦	0.8	20.0	20.8	0.0	2.5	2.5
本庄市児玉町	5/11	小麦	0.0	5.3	5.3	0.0	2.7	2.7
白岡市太田新井	5/11	大麦	0.0	72.2	72.2	0.0	0.0	0.0
蓮田市駒崎	5/11	小麦	0.0	16.7	16.7	0.0	0.0	0.0
平均(15地点)			0.2	21.6	21.8	0.0	0.8	0.8
昨年(令和4年)			0.5	17.5	18.0	0.0	0.7	0.7
平年値(過去10年間:平成25年～令和4年)			2.3	14.4	16.7	0.1	0.5	0.5

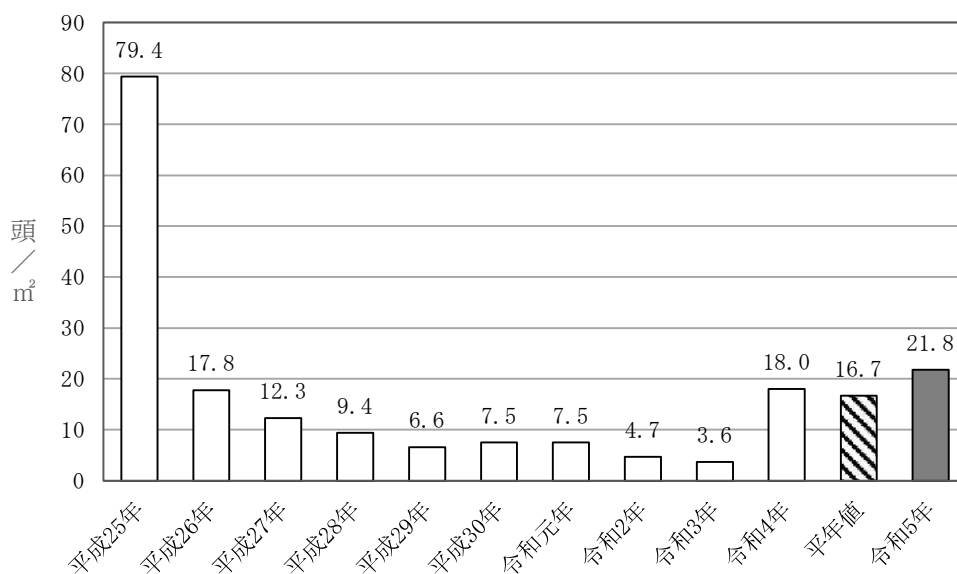


図. 令和5年5月ヒメトビウンカ密度調査結果 (麦類叩き出し)

(ウ) 予察灯調査 (5～9月)

病害虫名		ニカメイガ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市 南田島	1	22	0	4	5	24	
	2	14	0	19	7	7	
	3	6	1	29	8	3	
	4	1	1	27	28	1	
	5	12	0	11	51	0	
	6	13	0	9	47	0	
計		68	2	99	146	35	350
平年値		1.1	1.7	6.2	3.9	3.1	16.0
川島町 上八ツ林	1	0	1	3	2	5	
	2	0	1	2	3	4	
	3	0	2	0	3	4	
	4	8	0	0	8	2	
	5	3	1	0	4	2	
	6	2	1	0	1	0	
計		13	6	5	21	17	62
平年値		3.6	4.3	2.2	1.2	1.2	12.5
熊谷市 玉井	1	0	0	0	0	0	
	2	0	1	0	0	0	
	3	0	1	0	0	0	
	4	0	1	0	2	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	3	0	2	0	5
平年値		2.9	5.8	2.7	2.0	2.1	15.5
本庄市 吉田林	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	0	0	0	0	0
平年値		1.1	1.2	7.4	4.5	1.3	15.5
加須市 大越	1	8	3	3	0	8	
	2	7	5	1	1	8	
	3	2	2	1	1	3	
	4	8	5	0	0	1	
	5	1	1	12	3	0	
	6	3	3	9	3	0	
計		29	19	26	8	20	102
平年値		29.6	7.7	9.4	12.6	4.0	61.4
春日部市 樋籠	1	0	2	0	8	5	
	2	0	3	0	4	3	
	3	1	1	6	8	0	
	4	2	4	9	17	0	
	5	2	1	8	23	0	
	6	2	1	8	16	0	
計		7	12	31	76	8	134
平年値		3.2	2.5	6.1	7.8	1.3	20.9

病害虫名		イネミズウムシ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市 南田島	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	0	0	0	0	0
平年値		2.6	1.4	17.5	6.6	4.5	32.6
川島町 上八ツ林	1	0	1	0	3	0	
	2	0	0	1	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	2	0	0	0	0	
	5	2	0	0	0	0	
	6	2	0	0	1	0	
計		6	1	1	4	0	12
平年値		0.7	2.1	1.7	0.5	0.1	5.1
熊谷市 玉井	1	0	0	0	0	0	
	2	1	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	2	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	3	0	0	
計		1	0	5	0	0	6
平年値		0.9	1.9	9.5	1.8	0.1	14.2
本庄市 吉田林	1	0	0	0	2	0	
	2	0	0	0	2	0	
	3	0	0	0	1	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	0	0	5	0	5
平年値		0.4	0.6	0.7	0.9	0.2	2.8
加須市 大越	1	0	0	1	5	1	
	2	0	0	17	0	1	
	3	0	0	79	2	0	
	4	45	0	90	0	0	
	5	5	1	38	1	0	
	6	0	0	16	0	0	
計		50	1	241	8	2	302
平年値		21.4	1.6	86.4	7.8	0.0	116.3
春日部市 樋籠	1	0	0	1	3	1	
	2	0	1	1	1	1	
	3	0	0	23	1	0	
	4	0	0	37	6	2	
	5	1	0	12	5	0	
	6	1	0	14	2	0	
計		2	1	88	18	4	113
平年値		13.7	3.9	136.0	8.8	0.1	162.5

注) 平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH25～R1年度と大越R3～R4の9年間の平均値を使用。

病害虫名		ツマグロヨコバイ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市 南田島	1	0	0	0	1	0	
	2	0	0	0	2	0	
	3	0	0	1	1	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	1	4	0	5
平年値		0.0	0.4	1.7	4.2	1.6	7.9
川島町 上八ツ林	1	0	0	0	8	0	
	2	0	0	2	3	3	
	3	0	0	12	7	0	
	4	0	0	4	6	1	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	1	
	計	0	0	18	24	5	47
平年値		1.1	3.3	31.4	16.7	40.2	92.7
熊谷市 玉井	1	0	0	0	0	3	
	2	0	0	4	1	1	
	3	0	0	4	0	8	
	4	0	0	3	0	1	
	5	0	0	1	0	0	
	6	0	0	4	0	0	
	計	0	0	16	1	13	30
平年値		0.6	0.7	9.5	22.8	69.0	102.6
本庄市 吉田林	1	0	0	0	1	4	
	2	0	0	1	0	8	
	3	0	0	6	3	35	
	4	0	0	4	6	120	
	5	0	0	0	1	9	
	6	0	0	0	7	0	
	計	0	0	11	18	176	205
平年値		0.9	3.3	13.1	141.8	376.3	535.4
加須市 大越	1	0	0	0	11	4	
	2	0	0	3	1	6	
	3	0	0	13	1	19	
	4	0	0	3	26	4	
	5	0	1	14	8	2	
	6	0	0	27	10	0	
	計	0	1	60	57	35	153
平年値		1.6	8.6	71.2	76.8	66.0	208.2
春日部市 樋籠	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	2	0	1	
	3	0	0	5	0	0	
	4	0	0	1	3	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	1	5	0	
	計	0	0	9	8	1	18
平年値		0.3	10.0	7.1	5.5	2.9	25.8

病害虫名		セジロウンカ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市 南田島	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	1	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	1	0	1
平年値		0.0	1.5	13.2	124.7	57.7	197.1
川島町 上八ツ林	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	1	1	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	1	1	2
平年値		0.0	0.3	2.6	4.0	4.2	11.1
熊谷市 玉井	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	1	1	1	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	1	1	1	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	1	1	0	
	計	0	0	3	3	2	8
平年値		0.0	0.1	4.8	18.7	12.1	35.7
本庄市 吉田林	1	0	0	0	2	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	3	2	
	5	0	0	0	1	3	
	6	0	0	1	0	2	
	計	0	0	1	6	7	14
平年値		0.0	0.0	1.2	53.5	19.9	74.6
加須市 大越	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	2	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	2	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	0	4	4
平年値		0.0	0.6	2.2	7.5	4.1	13.1
春日部市 樋籠	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	1	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	2	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	2	1	3
平年値		0.1	0.8	1.1	2.1	0.2	4.3

注) 平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH25～R1年度と大越R3～R4の9年間の平均値を使用。

病害虫名		ヒメトビウンカ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市 南田島	1	0	0	2	123	26	
	2	0	0	7	17	8	
	3	0	0	1	1	0	
	4	0	0	11	40	0	
	5	0	0	4	20	0	
	6	0	0	58	3	0	
	計	0	0	83	204	34	321
平年値		3.8	28.3	276.7	257.4	11.4	577.6
川島町 上八ツ林	1	0	1	0	97	3	
	2	0	0	2	49	1	
	3	0	1	9	12	0	
	4	4	0	9	7	1	
	5	1	3	0	2	0	
	6	3	1	0	3	0	
	計	8	6	20	170	5	209
平年値		1.9	15.1	195.2	93.0	17.7	322.9
熊谷市 玉井	1	0	0	27	69	30	
	2	0	0	30	26	10	
	3	0	0	20	29	7	
	4	1	0	46	23	4	
	5	0	1	31	12	0	
	6	2	11	192	25	0	
	計	3	12	346	184	51	596
平年値		4.9	27.8	387.5	291.0	31.6	742.8
本庄市 吉田林	1	0	0	6	195	21	
	2	0	3	38	45	4	
	3	0	0	20	28	21	
	4	0	0	60	31	10	
	5	0	0	30	20	1	
	6	0	0	132	33	1	
	計	0	3	286	352	58	699
平年値		3.1	5.2	33.1	160.9	40.1	242.4
加須市 大越	1	0	9	132	579	24	
	2	0	0	154	391	11	
	3	0	1	40	159	12	
	4	4	2	66	76	3	
	5	3	2	33	24	3	
	6	7	118	252	23	0	
	計	14	132	677	1252	53	2128
平年値		0.6	20.8	113.6	326.3	7.8	431.8
春日部市 樋籠	1	0	0	4	11	1	
	2	0	0	4	1	9	
	3	0	0	3	5	0	
	4	0	0	8	7	1	
	5	0	0	7	2	0	
	6	0	5	13	0	0	
	計	0	5	39	26	11	81
平年値		0.5	26.4	21.2	13.7	2.4	64.2

病害虫名		フタオビコヤガ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市 南田島	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	1	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	1	0	1
平年値		0.6	1.8	7.0	16.9	3.4	29.7
川島町 上八ツ林	1	0	0	4	5	2	
	2	1	0	0	0	4	
	3	0	0	2	1	2	
	4	1	0	1	0	3	
	5	2	0	0	0	2	
	6	2	0	0	2	1	
	計	6	0	7	8	14	35
平年値		5.5	4.9	8.0	13.1	3.4	34.9
熊谷市 玉井	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	1	
	4	0	0	0	0	1	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	0	2	2
平年値		0.3	0.9	1.0	7.4	5.0	14.6
本庄市 吉田林	1	0	0	0	0	1	
	2	0	0	0	0	2	
	3	0	0	0	0	8	
	4	0	0	0	1	2	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	1	13	14
平年値		0.1	1.6	16.3	39.4	14.9	72.3
加須市 大越	1	0	0	0	6	9	
	2	0	1	1	9	6	
	3	0	0	0	21	3	
	4	0	0	3	14	0	
	5	0	0	4	18	0	
	6	0	0	1	10	0	
	計	0	1	9	78	18	106
平年値		3.8	5.9	22.3	37.9	9.4	74.0
春日部市 樋籠	1	0	0	0	0	2	
	2	0	0	0	1	2	
	3	0	0	0	3	2	
	4	0	1	0	4	1	
	5	0	0	0	3	0	
	6	0	0	0	1	0	
	計	0	1	0	12	7	20
平年値		0.8	2.5	1.2	4.5	0.3	9.3

注) 平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH25～R1年度と大越R3～R4の9年間の平均値を使用。

病害虫名		斑点米カメムシ類(イネカメ、イネホソを除く)					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市 南田島	1	0	0	0	3	3	
	2	1	2	2	0	3	
	3	0	0	0	2	7	
	4	1	0	3	14	6	
	5	0	0	0	6	1	
	6	0	0	1	13	0	
	計	2	2	6	38	20	68
平年値		0.4	1.4	6.4	9.3	3.7	21.2
川島町 上八ツ林	1	0	0	2	0	2	
	2	0	0	5	0	0	
	3	0	0	0	2	0	
	4	0	0	2	1	2	
	5	0	2	0	1	0	
	6	0	2	0	3	2	
	計	0	4	9	7	6	26
平年値		0.2	3.5	3.8	10.2	4.6	22.3
熊谷市 玉井	1	0	0	0	1	2	
	2	0	0	1	0	1	
	3	0	0	1	0	7	
	4	0	0	3	4	12	
	5	0	1	2	2	0	
	6	0	1	3	1	6	
	計	0	2	10	8	28	48
平年値		0.1	1.1	0.8	1.6	0.6	4.2
本庄市 吉田林	1	0	0	2	2	35	
	2	0	2	5	1	8	
	3	0	0	5	5	43	
	4	2	1	14	15	59	
	5	0	1	19	28	15	
	6	2	1	7	40	52	
	計	4	5	52	91	212	364
平年値		1.3	5.7	12.7	14.3	12.9	46.9
加須市 大越	1	0	1	1	2	1	
	2	0	0	0	1	4	
	3	0	0	1	1	2	
	4	0	0	4	3	7	
	5	0	0	4	5	0	
	6	0	0	9	11	0	
	計	0	1	19	23	14	57
平年値		0.2	1.4	4.1	16.0	5.9	25.2
春日部市 樋籠	1	0	0	0	0	4	
	2	0	0	2	0	4	
	3	0	0	1	1	9	
	4	0	0	2	1	9	
	5	0	0	0	0	3	
	6	0	0	0	0	6	
	計	0	0	5	2	35	42
平年値		1.6	5.1	3.0	2.3	1.0	13.0

病害虫名		イネホソミドリカスミカメ (別和名:アカヒゲホソミドリカスミカメ)					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市 南田島	1	0	2	7	10	12	
	2	0	2	15	2	0	
	3	0	2	23	0	0	
	4	0	4	28	7	0	
	5	0	5	2	0	0	
	6	4	12	6	13	0	
	計	4	27	81	32	12	156
平年値		0.4	33.0	67.0	58.0	12.1	170.5
川島町 上八ツ林	1	0	0	6	8	4	
	2	0	0	15	5	1	
	3	0	2	4	5	1	
	4	0	0	8	14	0	
	5	0	0	0	1	0	
	6	0	3	0	4	0	
	計	0	5	33	37	6	81
平年値		0.3	12.8	29.6	9.3	4.2	56.2
熊谷市 玉井	1	0	62	25	8	14	
	2	2	38	51	5	8	
	3	0	15	23	3	6	
	4	0	27	22	13	7	
	5	1	20	15	3	1	
	6	14	32	43	16	4	
	計	17	194	179	48	40	478
平年値		24.4	280.1	270.1	108.3	31.8	714.7
本庄市 吉田林	1	0	13	24	35	14	
	2	0	61	70	7	6	
	3	0	8	30	7	27	
	4	0	42	59	28	25	
	5	0	19	90	20	3	
	6	13	22	118	37	14	
	計	13	165	391	134	89	792
平年値		1.6	44.8	130.4	70.9	22.0	269.7
加須市 大越	1	0	2	5	9	19	
	2	0	7	10	3	5	
	3	0	5	6	5	7	
	4	0	5	4	25	10	
	5	0	1	11	10	9	
	6	8	11	53	13	0	
	計	8	31	89	65	50	243
平年値		2.7	62.6	44.4	38.9	5.8	149.3
春日部市 樋籠	1	0	1	3	4	4	
	2	0	3	2	0	0	
	3	0	1	17	2	2	
	4	0	2	3	2	6	
	5	0	3	9	0	1	
	6	1	0	7	2	3	
	計	1	10	41	10	16	78
平年値		1.4	20.5	10.5	6.8	0.9	40.1

注) 平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH25～R1年度と大越R3～R4の9年間の平均値を使用。

病害虫名		イネカメムシ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市 南田島	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	3	0	
	4	0	0	0	4	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	7	0	7
平年値		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
川島町 上八ツ林	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	0	0	0
平年値		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
熊谷市 玉井	1	0	0	0	0	2	
	2	0	0	0	0	1	
	3	0	0	0	0	1	
	4	0	0	0	0	2	
	5	0	0	0	1	0	
	6	0	0	0	6	1	
	計	0	0	0	7	7	14
平年値		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
本庄市 吉田林	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	1	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	1	0	1
平年値		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
加須市 大越	1	0	0	0	3	6	
	2	0	0	0	0	4	
	3	0	0	2	3	6	
	4	0	0	0	14	9	
	5	0	0	1	24	0	
	6	0	0	2	31	1	
	計	0	0	5	75	26	106
平年値		0.0	0.1	0.4	2.0	0.2	2.7
春日部市 樋籠	1	0	0	4	4	4	
	2	0	0	9	3	1	
	3	0	0	6	6	1	
	4	0	0	4	2	4	
	5	0	0	11	6	0	
	6	0	0	11	26	12	
	計	0	0	45	47	22	114
平年値		0.0	0.0	0.2	0.7	0.1	1.0

病害虫名		トビイロウンカ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市 南田島	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	2	0	
	4	0	0	1	2	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	1	4	0	5
平年値		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
川島町 上八ツ林	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	1	
	3	0	0	0	0	1	
	4	0	0	1	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	1	0	2	3
平年値		0.0	0.0	0.0	0.2	0.8	1.0
熊谷市 玉井	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	1	0	0	0	
	計	0	1	0	0	0	1
平年値		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
本庄市 吉田林	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	1	0	0	
	5	0	0	1	0	0	
	6	0	0	2	0	0	
	計	0	0	4	0	0	4
平年値		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
加須市 大越	1	0	0	0	2	0	
	2	0	0	0	3	0	
	3	0	0	2	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	1	1	0	
	6	0	1	1	0	0	
	計	0	1	4	6	0	11
平年値		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
春日部市 樋籠	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	0	0	0
平年値		0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1

注) 平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH25～R1年度と大越R3～R4の9年間の平均値を使用。

(エ) いもち病（葉いもち）感染好適条件出現状況（BLASTAM）（5～9月）

a 葉いもち発生予測システム（BLASTAM）について

イネいもち病は空気伝染性病害であるため、発生には気象条件が大きく影響する。気温が20～25℃で曇雨天の日が続き、イネの葉に水滴が付いている状態がいもち病菌の分生子の発芽、侵入、蔓延に好適な条件であり、発生が助長される。

葉いもち発生予測システム（BLASTAM）では、アメダス各地点の気象データの降水量、日照時間、風速からイネ葉面の濡れ時間（湿潤時間）を推定し、気温との組み合わせで、いもち病感染好適条件を判定するものである。

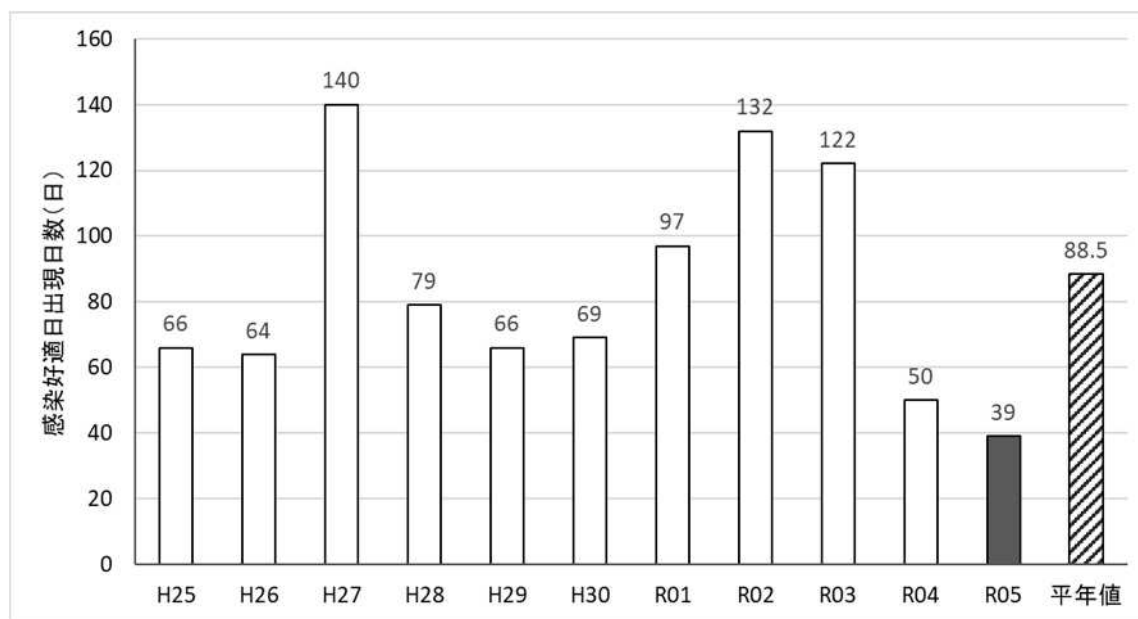
b イネいもち病の発生状況について

ホームページ上で、6月1日から15日ごとに、県内の感染好適日の出現状況を発表し、平年（過去10年間）との比較を数値化することで、適期防除を啓発した。

埼玉県において感染好適日が初出現したのは5月20日（平年6月7日）であり、平年より早かった。例年では5月末から7月中旬ごろまでが梅雨であり、いもち病の感染好適日が多く出現し、本年も集計開始から7月6日までに39日のと平年(36.7日)以上の感染好適日が出現した。しかし、その後本年は記録的な猛暑と乾燥条件に見舞われ、7月7日から集計終了までの感染好適日の出現日数は0日と平年(51.8日)と比較して非常に少なかった。このような夏季の異常な高温と降水量不足の影響もあり、いもち病の感染好適日は県内8か所で計39日と平年（88.54日）より少ない日数であった。

また、7月中旬に実施した、イネいもち病（葉いもち）発生予察調査では、発病地点率は22.7%と平年より大幅に少なかった（平年40.6%）。

7月中旬以降は高温少雨が継続し、ほとんど感染好適日が出現しなかったが、水不足や肥料過多に起因する、いわゆる「ひでりいもち」の発生が見られた結果、本年のいもち病の発生量はほぼ平年並みとなった。



図．葉いもち感染好適日の出現日数
（5月1日～9月30日における県内8地点の合計日数）

表. いもち病（葉いもち）感染好適条件出現状況（令和5年5～9月）

※JPP-NETより引用

地点 月日	寄居	熊谷	久喜	秩父	鳩山	たさい まい	越谷	所沢
5月1日	—	—	—	—	—	4	—	—
5月2日	—	—	—	—	3	—	—	—
5月3日	—	—	—	—	—	—	—	—
5月4日	—	—	—	—	—	—	—	—
5月5日	—	—	—	—	—	—	—	—
5月6日	—	—	—	—	—	—	—	—
5月7日	—	—	—	—	—	—	—	—
5月8日	3	3	—	3	—	3	—	—
5月9日	—	—	—	—	—	—	—	—
5月10日	—	—	—	—	—	—	—	—
5月11日	—	—	—	—	—	—	—	—
5月12日	—	—	—	—	—	—	—	—
5月13日	3	—	—	—	3	—	—	—
5月14日	—	4	—	—	4	4	—	—
5月15日	1	1	1	3	1	1	4	3
5月16日	3	3	—	—	—	3	—	3
5月17日	—	—	—	—	—	—	—	—
5月18日	—	—	—	—	—	—	—	—
5月19日	—	—	—	—	—	—	—	—
5月20日	●	●	—	●	●	●	●	—
5月21日	—	—	—	—	—	—	—	—
5月22日	—	—	—	—	—	—	—	—
5月23日	—	3	3	3	—	3	—	—
5月24日	3	—	3	3	3	3	3	—
5月25日	—	—	—	—	—	—	—	—
5月26日	—	—	—	—	—	—	—	—
5月27日	—	—	—	—	—	—	—	—
5月28日	—	—	—	—	—	—	—	—
5月29日	4	4	—	—	—	—	—	—
5月30日	1	●	●	—	—	●	—	—
5月31日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月1日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月2日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月3日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月4日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月5日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月6日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月7日	4	—	—	—	—	—	—	—
6月8日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月9日	—	—	—	4	—	—	—	—
6月10日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月11日	●	●	●	●	—	4	—	●
6月12日	●	●	●	●	●	●	●	●
6月13日	●	●	●	—	●	●	—	●
6月14日	●	—	—	●	—	—	—	—
6月15日	—	●	—	—	●	—	●	—
6月16日	—	—	●	●	●	—	●	—
6月17日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月18日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月19日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月20日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月21日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月22日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月23日	—	—	—	—	—	—	—	—

地点 月日	寄居	熊谷	久喜	秩父	鳩山	たさい まい	越谷	所沢
6月24日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月25日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月26日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月27日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月28日	—	—	—	—	—	—	—	—
6月29日	—	—	—	—	—	2	—	—
6月30日	—	—	—	—	—	2	—	2
7月1日	2	3	—	●	3	3	—	2
7月2日	—	—	—	—	4	—	—	—
7月3日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月4日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月5日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月6日	2	—	—	●	2	—	—	—
7月7日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月8日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月9日	—	2	2	—	2	2	—	—
7月10日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月11日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月12日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月13日	—	—	—	2	—	—	—	—
7月14日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月15日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月16日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月17日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月18日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月19日	—	—	—	—	—	—	3	—
7月20日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月21日	2	—	—	—	—	—	—	—
7月22日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月23日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月24日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月25日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月26日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月27日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月28日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月29日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月30日	—	—	—	—	—	—	—	—
7月31日	—	—	—	—	—	—	—	—
8月1日	—	—	—	—	—	—	—	—
8月2日	—	—	—	2	2	—	—	—
8月3日	—	—	—	—	—	—	—	—
8月4日	—	—	—	—	—	—	—	—
8月5日	—	—	—	—	—	—	—	—
8月6日	—	—	—	—	—	—	—	—
8月7日	—	—	—	—	—	—	—	—
8月8日	—	—	—	—	—	—	—	3
8月9日	—	—	—	—	—	—	—	—
8月10日	3	3	—	—	—	—	—	—
8月11日	—	—	—	—	—	—	—	—
8月12日	—	—	—	—	—	—	—	—
8月13日	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 感染好適日が出現しなかったため省略								
9月30日	—	—	—	—	—	—	—	—
計	5	6	5	7	5	4	4	3
平年値	12.1	11.4	10.2	13	12.5	8.9	12.5	7.9

・発生指標の解説（数字の1～4は感染のしやすさの段階を示すものではない。）

●	感染好適条件	湿潤時間中の平均気温が15～25℃であり、湿潤時間が湿潤時間中の平均気温ごとに必要な時間満ちし、当日を含めてその日以前5日間の日平均気温の平均値が20～25℃の範囲にある
1	準好適条件 1	湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が20℃未満
2	準好適条件 2	湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が21℃以上
3	準好適条件 3	湿潤時間は10時間以上であるが、湿潤時間中の平均気温が15～25℃の範囲外
4	準好適条件 4	湿潤時間が湿潤時間中の平均気温ごとに必要な時間数より短い
—	好適条件なし	
?	判定不能	

(オ) トビイロウンカ、セジロウンカ、コブノメイガ飛来予測日回数(5～9月)

令和5年

月日	本年	平年	月日	本年	平年	月日	本年	平年	月日	本年	平年	月日	本年	平年
05/01	0	0.0	06/01	0	0.0	07/01	0	0.0	08/01	0	0.0	09/01	0	0.0
05/02	0	0.0	06/02	0	0.0	07/02	0	0.0	08/02	0	0.0	09/02	0	0.0
05/03	0	0.1	06/03	0	0.1	07/03	0	0.1	08/03	0	0.1	09/03	0	0.1
05/04	0	0.0	06/04	0	0.0	07/04	0	0.0	08/04	0	0.0	09/04	0	0.0
05/05	0	0.0	06/05	0	0.0	07/05	0	0.0	08/05	0	0.0	09/05	0	0.0
05/06	0	0.0	06/06	0	0.0	07/06	0	0.0	08/06	0	0.0	09/06	0	0.0
05/07	0	0.2	06/07	0	0.2	07/07	0	0.2	08/07	0	0.2	09/07	0	0.2
05/08	0	0.1	06/08	0	0.1	07/08	0	0.1	08/08	0	0.1	09/08	0	0.1
05/09	0	0.0	06/09	1	0.0	07/09	1	0.0	08/09	0	0.0	09/09	0	0.0
05/10	0	0.0	06/10	0	0.0	07/10	0	0.0	08/10	0	0.0	09/10	0	0.0
05/11	0	0.1	06/11	0	0.1	07/11	0	0.1	08/11	0	0.1	09/11	0	0.1
05/12	0	0.1	06/12	0	0.1	07/12	0	0.1	08/12	0	0.1	09/12	0	0.1
05/13	0	0.2	06/13	0	0.2	07/13	0	0.2	08/13	0	0.2	09/13	0	0.2
05/14	0	0.0	06/14	0	0.0	07/14	0	0.0	08/14	0	0.0	09/14	0	0.0
05/15	0	0.0	06/15	0	0.0	07/15	0	0.0	08/15	0	0.0	09/15	0	0.0
05/16	0	0.2	06/16	0	0.2	07/16	0	0.2	08/16	0	0.2	09/16	0	0.2
05/17	0	0.1	06/17	0	0.1	07/17	0	0.1	08/17	0	0.1	09/17	0	0.1
05/18	0	0.1	06/18	0	0.1	07/18	0	0.1	08/18	0	0.1	09/18	0	0.1
05/19	0	0.2	06/19	0	0.2	07/19	0	0.2	08/19	0	0.2	09/19	0	0.2
05/20	0	0.1	06/20	0	0.1	07/20	0	0.1	08/20	0	0.1	09/20	0	0.1
05/21	0	0.1	06/21	0	0.1	07/21	0	0.1	08/21	0	0.1	09/21	0	0.1
05/22	0	0.1	06/22	0	0.1	07/22	0	0.1	08/22	0	0.1	09/22	0	0.1
05/23	0	0.0	06/23	0	0.0	07/23	0	0.0	08/23	0	0.0	09/23	0	0.0
05/24	0	0.0	06/24	0	0.0	07/24	0	0.0	08/24	0	0.0	09/24	0	0.0
05/25	0	0.0	06/25	0	0.0	07/25	0	0.0	08/25	0	0.0	09/25	0	0.0
05/26	0	0.1	06/26	0	0.1	07/26	0	0.1	08/26	0	0.1	09/26	0	0.1
05/27	0	0.0	06/27	0	0.0	07/27	0	0.0	08/27	0	0.0	09/27	0	0.0
05/28	0	0.1	06/28	0	0.1	07/28	0	0.1	08/28	0	0.1	09/28	0	0.1
05/29	0	0.0	06/29	0	0.0	07/29	0	0.0	08/29	0	0.0	09/29	0	0.0
05/30	0	0.0	06/30	0	0.0	07/30	0	0.0	08/30	0	0.0	09/30	0	0.0
05/31	0	0.0				07/31	0	0.0	08/31	0	0.0	合計	2	9.7

(注1) 平年値は、平成24～令和3年までの過去10年間の平均値（令和4年度は6月26日以降欠測であったため）

(注2) 数値の説明：0…飛来無し日 1…飛来有り日

(注3) 飛来予測日は、JPP-NET（（一社）日本植物防疫協会）が提供する、『ウンカ飛来予測システム』の数値を使用

(注4) トビイロウンカ、セジロウンカは、埼玉県内で越冬できず、中国大陸からジェット気流に乗って飛来する。

（一社）日本植物防疫協会では、大陸での害虫の飛び立ち日と気流の状況から、日本国内各地点への飛来予測日を算出する情報を提供している。予測飛来日回数が多いほど、害虫の多発が予想される。



トビイロウンカによる坪枯れ被害



トビイロウンカ成虫



セジロウンカ成虫

(カ) スクミリングガイの被害状況(6～7月)調査の結果

- 1 調査年月日:被害状況調査は、田植後1～2か月後に調査(6～7月頃に調査する)
- 2 調査場所:発生地点での拡大状況を水田及び排水路で実施する／各担当地域
- 3 調査項目等:次表のとおり(調査日、品種、生息域面積、被害面積率、被害面積、被害状況)
- 4 具体的な調査方法

生息域面積:生息域面積は水田や排水路の貝や卵塊の目視

被害面積率:欠株率1%以上のほ場割合

卵塊数:用・排水路又は畦畔10m当たりの平均卵塊数

被害状況:欠株の目視



調査年月日		主な調査地点	品種名	作型	移植時期	生息域 面積 (ha)	被害 面積率 (%)	被害 面積 (ha)	卵塊数 (塊/10m)	被害状況 (被害田の欠株率)		備 考
										平均(%)	最大(%)	
令和5年	6月20日	加須市琴寄	コシヒカリ	早期	4月下旬	56	10	5.6	22.1	17	70	欠株が多いほ場が数筆ある。排水路の卵塊も昨年より増えており、最大は89塊/10m。
5年	6月20日	加須市外記新田	コシヒカリ	早期	4月下旬	12	5	0.6	2.0	3	5	昨年より欠株が目立つが、無防除水田でも大きな被害はない。
5年	6月20日	加須市新川通	オオナリ	早植	5月下旬	10	7	0.7	17.6	5	5	外記新田隣接地域の飼料用米。欠株は少ないが、一部に卵塊が多い畦畔(最大41塊/10m)がある。
5年	6月20日	幸手市千塚	コシヒカリ	早期	5月上旬	5	3	0.2	4.6	2	5	昨年より欠株が少なく、卵塊数も減少。
5年	6月22日	さいたま市西区宝来	不明	早植	5月上旬	7	2	0.1	8.3	1	1	欠株は昨年同様少ないが、卵塊はやや多く、一部に卵塊が多い排水路(最大22塊/10m)がある。
5年	6月22日	さいたま市桜区	不明	早植～普通	5月中旬～6月中旬	45	5	2.3	4.9	3	10	移植期が5月中旬から6月中旬まで混在しており、移植が遅いほ場で欠株が目立つ。昨年より、被害田は減少。
5年	7月7日	富士見市南畑新田	不明	早植～普通	5月中旬～6月中旬	73	1	0.7	9.9	1	5	排水路に貝が生息しているが、水田には少なく、欠株等の被害も少ない。排水路等の貝や卵塊も昨年より増加。
5年	7月7日	さいたま市西区塚本町	不明	普通	6月上旬	22	1	0.2	9.5	1	1	排水路に貝が生息しているが、水田には少なく、欠株等の被害も少ない。排水路等の貝や卵塊は昨年より増加。
5年	7月6日	吉見町久保田新田	不明	普通	5月下旬	34	3	1.0	10.3	3	5	貝の多い水田は休耕だが、被害水田は昨年よりやや多い。一部に卵塊が多い排水路(最大46塊/10m)がある。
5年	8月1日	鴻巣市大芦	不明	普通	6月中旬	84	1	0.8	10.9	1	5	移植の遅い水田の一部で若干欠株が見られるが、被害水田は昨年より少ない。
5年	8月1日	熊谷市下奈良(北)	不明	普通	6月下旬	33	4	1.3	11.8	1	5	欠株率5%程度の水田が30a程度まとまって存在するが、被害水田は昨年より減少。排水路等の卵塊は昨年より増加。
5年	8月1日	熊谷市中奈良・下奈良(南)	不明	普通	6月下旬	11	20	2.2	-	2	10	欠株率1～2%の水田が多い。水田内に貝や卵塊は見られるが、水路等では卵塊が見られなかった。
5年	8月1日	熊谷市西城	不明	普通	6月下旬	17	30	5.2	9.1	5	15	昨年被害が多かったほ場は休耕となり、極端に大きな被害の水田は減少したが、作付けが継続しているほ場で10～15%の欠株ほ場が2ha程度まとまって存在した。
5年	8月2日	熊谷市今井・下奈良(南)	不明	普通	6月下旬	25	30	7.4	11.3	10	90	90%欠株のほ場は20a程度だが、20～50%欠株のほ場が1ha程度、10～15%欠株のほ場が2ha程度ある。
5年	8月2日	熊谷市善ヶ島	不明	普通	6月下旬	49	10	4.9	12.8	10	40	昨年被害が大きかった地区で大豆への転換や不耕作地の増加により水稻作付が半減。欠株率10%以上のほ場が3ha程度ある。
5年	8月2日	熊谷市八ツ口	不明	普通	6月下旬	72	8	5.8	21.7	20	60	善ヶ島の備前渠用水対岸。排水路の卵塊、被害水田とも昨年より減少しているが、最大卵塊数は124塊/10mと多い。
5年	8月2日	熊谷市弥藤吾	不明	普通	6月下旬	6	5	0.3	67.9	1	3	卵塊は多いが(最大卵塊数254塊/10m)、防除が浸透してきたため、欠株は少ない。
合計(面積)／平均(卵塊数)						560		39.3	14.7			
昨年(令和4年度)						473		22.1	31.7			

(キ) 水稻観察地点調査(6～9月)

a 20回振りすくい取り(頭)

			ヒメトビウンカ				セジロウンカ				ツマグロヨコバイ			
			6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの	令和5年	幼虫	54.7	173.0	72.8	66.5	0.0	0.2	2.0	0.0	0.3	11.8	105.9	17.0
		成虫	13.7	67.9	36.1	23.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.3	12.8	61.0	27.0
移植ほ場	平年値	幼虫	3.2	6.8	71.0	88.2	0.0	0.0	0.7	0.7	0.1	1.9	157.2	316.8
		成虫	6.0	30.1	76.6	92.0	0.0	0.1	4.4	1.7	3.4	9.2	67.6	109.7
5/20以降の	令和5年	幼虫	0.0	46.5	650.0	197.3	0.0	0.0	10.3	4.8	0.0	0.0	2.2	85.8
		成虫	0.5	25.3	103.5	109.8	0.0	0.0	1.2	2.8	0.0	1.2	6.7	36.3
移植ほ場	平年値	幼虫	0.1	4.3	138.9	174.9	0.0	0.0	6.1	11.1	0.2	0.1	4.8	28.5
		成虫	1.2	14.4	121.5	84.9	0.0	0.2	6.7	7.4	0.0	0.6	1.7	34.1

			斑点米カメムシ類 (アカヒゲホソミヅカサカミ)				斑点米カメムシ類 上段:イナカミシ、下段:クモヒカミ				斑点米カメムシ類 (その他)			
			6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの	令和5年		0.9	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	2.5	8.0	0.0	0.1	0.3	0.0
		移植ほ場	1.4	0.3	0.1	0.0					0.0	0.1	0.4	0.3
5/20以降の	令和5年		0.5	1.7	0.5	0.5	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.3	4.5
		移植ほ場	1.9	1.0	1.8	0.2	0.0	0.0	0.2	1.2	0.0	0.0	0.4	0.4

			イネツトムシ				イネアオムシ			
			6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの	令和5年		0.0	0.0	0.0	0.1	0.2	0.0	0.0	0.0
		移植ほ場	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
5/20以降の	令和5年		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		移植ほ場	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.2

- ・空欄は移植直後及び収穫後等により調査不能のためデータ無し
- ・平年値：平成28～令和4年の7年間の平均値（イネカメムシは平年値なし）
- ・令和4年度調査地点

【5/20までの移植ほ場】

川越市小中居、吉見町西吉見、熊谷市中曽根、加須市大越、加須市麦倉、春日部市樋籠、幸手市神扇、吉川市中井

【5/20以降の移植ほ場】

坂戸市横沼、毛呂山町箕和田、川島町曲師、嵐山町吉田、本庄市児玉町吉田林、美里町関

b 病害虫発生調査結果

		葉いもち				穂いもち (%)				紋枯病			
		(発病度)				(被害率)				(発病度)			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの	令和5年	0.0	0.4	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1	0.3	0.3	4.0	24.0
移植ほ場	平年値	0.0	0.9	0.9	2.1	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.4	3.9	19.8
5/20以降の	令和5年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.0	0.0	0.0	10.0
移植ほ場	平年値	0.0	0.4	2.9	2.7	0.0	0.0	0.0	0.7	0.0	0.5	2.0	13.0

		もみ枯細菌病 (%)				ごま葉枯病				ばか苗病 (%)			
		(発病率)				(発病度)				(発病株率)			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの	令和5年	0.0	0.0	0.0	3.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
移植ほ場	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
5/20以降の	令和5年	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
移植ほ場	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

		縞葉枯病 (%)				心枯線虫病 (%)			
		(発病株率)				(発病株率)			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの	令和5年	0.3	5.3	3.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
移植ほ場	平年値	0.0	2.1	6.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
5/20以降の	令和5年	0.0	0.0	3.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
移植ほ場	平年値	0.0	0.7	0.9	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0

		ニカメイガ (%)				イネツトムシ (個)				フタオビコヤガ* (頭)			
		(発病株率)				(苞数/25株あたり)				(虫数/1株あたり)			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの	令和5年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
移植ほ場	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
5/20以降の	令和5年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0
移植ほ場	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1

*別名：イネアオムシ

		コブノメイガ (%)				イネミズゾウムシ (頭)			
		(被害葉率)				(虫数/25株あたり)			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの	令和5年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.0	0.0	0.0
移植ほ場	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0
5/20以降の	令和5年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
移植ほ場	平年値	0.0	0.0	0.3	1.6	0.2	0.0	0.0	0.0

- ・空欄は移植直後及び収穫後等により調査不能のためデータ無し
- ・平年値：平成28～令和4年の7年間の平均値
- ・発病度は「H28 発生予察事業の調査実施基準（農林水産省）」に基づき、算出した。

(ク) イネツトムシ発育予測 (7月)

(有効積算温度シミュレーション計算値：6月1日～)

a 7月4日現在の予測

表1 イネツトムシ第2世代の産卵最盛日～4齢終了までの予測

項 目	令和5年予測	令和4年	平年	平年との差
産卵最盛日	7月19日	7月18日	7月21日	平年より2日早い
孵化最盛日	7月23日	7月22日	7月25日	平年より2日早い
3齢脱皮最盛日	8月1日	7月30日	8月2日	平年より1日早い
4齢脱皮最盛日	8月4日	8月2日	8月5日	平年より1日早い

注)：例年多発ほ場では予測値と一致し、少発生ほ場では発生時期が早い

算出方法：令和4年7月4日までの実測気象データ。その後は平年値を入力。

産卵最盛日は(6月1日～有効積算温度539日度の日)。孵化最盛日は(同594日度)

3齢脱皮最盛日は(同722日度)。4齢脱皮最盛日は(772日度) 発育零点は13.4℃。

b 実測気象データによる予測結果

表2 イネツトムシ第2世代の産卵最盛日～4齢終了までの予測結果

項 目	令和5年予測	令和4年	平年	平年との差
産卵最盛日	7月19日	7月18日	7月21日	平年より2日早い
孵化最盛日	7月23日	7月22日	7月25日	平年より2日早い
3齢脱皮最盛日	8月1日	7月30日	8月2日	平年より1日早い
4齢脱皮最盛日	8月4日	8月2日	8月5日	平年より1日早い

* 薬剤防除を必要とする目安(孵化最盛日より4～7日の間に密度調査を行う)

孵化直後の幼虫が存在しない場合(既に2～3齢以上に成長)

0.3個体/株 [100株調査で30個体]：発生数が確定したと推定。

孵化直後の幼虫が存在する場合(1～2齢が中心)

0.05個体/株 [100株調査で5個体]：今後増加が懸念される。

注) 0.3個体/株の発生によって、5%以下の減収とみなされる。

参考：神奈川県以南、千葉県海岸線で越冬しているが、神奈川県のピークが5月下旬として、埼玉県への飛来は6/1としている。

(ケ) フタオビコヤガ(イネアオムシ)発育予測 (7月)

「有効積算温度シミュレーション計算値：フェロモン調査の越冬世代成虫の50%誘殺日(5月4日)の翌日から」

a 7月4日現在の予測

表1 フタオビコヤガの発育次世代予測

項 目	令和5年予測	令和4年	平年	平年との差
基準日(越冬世代成虫50%誘殺数)	5月4日	5月12日	—	(基準日は平年値無し)
第1世代成虫発蛾最盛日	6月8日	6月17日	6月17日	平年より9日早い
第2世代成虫発蛾最盛日	7月3日	7月6日	7月11日	平年より8日早い
第3世代成虫発蛾最盛日	7月24日	7月27日	8月2日	平年より9日早い

注)：発育零点は10.2℃

算出方法：令和4年7月4日までの気象データ。その後は平年値を入力。

第1世代成虫発蛾最盛日は(越冬世代成虫50%誘殺日から有効積算温度341日度の日)。

第2世代成虫発蛾最盛日は(越冬世代成虫50%誘殺日から有効積算温度682日度の日)。

第3世代成虫発蛾最盛日は(越冬世代成虫50%誘殺日から有効積算温度1023日度の日)。

b 実測気象データによる予測結果

表2 フタオビコヤガの発育次世代予測結果

項 目	令和5年予測	令和4年	平年	平年との差
基準日(越冬世代成虫50%誘殺数)	5月4日	5月12日	—	(基準日は平年値無し)
第1世代成虫発蛾最盛日	6月8日	6月17日	6月17日	平年より9日早い
第2世代成虫発蛾最盛日	7月3日	7月6日	7月11日	平年より8日早い
第3世代成虫発蛾最盛日	7月21日	7月27日	8月2日	平年より12日早い

注)：発育零点は10.2℃

* 薬剤防除を必要とする目安(最盛日の2～7日後)

(コ) いもち病発生状況調査結果(7月)

- 1 調査時期：7月中旬（基準日7月15日）
2 調査場所：定点および常発地
3 調査項目等：表のとおり
4 調査方法：任意の100株について調査

【参考】 発病度について
1～20：少発生、21～40：中発生
41～70：多発生、71以上：甚発生



いもち病(葉いもち)
左:慢性型病斑

調査年月日 (令和)		調査地点	定点又は 常発地別	品種名	移植期	草丈 (cm)	発病 株率 (%)	発病度	病斑の種類		発病 部位	備 考
									慢性型	進行型		
5年	7月18日	鴻巣市関新田	過去発生地点	不明	5月下旬	72	0	0.0	—	—	—	
〃	7月18日	蓮田市駒崎	過去発生地点	不明	6月中旬	79	1	0.3	1	0	葉	畦畔メヒシバ病斑少ない
〃	7月12日	川越市小中居	定点	コシヒカリ	5月中旬	79.5	0	0.0	—	—	—	
〃	7月12日	坂戸市横沼	定点	むさしの26号	5月下旬	68	0	0.0	—	—	—	
〃	7月12日	毛呂山町箕和田	定点	コシヒカリ	5月中旬	78.6	0	0.0	—	—	—	
〃	7月10日	嵐山町吉田	定点	彩のきずな	6月上旬	48	0	0.0	—	—	—	
〃	7月10日	川島町曲師	定点	コシヒカリ	5月下旬	39	0	0.0	—	—	—	
〃	7月10日	吉見町西吉見	定点	コシヒカリ	5月下旬	76	0.3	0.1	0.3	0	葉	
〃	7月11日	秩父市太田	常発地	不明	6月上旬	75	0	0.0	—	—	—	畦畔のメヒシバの病斑も少ない
〃	7月11日	秩父市小柱	常発地	彩のきずな	6月上旬	88	0	0.0	—	—	—	〃
〃	7月11日	小鹿野町下小鹿野	常発地	不明	6月中旬	60	5	1.3	5	0	葉	
〃	7月11日	皆野町三沢	常発地	コシヒカリ	6月上旬	78	0	0.0	—	—	—	
〃	7月18日	本庄市吉田林	定点	彩のかがやき	6月下旬	42	0	0.0	—	—	—	
〃	7月18日	美里町関	定点	コシヒカリ	5月下旬	74	0	0.0	—	—	—	畦畔のメヒシバの病斑も少ない
〃	7月13日	熊谷市中曽根	定点	コシヒカリ	5月上旬	88	2	0.5	2	0	葉	
〃	7月12日	行田市前谷	旧定点	彩のかがやき	6月下旬	20	0	0.0	—	—	—	
〃	7月12日	加須市麦倉	定点	コシヒカリ	4月下旬	89	0	0.0	—	—	—	
〃	7月12日	加須市大越1	定点	ほしじるし	5月中旬	83	0	0.0	—	—	—	
〃	7月10日	加須市大越2	過去発生地点	不明	6月上旬	75	0	0.0	—	—	—	畦畔のメヒシバは病斑多
〃	7月14日	春日部市樋籠	定点	コシヒカリ	5月上旬	102	0	0.0	—	—	—	
〃	7月14日	吉川市中井	定点	彩のきずな	5月中旬	72	0	0.0	—	—	—	
〃	7月14日	幸手市神扇	定点	コシヒカリ	5月中旬	97	4	1.0	4	0	葉	
調査地点数：22		発病地点数：5		発病地点率：22.7%		平均	0.6	0.1	2.5	0.0		

いもち病発生状況調査 過去の調査結果

調査年月日 (平成)		調査地点数	発病地点数	発病地点率 (%)	平均発病株率 (%)	平均発病度	病斑の種類		備 考(注意報発表の有無など)
							慢性型	進行型	
平成25年	7月中下旬	28	1	3.6	0.1	発病度は平成28年度調査から表記	1.0	0.0	6月末の感染好適日は平年の2倍だったが、定点の調査結果を優先した。
26年	7月中下旬	32	4	12.5	1.3		0.6	0.7	6月1日～7月25日の感染好適日は平年の1.4倍。平坦地でも発生を確認した。
27年	7月中下旬	31	23	74.2	17.7		16.0	1.6	7月9日 注意報発表（葉いもち、穂いもち）
28年	7月中下旬	36	22	61.1	14.8	6.1	6.4	2.8	7月27日 注意報発表（葉いもち、穂いもち）
29年	7月中下旬	51	12	23.5	3.6	1.5	8.8	0.0	
30年	7月中下旬	22	5	22.7	22.7	1.0	1.3	0.0	
令和元年	7月中下旬	23	13	56.5	2.0	2.0	2.0	0.3	発生地点率は高かったが、発生程度や発生株率が低かったため、予察情報の発表はしなかった。
2年	7月中下旬	23	14	60.9	4.1	1.0	2.0	2.3	7月28日 注意報発表（葉いもち、穂いもち）
3年	7月中下旬	22	13	59.1	12.7	4.6	13.0	8.6	7月7日 注意報発表（葉いもち）
4年	7月中下旬	22	7	31.8	5.5	2.5	1.1	14.0	
過去10年間平均		29.0	11.4	40.6	8.4	2.1	5.2	3.0	

(サ) 水稻の斑点米カメムシ類の畦畔・雑草地発生調査結果(7月)

- 1 調査年月日:7月中旬頃を基準日として調査した。
- 2 調査場所:これまで実施してきた調査地点(畦畔・雑草地・土手等)／各担当地域。
- 3 調査項目等:斑点米カメムシ類の幼虫・成虫別に計数調査した。
次表のとおり。(調査地点、調査日、カメムシ類別、調査場所の状況(雑草の種類、草丈などの管理状況等について分かる範囲で記載する。))
- 4 具体的な調査方法:捕虫網による10往復・20回振り調査。



*別和名: アカヒゲホソミドリカスミカメ																		主な斑点米カメムシ類(表中出現順)	
調査年月日		調査地点／種類	イネホソミドリカスミカメ*		アカスジカメムシ		クモヘリカメムシ		ホソハリカメムシ		シラホシカメムシ		トゲシラホシカメムシ		その他		合計 頭	参考 前年 (R4年)	備 考 (雑草などの管理状況等)
			幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫			
5年	7月12日	川越小中居	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	4	1	畦畔、その他(イネカメムシ1)、メヒシバ(5cm)とクローバー主体
5年	7月12日	坂戸横沼	0	4	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2	8	15	農道脇法面、イネ科雑草(1m)とクローバー主体、その他(ブチヒゲカメムシ3)	
5年	7月12日	毛呂山箕和田	0	0	0	0	0	0	1	4	0	0	0	0	2	5	12	5	休耕田、カモジグサ(60cm)とツユクサ主体、その他(ウズラカメムシ7)
5年	7月10日	嵐山町吉田	2	3	3	1	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	12	0	畦畔
5年	7月10日	川島町曲師	1	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	16	8	畦畔
5年	7月10日	吉見町久保田	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	18	畦畔
5年	7月10日	吉見町西吉見	0	13	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	15	27	畦畔
5年	7月11日	本庄市吉田林	103	47	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	156	97	畦畔、メヒシバとイヌムギ(40cm)主体
5年	7月11日	美里町関1	135	75	8	3	0	0	2	8	0	0	0	0	0	0	231	24	畦畔、メヒシバとノビエ(60cm)主体
5年	7月18日	美里町関2	44	18	102	27	0	0	3	5	11	4	0	0	0	2	216	20	ねぎほ場脇、メヒシバとエノコログサ(90cm)主体、その他(フタトゲムギカスミカメ成1、スカシヒメヘリカメムシ成1)
5年	7月13日	熊谷市中曽根 1	1	3	0	32	0	0	0	2	5	0	0	0	0	0	43	2	畦畔、通殿川沿い、エノコログサ主体
5年	7月13日	熊谷市中曽根 2	10	11	0	66	0	0	1	6	4	2	0	0	1	7	108	2	畦畔、メヒシバ主体、その他(ミナミアオカメムシ成3、ブチヒゲカメムシ成4幼1)
5年	7月12日	行田市前谷	26	51	44	21	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	143	74	畦畔、メヒシバ(70cm)、クローバー主体
5年	7月10日	加須市麦倉	0	5	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	2	2	14	9	畦畔、イタリアンライグラス(45cm)主体、その他(ムラサキシラホシカメムシ4)
5年	7月10日	加須市大越	0	13	0	0	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0	22	34	畦畔、メヒシバ(50cm)主体、オヒシバ(40cm)
5年	7月14日	幸手市神扇	5	1	14	7	0	0	8	1	0	0	0	3	0	1	40	75	農道脇水路法面、その他(アカヒメヘリカメムシ1)
5年	7月14日	春日部市樋籠	1	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	0	畦畔、イネ科雑草、クローバー
5年	7月14日	吉川市中井	7	19	0	0	0	0	6	3	0	0	0	0	1	1	37	30	畦畔、メヒシバ主体、その他(アカヒメヘリカメムシ幼1、ヒゲナガカメムシ成1)
合計		調査地点数: 18	336	291	175	160	0	0	26	42	20	8	0	4	8	20	1,090	439	発生地点率 18/18地点 100%
平均		1地点あたり頭数	18.7	16.2	9.7	8.9	0.0	0.0	1.4	2.3	1.1	0.4	0.0	0.2	0.4	1.1	60.6	25.8	

過去のデータ

調査年月日		調査地点／種類	イネホソミドリカスミカメ*		アカスジカスミカメ		クモヘリカメムシ		ホソハリカメムシ		シラホシカメムシ		トゲシラホシカメムシ		その他		合計 頭	発生地点率 %	備 考 (調査地点のうち斑点米カメムシの発生地点数)
			幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫			
平成																			
25年	7月上旬	20調査地点	310	507	38	238	0	0	2	43	1	1	0	0	0	8	1,148	95.0%	発生地点 19/20地点
		1地点当たり平均	15.5	25.4	1.9	11.9	0.0	0.0	0.1	2.2	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.4	57.4		平成25年7月19日に、平成25年度病害虫発生予察注意報第3号「イネの斑点米カメムシ類」を発表
26年	7月上旬	18調査地点	304	343	107	37	0	0	2	13	1	2	0	1	1	9	820	94.4%	発生地点 17/18地点
		1地点当たり平均	16.9	19.1	5.9	2.1	0.0	0.0	0.1	0.7	0.1	0.1	0.0	0.1	0.1	0.5	45.6		平成26年6月30日に、平成26年度病害虫発生予察注意報第4号「斑点米カメムシ類」を発表
27年	7月上旬	18調査地点	43	135	3	12	0	0	0	11	10	2	0	0	0	9	225	77.8%	発生地点 14/18地点
		1地点当たり平均	2.4	7.5	0.2	0.7	0.0	0.0	0.0	0.6	0.6	0.1	0.0	0.0	0.0	0.5	12.5	-	-
28年	7月上旬	15調査地点	8	32	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	44	73.3%	発生地点 11/15地点
		1地点当たり平均	0.5	2.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.9	-	-
29年	7月上旬	22調査地点	17	64	0	0	0	0	2	6	0	0	0	1	9	1	100	77.2%	発生地点 17 /22地点
		1地点当たり平均	0.8	2.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.3	0.0	0.0	0.0	0.1	0.4	0.0	4.5		平成29年7月3日に、平成29年度病害虫発生予察注意報第1号「斑点米カメムシ類(特に、アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ)」を発表
30年	7月上旬	17調査地点	31	97	1	12	0	1	0	4	0	0	0	2	0	0	148	58.8%	発生地点 10/17地点
		1地点当たり平均	1.8	5.7	0.1	0.7	0.0	0.1	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	8.7	-	-
元年	7月上旬	17調査地点	200	210	0	1	1	0	19	10	1	3	0	0	0	0	445	82.4%	発生地点 14/17地点
(令和)		1地点当たり平均	11.8	12.4	0.0	0.1	0.1	0.0	1.1	0.6	0.1	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	26.2	-	-
2年	7月上旬	17調査地点	52	94	9	14	0	11	1	13	0	1	0	1	0	14	210	100.0%	発生地点 17/17地点
(令和)		1地点当たり平均	3.1	5.5	0.5	0.8	0.0	0.6	0.1	0.8	0.0	0.1	0.0	0.1	0.0	0.8	12.4	-	-
3年	7月上旬	17調査地点	21	87	0	12	0	2	3	27	0	1	0	1	0	0	154	100.0%	発生地点 17/17地点
(令和)		1地点当たり平均	1.2	5.1	0.0	0.7	0.0	0.1	0.2	1.6	0.0	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	9.1	-	-
4年	7月上旬	17調査地点	107	240	30	41	0	0	1	13	0	1	1	1	2	2	439	88.2%	発生地点 15/17地点
(令和)		1地点当たり平均	6.3	14.1	1.8	2.4	0.0	0.0	0.1	0.8	0.0	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	25.8	-	-
平年		1地点当たり平均	6.0	10.0	1.0	1.9	0.0	0.1	0.2	0.8	0.1	0.1	0.0	0.0	0.1	0.2	20.5	84.7%	

(シ) ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果(1月)

病害虫調査データ

ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果

令和6年1月15日

埼玉県病害虫防除所

病害虫防除所では、イネ縞葉枯病の発生量を予測するため、ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率を調査しています。

令和元年度以降保毒虫率が減少傾向にあり、今年度の調査結果は、保毒虫率が過去10年で最も低くなっています。ただし、コシヒカリ、キヌヒカリ等のイネ縞葉枯病感受性品種作付ほ場の周辺では保毒虫率がやや高い傾向が見られました。イネ縞葉枯病は移植後から幼穂形成期までに感染します。感受性品種では、育苗箱施薬剤等を用いた感染前の早めの予防対策を実施してください。

1 調査方法

令和5年11月に、県内25か所の水田周辺でヒメトビウンカ幼虫(写真1)をサンプリング(100頭程度/1か所)し、ELISA法(図1)により保毒虫を判定し、イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率を算出した。



写真1 ヒメトビウンカ幼虫
(体長 2mm)

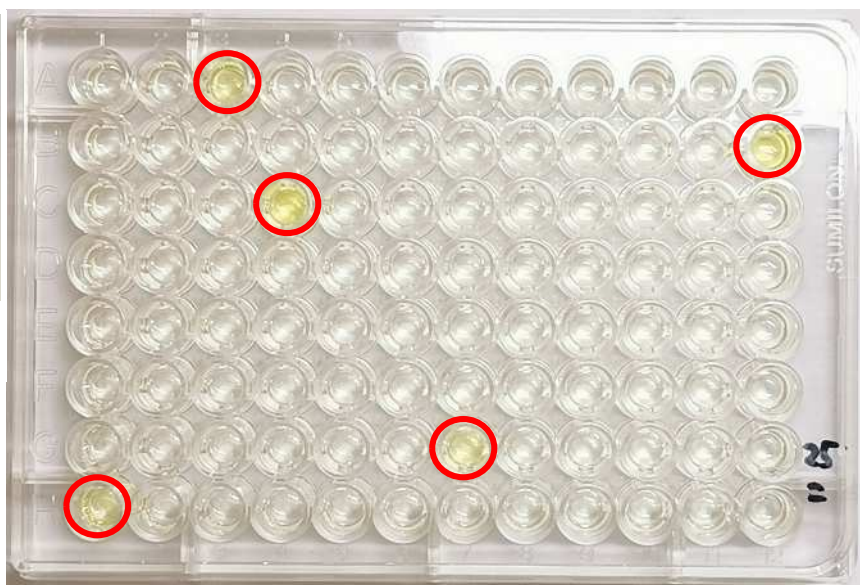


図1 ELISA法による保毒虫判定
ウイルス有り：黄色(○内)、ウイルス無し：無色

2 調査結果の概要

縞葉枯病抵抗性品種の作付比率が縞葉枯病感受性品種の作付比率を上回った令和元年度以降、ヒメトビウンカ幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は減少傾向にあり、令和5年度は平均で2.4%と過去10年で最も低くなった(図2)。

昨年度は縞葉枯病感受性品種であるコシヒカリの早期栽培地域の保毒虫率が低い傾向だったが、令和5年度はコシヒカリ早期栽培地域を主体に5月中旬までの移植主体の地域で保毒虫率が若干高い傾向が見られた。ただし、5月下旬以降の移植地域でもキヌヒカリ等の縞葉枯病感受性品種作付ほ場の周辺では保毒虫率が高いこともあり、作期による統計的な有意差はなかった(表1)。

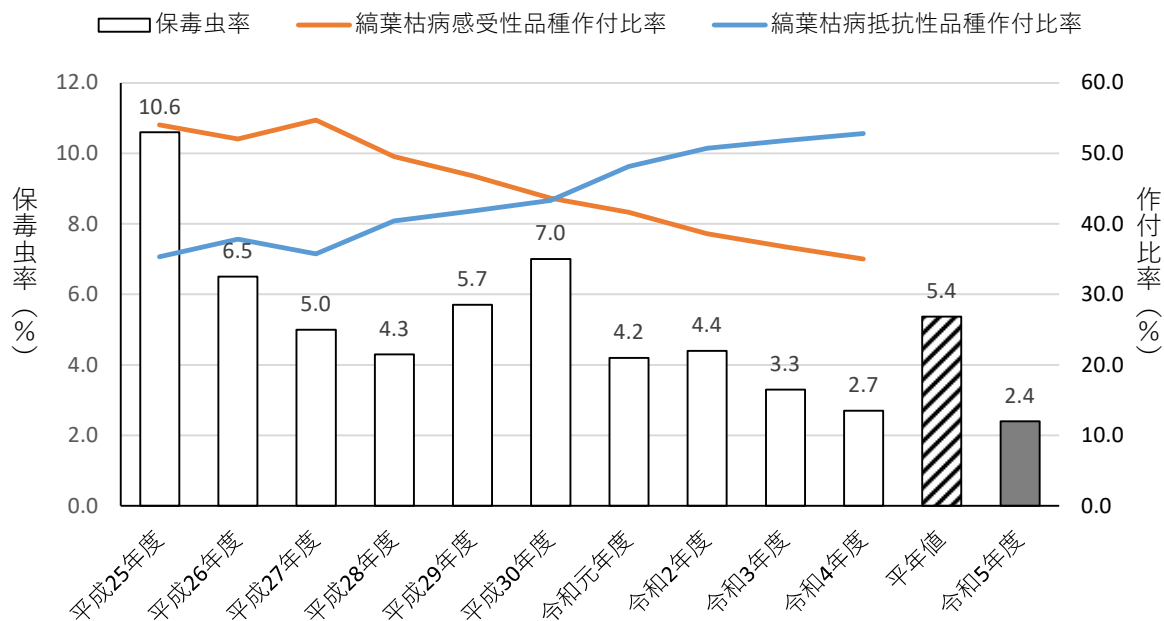


図2 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率の推移

表1 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率(令和5年度)

5月中旬までの移植地域		5月下旬以降の移植地域	
採集地点	保毒虫率(%)	採集地点	保毒虫率(%)
さいたま市桜区昭和	3.1	坂戸市紺屋	1.0
鴻巣市屈巢	1.0	小川町上横田	5.2
富士見市南畑	2.1	川島町上八ツ林	1.0
川越市古谷本郷	5.2	吉見町久保田	3.1
熊谷市中曽根	2.1	嵐山町吉田	3.1
加須市大越	1.0	秩父市小柱	0.0
加須市柏戸	3.1	本庄市児玉町吉田林	0.0
春日部市八丁目	4.2	美里町阿那志	4.2
幸手市神扇	4.2	上里町長浜	2.1
白岡市野牛	1.0	熊谷市中恩田	1.0
		熊谷市御正新田	8.3
		行田市前谷	1.0
		行田市下池守	0.0
		加須市下谷	1.0
		久喜市菖蒲町台	2.1
地域平均(10地点)	2.7	地域平均(15地点)	2.2
採集地点数	25	平均保毒虫率(%)	2.4

NS

(ス) 農業技術研究センター 県予察ほ場（玉井試験場）調査結果（6～9月）

a ほ場内見取り調査(%)

(a) 5月中旬移植「コシヒカリ」

調査月		6月			7月			8月			9月		
		2023年	2022年	平年	2023年	2022年	平年	2023年	2022年	平年	2023年	2022年	平年
葉いもち	発病株率%	0.3	0.0	0.0	2.0	1.0	3.3	0.7	0.7	0.1	-	-	-
穂いもち	発病株率%	-	-	-	-	-	-	2.0	0.0	1.7	0.7	14.4	-
紋枯病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	0.7	0.0	0.2	4.7	0.7	4.9	6.7	15.7	23.7
ばか苗病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
縞葉枯病	発病株率%	0.0	1.7	1.5	20.0	7.0	24.2	4.7	22.3	57.6	4.7	22.3	59.8
コマメチュウ (第1世代幼虫)	食害株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
イモジセリ	食害株率%	0.3	0.7	2.2	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	-	-	-
イネアオムシ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	-	-	-
コブノメイガ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	-	-	-
イネヒメコグサバエ	食害株率%	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネミズゾウムシ	食害株率%	0.7	0.0	1.3	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
イネトヨイシ	食害株率%	0.0	0.0	0.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

(b) 5月中旬移植「彩のかがやき」

調査月		6月			7月			8月			9月		
		2023年	2022年	平年	2023年	2022年	平年	2023年	2022年	平年	2023年	2022年	平年
葉いもち	発病株率%	0.0	0.0	0.0	2.0	1.3	1.1	0.0	0.3	0.3	-	-	-
穂いもち	発病株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	1.3	18.8	12.3
紋枯病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	6.7	9.0	11.1	10.0	23.3	25.8	29.3	75.3	38.3
ばか苗病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
縞葉枯病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	0.3	0.0	0.0	0.4
コマメチュウ (第1世代幼虫)	食害株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
イモジセリ	食害株率%	2.7	0.3	3.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
イネアオムシ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.1	-	-	-
コブノメイガ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2
イネヒメコグサバエ	食害株率%	1.3	1.7	0.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネミズゾウムシ	食害株率%	1.0	0.0	2.3	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
イネトヨイシ	食害株率%	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クサキリ類	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

(c) 6月下旬移植「キヌヒカリ」

調査月		6月			7月			8月			9月		
		2023年	2022年	平年	2023年	2022年	平年	2023年	2022年	平年	2023年	2022年	平年
葉いもち	発病株率%	-	-	-	2.7	0.0	4.4	0.0	3.7	7.6	-	-	-
穂いもち	発病株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	0.7	47.8	27.1
紋枯病	発病株率%	-	-	-	0.0	0.0	0.0	6.0	0.3	1.7	6.0	34.7	31.5
ばか苗病	発病株率%	-	-	-	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
縞葉枯病	発病株率%	-	-	-	0.0	2.3	1.8	5.3	7.3	22.0	5.3	20.3	27.5
コマメチュウ (第1世代幼虫)	食害株率%	-	-	-	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
イモジセリ	食害株率%	-	-	-	0.0	0.3	0.4	0.7	29.3	7.6	0.0	0.0	0.1
イネアオムシ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.2	-	-	-
コブノメイガ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	1.8
イネヒメコグサバエ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネミズゾウムシ	食害株率%	-	-	-	0.0	0.0	4.9	-	-	-	-	-	-
イネトヨイシ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クサキリ類	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

ｂ すくい取り調査(20回振)でのウンカ・ヨコバイ類等の捕獲数

(a) 5月中旬移植「コシヒカリ」

調査月	6月				7月				8月				9月			
	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)
ヒメトビウンカ	4.3	10.7	15.0	33.0	13.0	8.7	21.7	71.7	211.0	44.5	255.5	484.5	50.7	146.7	197.4	418.4
ツマグロヨコバイ	3.3	8.7	12.0	3.6	12.7	0.3	13.0	10.6	53.0	49.0	102.0	169.2	590.0	1,024.0	1,614.0	628.8
セジロウンカ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.6	0.5	0.5	1.0	5.1	0.0	0.0	0.0	10.6
トビイロウンカ	0.0	0.0	0.0	0.0			0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
アカヒゲオシトリカサマ			11.7	4.6			0.0	0.2			5.5	0.6			0.0	0.0

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

(b) 5月中旬移植「彩のかがやき」

調査月	6月				7月				8月				9月			
	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)
ヒメトビウンカ	2.3	35.7	38.0	44.0	8.7	26.0	34.7	73.4	53.0	25.5	78.5	470.4	106.7	81.3	188.0	451.4
ツマグロヨコバイ	3.0	10.0	13.0	2.6	7.7	0.3	8.0	3.3	14.0	0.5	71.3	18.5	514.7	996.0	1,510.7	323.9
セジロウンカ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.3	1.2	1.5	1.0	2.5	5.3	0.0	0.0	0.0	13.3
トビイロウンカ	0.0	0.0	0.0	0.0			0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1
アカヒゲオシトリカサマ			15.7	5.1			0.0	0.2			0.5	0.5			0.0	0.2

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

(c) 6月下旬移植「キヌヒカリ」

調査月	6月				7月				8月				9月			
	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)
ヒメトビウンカ	-	-	-	-	12.0	150.7	162.7	37.4	26.5	9.5	36.0	332.0	96.0	70.0	166.0	542.0
ツマグロヨコバイ	-	-	-	-	18.0	4.3	22.3	6.1	52.5	49.0	101.5	83.0	1,100.0	4,418.0	3,210.7	2,608.0
セジロウンカ	-	-	-	-	0.3	0.0	0.3	0.5	3.0	0.5	3.5	19.5	0.0	0.0	0.0	76.6
トビイロウンカ	-	-	-	-			0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3
アカヒゲオシトリカサマ	-	-	-	-			17.7	3.8			0.5	0.9			0.0	0.3

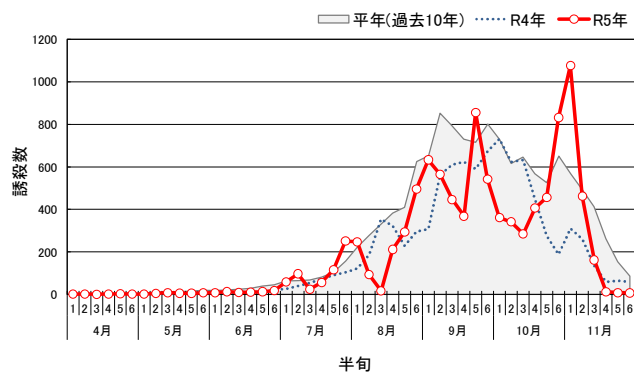
-は未調査

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

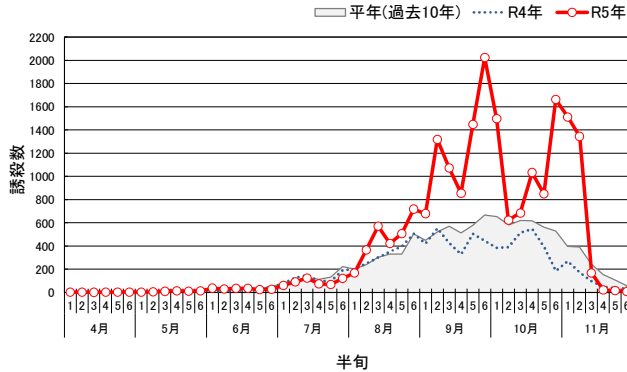
イ 野菜等

(ア) ハスモンヨトウのフェロモントラップ調査 (4～11月)

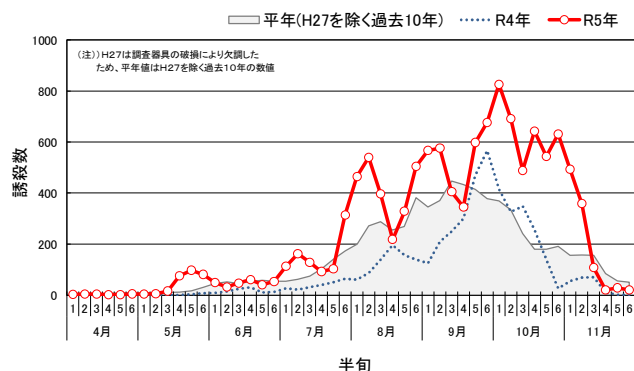
対象作物:大豆(7月以降) 調査地点:熊谷市樋春



対象作物:ブロッコリー 調査地点:深谷市山河

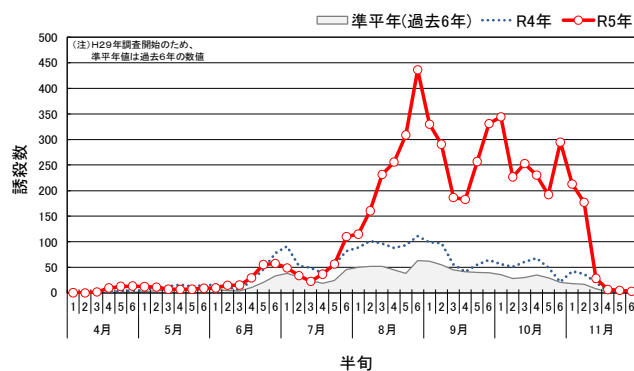


対象作物:いちご、ハウス花き 調査地点:久喜市菖蒲町小林

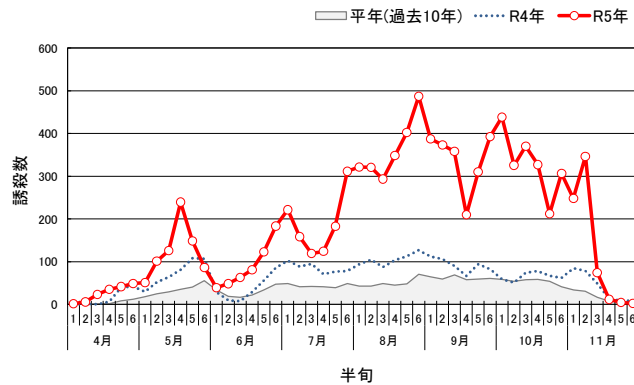


(イ) オオタバコガのフェロモントラップ調査 (4～11月)

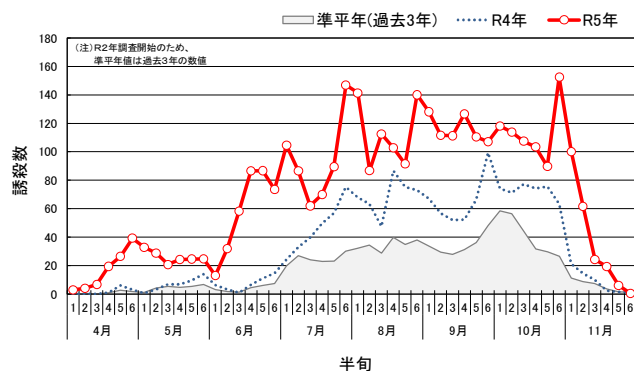
対象作物:露地なす 調査地点:本庄市児玉町小平



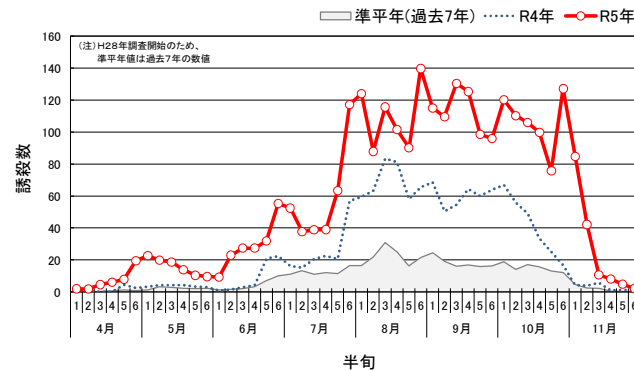
対象作物:露地野菜 調査地点:深谷市山河



対象作物:露地なす 調査地点:越谷市中島

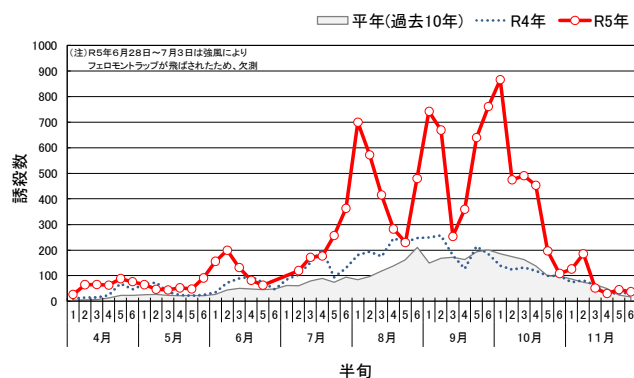


対象作物:露地なす 調査地点:杉戸町大塚

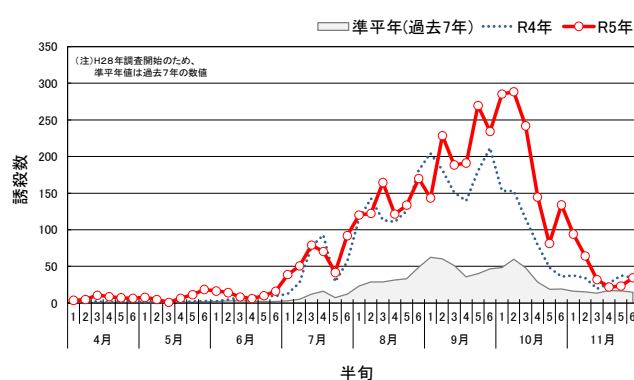


(ウ) シロイチモジヨトウのフェロモントラップ調査 (4～11 月)

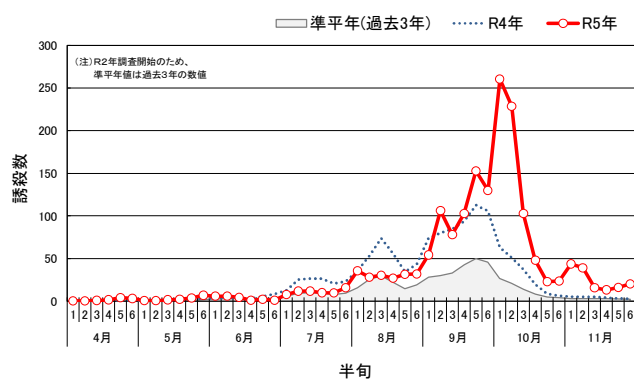
対象作物:ねぎ 調査地点:深谷市新成



対象作物:ねぎ 調査地点:越谷市中島



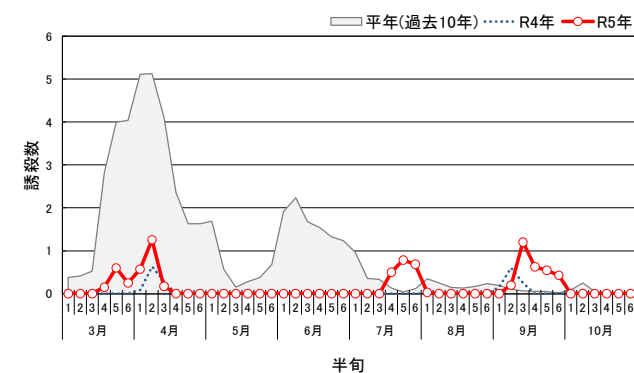
対象作物:ねぎ 調査地点:杉戸町大塚



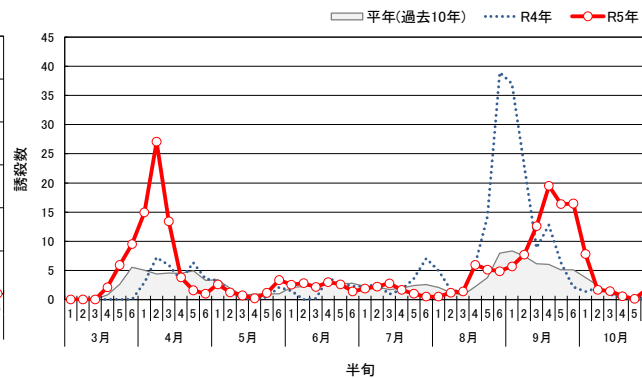
ウ 果樹

(ア) ナシヒメシンクイのフェロモントラップ調査 (3～10 月)

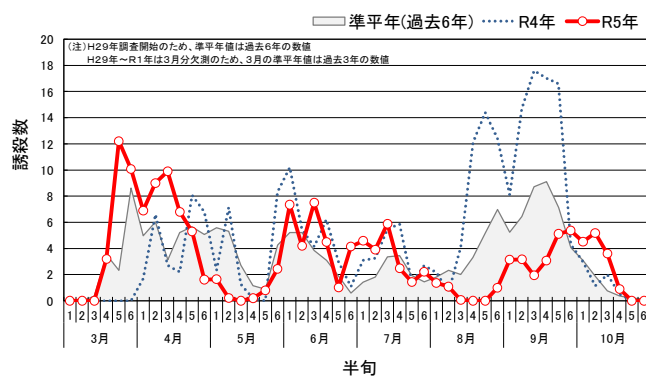
対象作物:なし 調査地点:鴻巣市常光



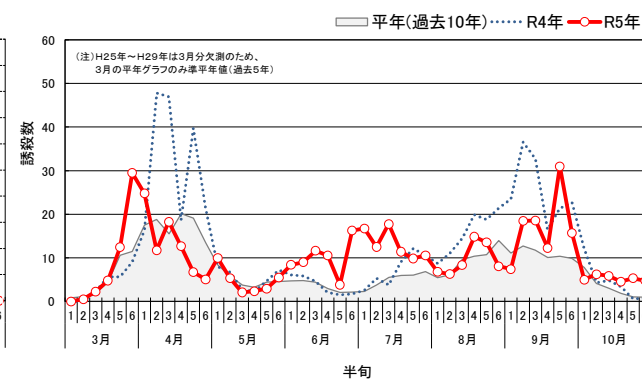
対象作物:なし 調査地点:上里町長浜



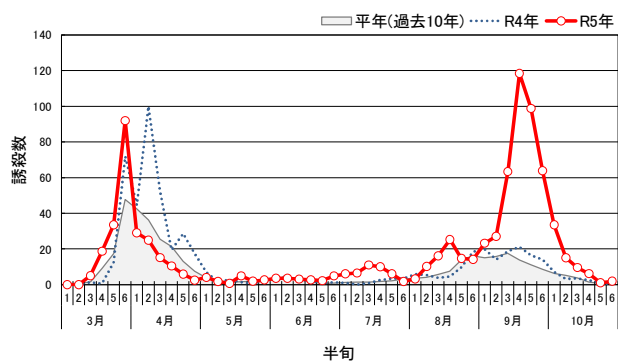
対象作物:なし 調査地点:久喜試験場



対象作物:なし 調査地点:春日部市内牧



対象作物:なし 調査地点:加須市鴻基

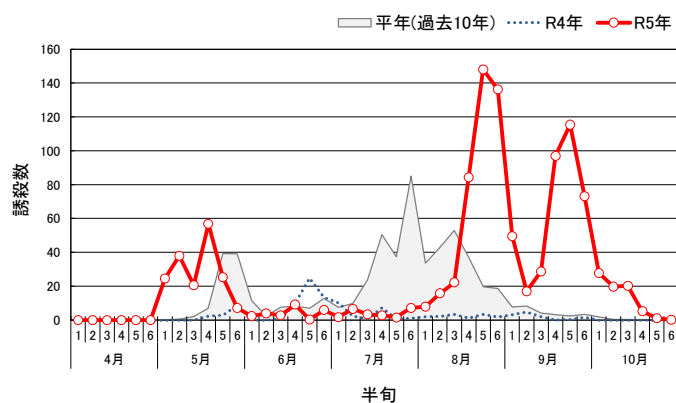


(イ) 果樹カメムシの予察灯調査 (4～10月)

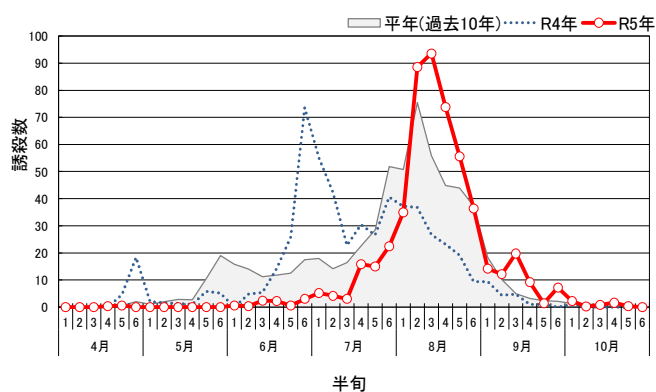
主要な果樹カメムシ (4種※合計)

※チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシ、アオクサカメムシ

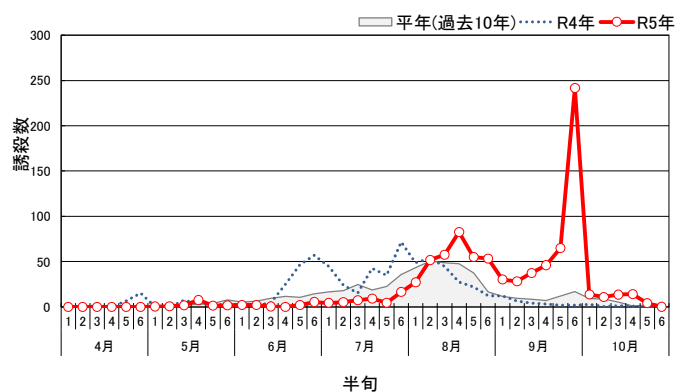
対象作物:なし 調査地点:上里町長浜



対象作物:なし 調査地点:春日部市内牧



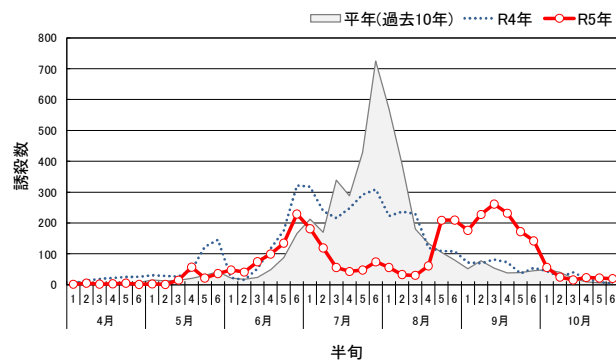
対象作物:なし 調査地点:久喜試験場



(ウ) 果樹カメムシのフェロモントラップ調査 (4～10月)

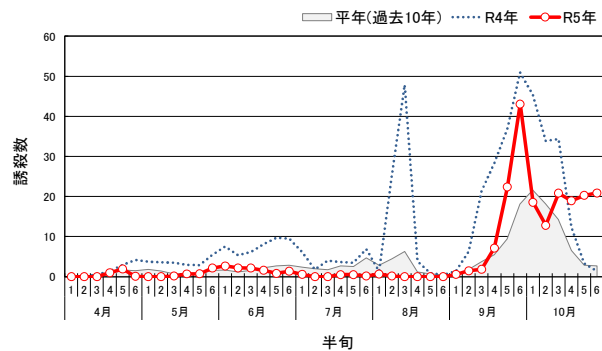
a チャバネアオカメムシ

対象作物:ヒノキ 調査地点:寄居町鉢形



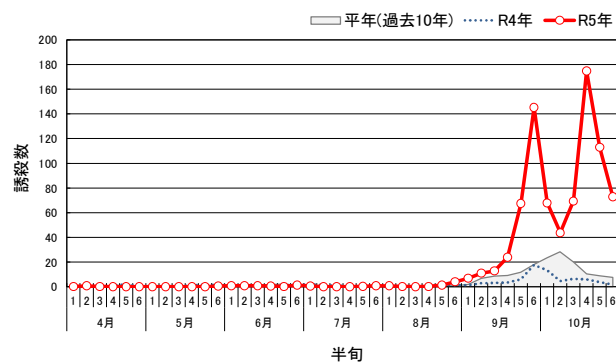
b クサギカメムシ

対象作物:ヒノキ 調査地点:寄居町鉢形



c ツヤアオカメムシ

対象作物:ヒノキ 調査地点:寄居町鉢形



病虫害発生予察情報

果樹カメムシ類の越冬密度調査結果について

令和6年3月15日
埼玉県病虫害防除所

ナシ、モモ、カンキツなどの果樹を加害する果樹カメムシ類の発生量の予測を目的として、チャバネアオカメムシなどの越冬密度調査を行いました。

調査の結果、チャバネアオカメムシ（越冬成虫）の捕獲数は平成26年以降の11年間で最も多く、確認地点率は2番目に高いことが明らかとなりました。

果樹カメムシ類は、地域によって越冬密度が異なり、スギ・ヒノキが近くにある山間部等に多く飛来することがあります。

また、気象条件によっては発生時期が早まることがあるため、今後、病虫害防除所が発表する情報（予察灯、フェロモントラップでの誘殺数）を参照し、果樹園等への初期飛来に注意して適切に防除してください。

1 調査時期

令和6年1月31日～2月15日

2 調査地点

8地点（表参照）

3 調査方法

- (1) 雑木林の南斜面から、1地点につき3か所（各1㎡）の落葉を採取。
- (2) 採取した落葉をビニル袋に詰めて口を閉じた状態で温室内（25℃加温）に2週間以上静置し体色が緑化したチャバネアオカメムシ等の成虫数を調査。

4 結果

1地点あたりの平均越冬虫数は4.75頭で、過去10年の平均虫数0.74頭に比べ、6.4倍に達し、平成26年以降最多となっています。

確認地点率は75%で、平年地点率38%に比べ高く、平成26年以降2番目に高い結果になりました。（表、図1）

表 果樹カメムシ類の越冬成虫数

単位:頭

採取地点	チャバネ アオカメムシ	その他のカメムシ
東松山市松山	1	
北本市荒井	0	
寄居町鉢形	9	
神川町新里	0	
加須市上種足	3	イネカメムシ2、ツヤアオカメムシ1
蓮田市高虫	5	
春日部市内牧	18	
久喜市清久	2	イネカメムシ8、イチモンジカメムシ2
計	38	—

平均越冬成虫数
(1地点あたり) 4.75 (過去10年の平均虫数 0.74)

確認地点率 75% (過去10年の平均地点率 38%)

注) イネカメムシは果樹を加害しませんが、近年、水稻での被害が増加しているため参考として掲載しています。
また、イチモンジカメムシはダイズなどマメ科作物の害虫です。

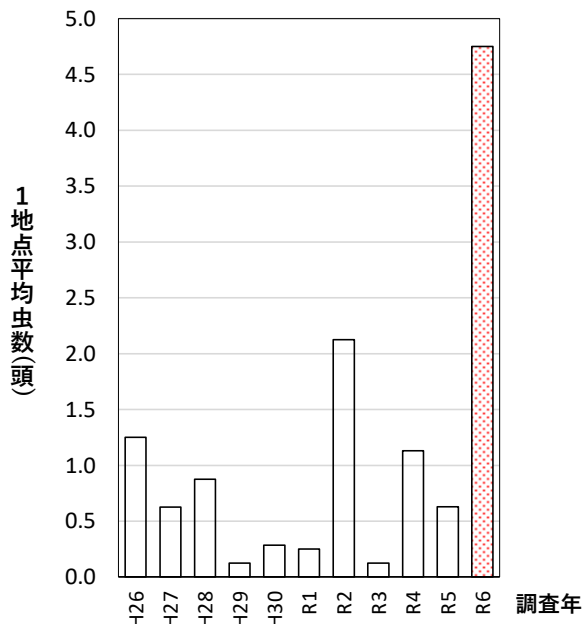


図1 チャバネアオカメムシの越冬成虫調査結果

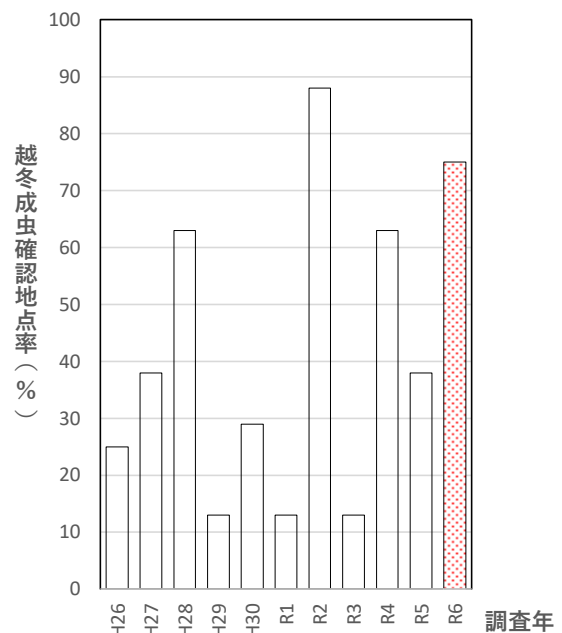


図2 越冬成虫確認地点率

○生態と被害

・チャバネアオカメムシ

体長 10～12mm で光沢のある緑色で、前翅は紫がかった茶色をしています(図3)。広食性で、4月から夏にかけてはクワ、サクラ、ヒイラギ、キリなどに、夏以降はヒノキ、スギ、キリなどに寄生します。ナシ、モモ、ウメ等多くの果樹を加害しますが、幼虫はスギやヒノキの球果を餌として発育するため、本種は果樹園では増殖しません。



図3 チャバネアオカメムシの成虫
(体長10～12ミリメートル)

・被害(果樹カメムシ類共通)

果樹園に飛来し、果実を吸汁します。加害を受けると、吸汁部がくぼんで奇形果になります。収穫直前の被害では、くぼみの程度は軽くなりますが、吸汁部周辺の果肉は白くスポンジ状となり、商品価値が損なわれます(図4)。



図4 被害を受けたナシの果実

○来年度以降注意する点

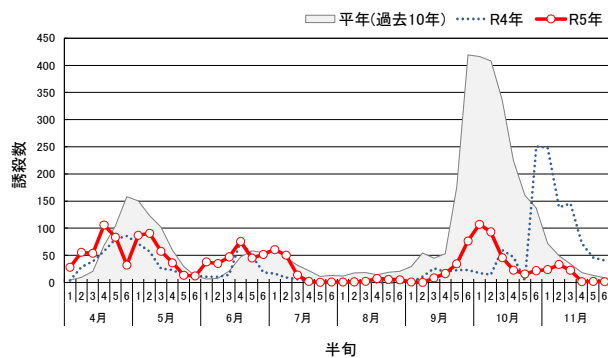
埼玉県において越冬世代成虫が直接加害する可能性がある樹種はウメ、モモ、スモモ等が考えられます。周辺地域のヒノキやスギなどの球果の量、気象条件、地域により果樹園に飛来する量は異なりますが、県全域的に越冬成虫数が多いため多発する懸念があります。

また、ナシでは越冬世代成虫が直接加害することはほとんどありませんが、越冬世代が多いとそれに伴い、ナシを加害する第1世代以降の個体数も増加する傾向があります。病害虫防除所が4月中旬以降に公表する予察灯、フェロモントラップ等の調査データを確認し、適期防除を行いましょう。

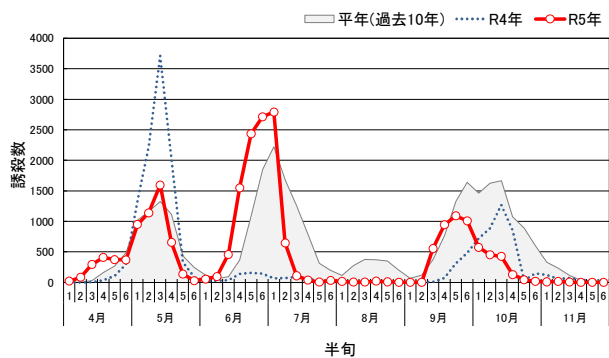
エ 茶

(ア) チャハマキのフェロモントラップ調査 (4～11月)

対象作物: 茶 調査地点: 所沢市下富

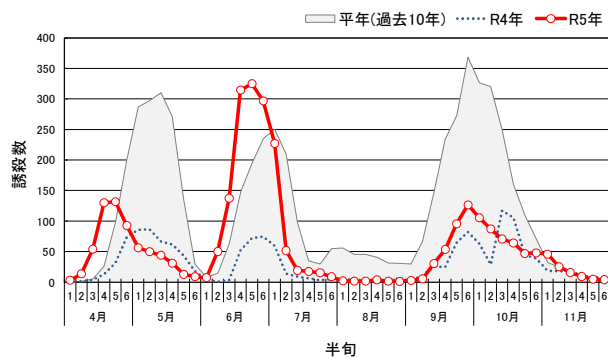


対象作物: 茶 調査地点: 入間市根岸

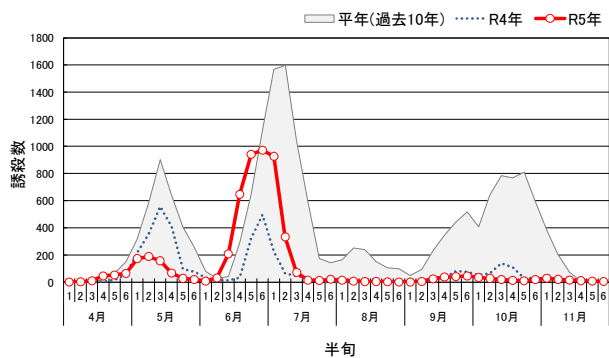


(イ) チャノコカクモンハマキのフェロモントラップ調査 (4～11月)

対象作物: 茶 調査地点: 所沢市下富

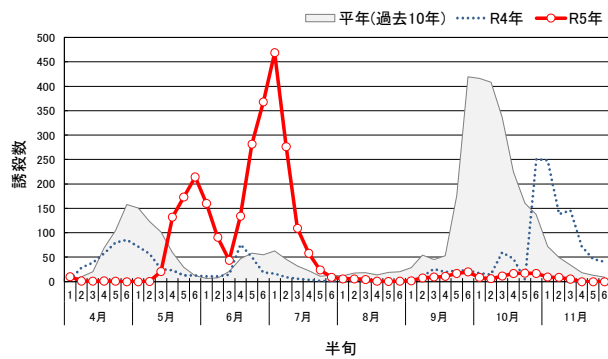


対象作物: 茶 調査地点: 入間市根岸

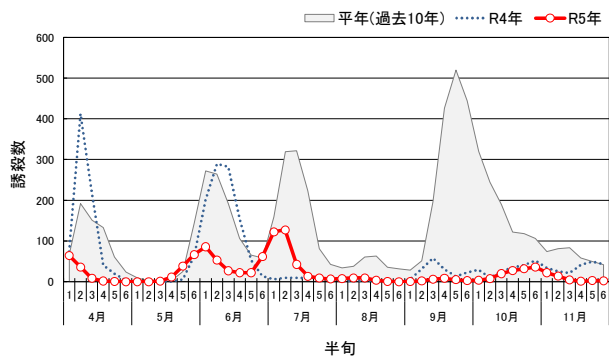


(ウ) チャノホソガのフェロモントラップ調査 (4～11月)

対象作物: 茶 調査地点: 所沢市下富

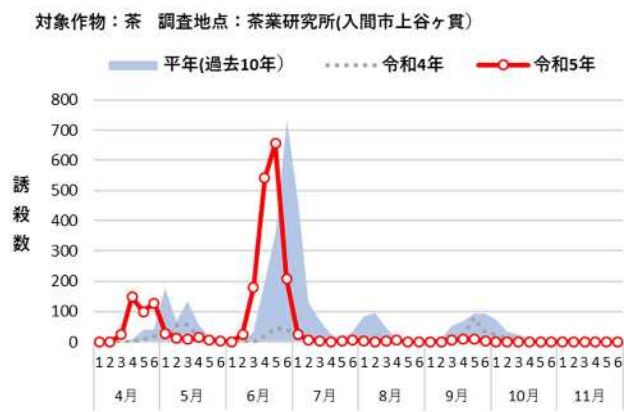


対象作物: 茶 調査地点: 入間市根岸

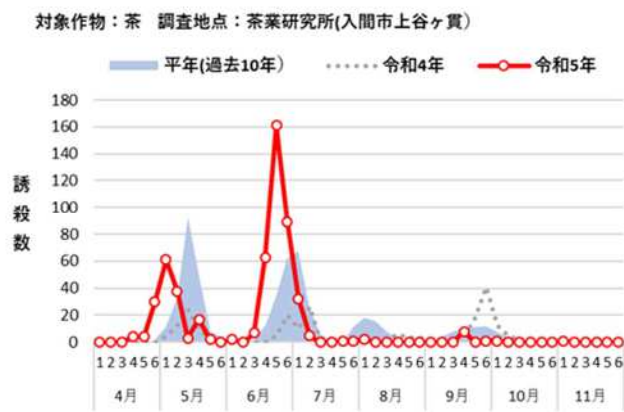


(エ) 茶業研究所 県予察ほ場調査結果 (4～3月)

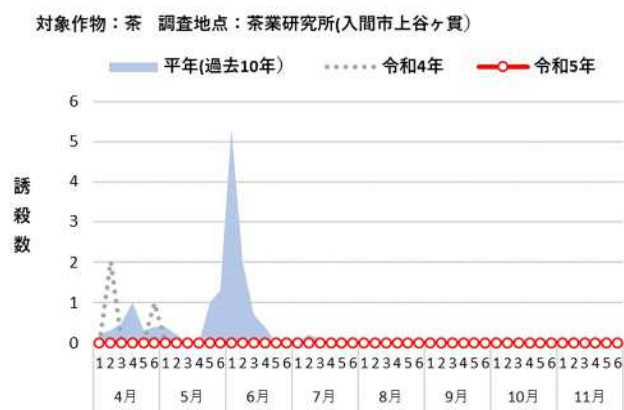
a 予察灯へのチャハマキの誘殺数



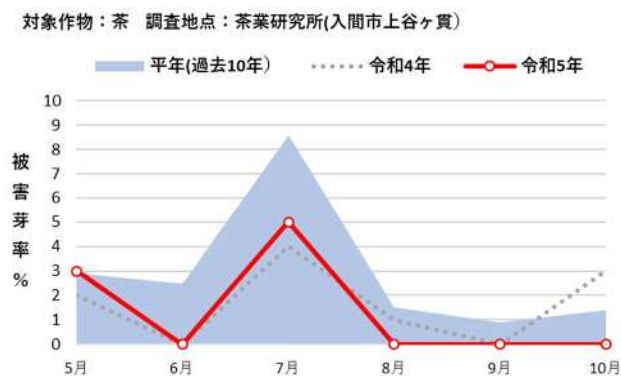
b 予察灯へのチャノコカクモンハマキの誘殺数



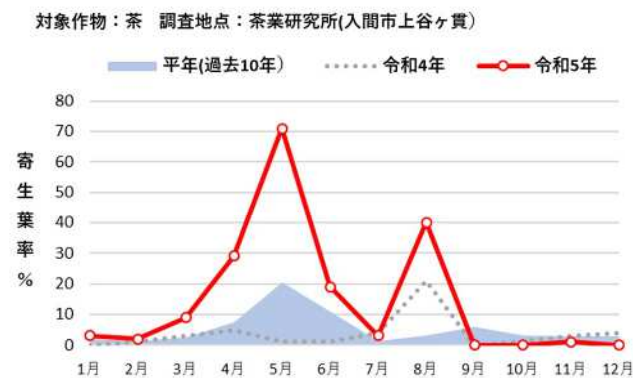
c 予察灯へのチャノホソガの誘殺数



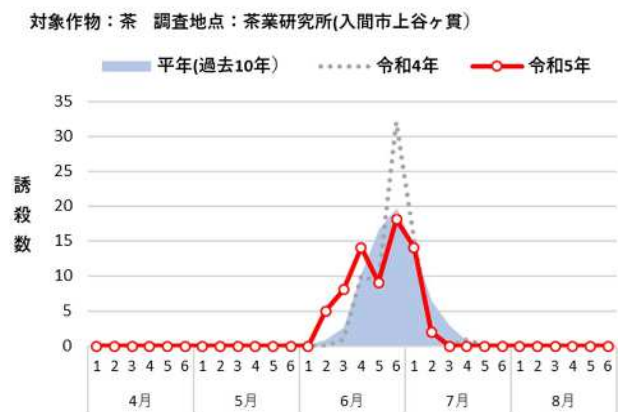
d ツマグロアオカスミカメ被害芽率



e カンザワハダニの発生推移



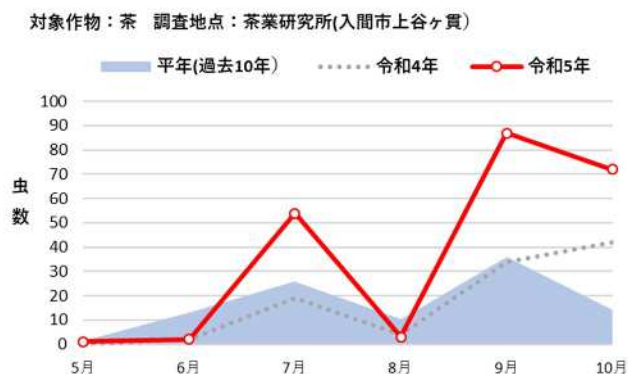
f 予察灯へのナガチャコガネ成虫の発生推移



g チャノキイロアザミウマの発生推移



h チャノミドリヒメヨコバイの発生推移



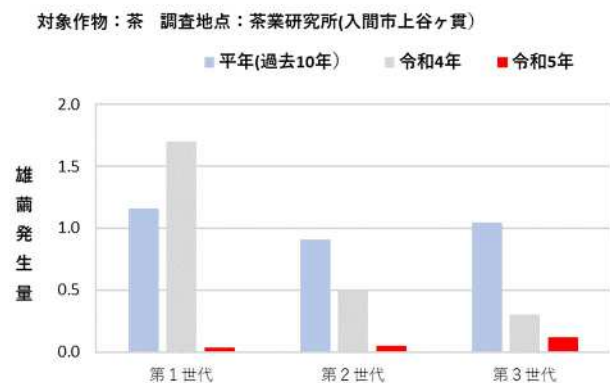
i 炭疽病の発生推移



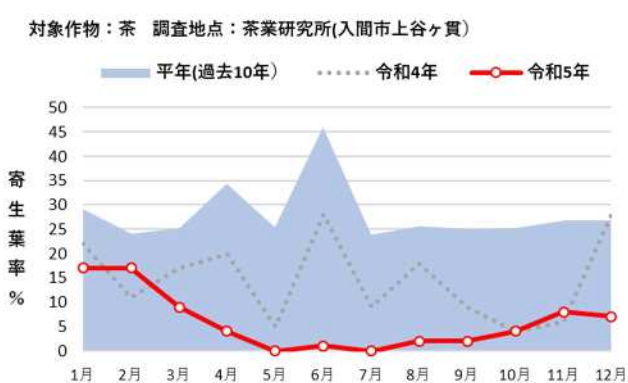
j 輪斑病の発生推移



k クワシロカイガラムシの発生推移
(30株あたりの平均)



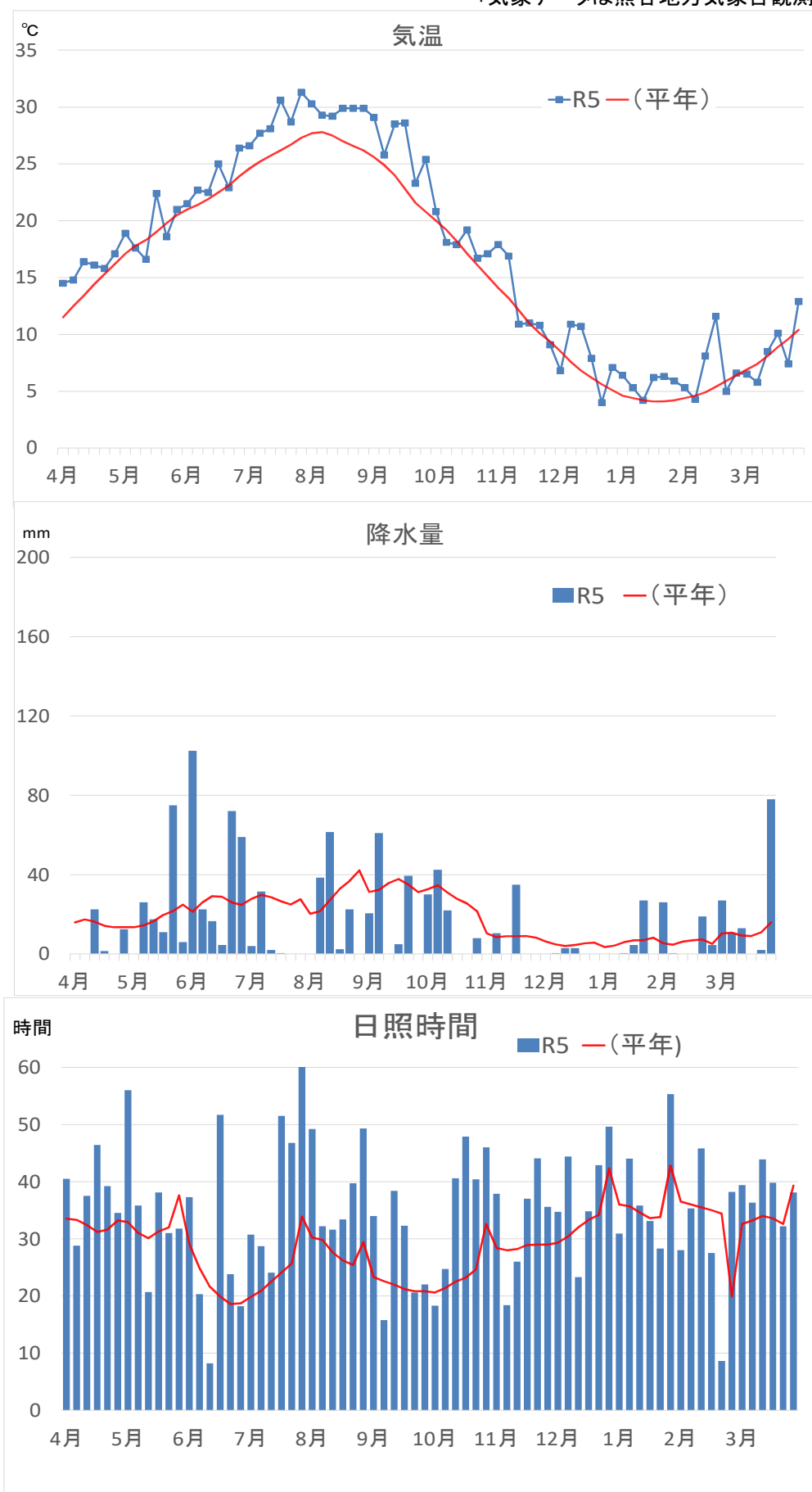
l チャトゲコナジラミの発生推移



(3) その他

ア 令和5年度熊谷の気象データ

*気象データは熊谷地方気象台観測値を使用



イ 無人ヘリコプターによる防除実績

年次別防除実績の推移（平成 24 年までは【その他：肥料、除草剤など】を除く）

（資料提供：一般社団法人埼玉県植物防疫協会）

（単位：ha）

	年度	平成 20 年	21 年	22 年	23 年	24 年	25 年	26 年	27 年
麦	市町村数	17	19	16	17	17	17	16	17
	実施面積	2064.5	2620.6	2574.1	2472.0	2511.1	2722.2	2825.5	2821.0
水 稲	市町村数	9	11	11	10	8	10	15	13
	実施面積	1714.2	2133.9	2409.3	2372.1	2513.6	3317.0	3030.3	3549.1
大 豆	市町村数	14	13	10	7	5	6	3	6
	実施面積	407.0	395.0	304.9	272.9	250.0	251.5	201.5	270.0
その他	市町村数	—	—	—	—	—	3	8	10
	実施面積	—	—	—	—	—	20.6	163.1	117.3
計	市町村数	40	43	37	34	30	36	41	46
	実施面積	4185.7	5149.5	5288.3	5117.0	5274.7	6311.3	6220.4	6754.4

（単位：ha）

	年度	28 年	29 年	30 年	令和元年	2 年	3 年	4 年	5 年
麦	市町村数	19	17	14	17	17	14	15	15
	実施面積	3174.3	2977.8	3194.6	3057.8	3275.2	3062.8	2976.8	3203.1
水 稲	市町村数	14	13	16	20	13	17	15	15
	実施面積	3541.4	3561.8	3913.5	3826.7	3958.8	3721.8	3588.2	3555.7
大 豆	市町村数	7	5	7	6	4	5	4	3
	実施面積	284.3	243.7	264.2	163.4	143.0	204.2	176.0	179.7
その他	市町村数	8	8	6	10	12	9	6	4
	実施面積	224.3	79.6	223.4	198.7	317.0	120.7	67.7	69.0
計	市町村数	48	43	43	26	23	25	23	23
	実施面積	7224.3	6952.9	7595.7	7246.6	7694.0	7109.5	6808.7	7007.5

＊市町村数の計は平成 19 年～30 年は「のべ市町村数」、令和元年以降は「実市町村数」とする。

ゴルフ場の害虫防除のための散布は、実施面積から除く。

平成 22 年実績として、甘藷 1 地区 1.1ha の実績がある。（別途）

「その他（ジャガイモ、肥料、除草剤、種子）」は、平成 25 年から記載。

ウ 過去の病虫害発生予察警報、注意報、特殊報発表状況

(ア) 警 報

月 日	内 容
昭和 58 年 7 月 13 日	イネ縞葉枯病
昭和 59 年 6 月 22 日	イネ縞葉枯病
平成 5 年 8 月 20 日	イネいもち病 (穂いもち病)

(イ) 注意報及び特殊報

年	月 日	注 意 報	月 日	特 殊 報
昭和 54	5. 29	イネ縞葉枯病、黒すじ萎縮病	7. 20	キュウリ黄化病、キクのサビダニ、 チューリップのサビダニ イチゴ炭そ病
	7. 10	ナシのハダニ類		
	8. 8	ダイズ、野菜のハスモンヨトウ	9. 11	
55	4. 30 8. 1 9. 9	チャのサンカクハマキ イネいもち病 (穂いもち) キュウリ斑点細菌病、べと病、ナス 褐色腐敗病、トマト疫病、ニンジン 黒葉枯病、ネギ黒斑病、さび病、露 地野菜軟腐病		
57	8. 13	イネいもち病 (穂いもち)	3. 4 5. 28 6. 1	イチゴ疫病、クリのヨシノコブガ、 シクラメンホコリダニ イネミズゾウムシ コムギ条斑病
58	5. 23 6. 3	イネミズゾウムシ イネ縞葉枯病		
59	2. 16 4. 13 6. 14	ムギダニ ムギアカタマバエ イネ縞葉枯病	7. 2 10. 4 12. 21	ニンジン斑点細菌病、タマネギ萎黄 病、クワイ茎腐病 シュンギクべと病 キュウリホモプシス根腐病
60	3. 19 4. 17 5. 10 8. 26 8. 31	キュウリ、ナス、トマト及びイチゴの 灰色かび病 ムギアカタマバエ イネミズゾウムシ ダイコン及びハクサイウイルス病 セジロウンカ		
61	4. 30 5. 12 7. 21 8. 21	ムギアカタマバエ イネミズゾウムシ セジロウンカ ニカメイチュウ第2世代幼虫	1. 17 3. 28 7. 9	ニンジン菌核病、ダイコンバーティ シリウム黒点病 チャ輪斑病 ミナミキイロアザミウマ
62	5. 7 5. 11 6. 17 8. 11	イネミズゾウムシ 野菜のアブラムシ類及びウイルス病 イネ縞葉枯病 セジロウンカ	3. 11	レタスビッグベイン病
63	5. 10 8. 19	イネミズゾウムシ イネいもち病 (穂いもち)		

年	月 日	注 意 報	月 日	特 殊 報
平成 元	8. 25	イネ白葉枯病	8. 25	イネ白葉枯病
2	5. 8 8. 1	ナシ黒星病 セジロウンカ	5. 8 9. 5	タバココナジラミ ミカンキイロアザミウマ
3	7. 12 8. 7 8. 7	ナシのカメムシ類 ニカメイチュウ第2世代 セジロウンカ	6. 4	カキクダアザミウマ
4	6. 19	ナシ、カンキツ類のカメムシ類	7. 29 12. 8	ヨメナスジハモグリバエ カランコエのさび病(仮称)
5	3. 9 8. 5	チャのカンザワハダニ イネいもち病(葉いもち、穂いもち)	3. 9	マメハモグリバエ
6	6. 17	イネいもち病(葉いもち)	10. 7	トマトサビダニ
7	7. 21	イネいもち病(葉いもち)		
8	8. 6	ナシのカメムシ類	8. 26 9. 19	シロイチモジヨトウ オオタバコガ
9	7. 7 8. 1	ネギ等のシロイチモジヨトウ ナス等のオオタバコガ	6. 23 8. 1	トマト黄化壊疽ウイルス(TSWV) カボチャ台キュウリ立枯病
10	5. 14 6. 11 9. 30	ナシの疫病、黒星病 ナシのカメムシ類 チャのウスミドリメクラガメ		
11	9. 28	ダイズ、野菜のハスモンヨトウ		
12	9. 7	ダイズ、野菜のハスモンヨトウ		
13	6. 11 8. 16	ナシのカメムシ類 イネの斑点米カメムシ類	2. 1	イチジク株枯病
14			1. 23 5. 13 9. 17	トマトハモグリバエ アルファルファタコゾウムシ ルイスハダニ
15	8. 13	イネいもち病(穂いもち)	2. 10	インパチェンスえそ斑紋ウイルス (INSV)
16			6. 10	IYSV(Iris yellow spot virus) によるトルコギキョウ及びユーチャ リスの病害
17	6. 9 8. 4	キュウリ黄化えそ病(MYSV) 水稻のフタオビコヤガ	2. 17 5. 19 9. 16	トマト黄化葉巻病(TYLCV) キュウリ黄化えそ病(MYSV) クワシロカイガラムシ
18	6. 2 6. 27 7. 24 8. 2 11. 2	ナシのカメムシ類 イネいもち病(葉いもち、穂いもち) イネいもち病(葉いもち、穂いもち) フタオビコヤガ(イネアオムシ) トマト黄化葉巻病(TYLCV)	4. 11 10. 10 11. 15 12. 5	タバココナジラミバイオタイプQ フタスジヒメハムシによるダイズ被 害 ユリのイチゴセンチュウ クリバネアザミウマ(ミョウガ)
19	3. 27 7. 26 8. 13 9. 20	チャのカンザワハダニ イネいもち病(葉いもち、穂いもち) フタオビコヤガ(イネアオムシ) ハスモンヨトウ	3. 9 7. 26 8. 30 10. 4 11. 5	クロスジコバネアブラムシ(ミョウ ガ) IYSV(Iris yellow spot virus)によ るネギの病害 カキノヒメヨコバイ(カキ) アワダチソウグンバイ(キク科) プラタナスグンバイ(プラタナス)

年	月 日	注 意 報	月 日	特 殊 報
20	4. 7 5. 1 6. 4 10. 2	チャのカンザワハダニ ナシヒメシンクイ ナシ黒星病 チャハマキ	1. 16 3. 25 10. 30	ツマグロヒョウモン幼虫によるパン ジー等の被害 クロトンアザミウマ（モントレイ トスギ） キュウリ退緑黄化病（CCYV:仮称）
21	5. 1 7. 29	ナシのナシヒメシンクイ イネいもち病（葉いもち、穂いもち）	11. 12	チャのミカントゲコナジラミ
22	6. 11 7. 8 8. 27	ナス、スイートコーンなどのオオタ バコガ フタオビコヤガ（イネアオムシ） 野菜類、花き類及びダイズのハスモ ンヨトウ	2. 9 3. 31 7. 23 12. 21 12. 22	ハウレンソウのハコベハナバエ ブロッコリー菌核病 ウメ輪紋ウイルス（plum pox virus） トルコギキョウ葉巻病 トマトすすかび病
23	7. 20 8. 3	斑点米カメムシ類（アカヒゲホミドリカスミ カメ、アカスジカスミカメ、ホソハラカメムシ、クモハラカメムシ） フタオビコヤガ（イネアオムシ）	7. 26 10. 26 12. 19	クロメンガタスズメによるトマト・ ナス等の被害 チャノキイロアザミウマによるナシ への寄生と被害 ムギ類黒節病
24	6. 5	ナシのカメムシ類（チャバ 初カメムシ、クサ ギカメムシ、ツヤアカメムシ）	12. 6 1. 30	ネギ葉枯病菌による黄色斑紋症状の 発生について スモモ斑入果病について
25	5. 28 5. 31 7. 19 9. 2	チャノコカクモンハマキ ヒメトビウンカ（イネ縞葉枯病） 斑点米カメムシ類（アカヒゲホミドリカスミ カメ、アカスジカスミカメ、ホソハラカメムシ、クモハラカメムシ 他） ヒメトビウンカ（イネ縞葉枯病、イ ネ黒すじ萎縮病） ツバキ、サザンカ、サカキのチャトゲ コナジラミ		
26	4. 1 5. 23 6. 10 6. 30 3. 30	イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ） イネ縞葉枯病 ナシのカメムシ類（チャバ 初カメムシ他） 斑点米カメムシ類 イネ縞葉枯病		
27	7. 9 3. 28	イネいもち病 イネ縞葉枯病	10. 8	ヒサカキワタフキコナジラミによる チャへの被害について
28	7. 27	イネいもち病	6. 28	秋冬ネギ及び春ニンジンに発生した クロバネキノコバエ科の一種 （ <i>Bradysia</i> sp. ）について
29	7. 3	斑点米カメムシ類（特に、アカヒゲ ホソミドリカスミカメ、アカスジカ スミカメ）	7. 25 7. 31	ナス黒点根腐病の発生について クビアカツヤカミキリの発生につい て
30	8. 8 8. 8	野菜類、花き類のオオタバコガ ネギのシロイチモジヨトウ	5. 30 5. 30 6. 7	トビイロシワアリについて オリーブアナアキゾウムシについて トマト黄化病について

年	月 日	注 意 報	月 日	特 殊 報
平成 31 令和 元	4. 23 5. 10 6. 3 7. 8	イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ） 茶、チャハマキ ナシ、果樹カメムシ類 茶、チャハマキ	10. 15	ネギハモグリバエの別系統の発生について
2	7. 28 9. 11	イネいもち病（葉いもち、穂いもち） ネギのシロイチモジヨトウ	7. 27 8. 24 10. 13	ミナミアオカメムシの発生について ツマジロクサヨトウの発生について <i>Singapore shinshana</i> (Matsumura) (和名なし) (ヨコバイ科の一種) の発生について
3	7. 7 8. 31	イネいもち病（葉いもち） ネギ、シロイチモジヨトウ	8. 3 10. 29 10. 29	サツマイモ基腐病の発生について サクセスキクイムシの発生について ヨツモンカメノコハムシの発生について
4	7. 11 7. 27 7. 27 9. 8 9. 22	ネギ、さび病 野菜類、花き類、オオタバコガ ネギ、シロイチモジヨトウ 野菜類、花き類、大豆 オオタバコガ ネギ・ブロッコリー、シロイチモジヨトウ	10. 21	タバコノミハムシの発生について
5	7. 11 7. 31 8. 15 8. 15 9. 25	野菜類・花き類、オオタバコガ イネ、斑点米カメムシ類 野菜類・花き類・ダイズ、オオタバコガ ネギ・ブロッコリー、シロイチモジヨトウ ネギ・ブロッコリー・ダイズ、シロイチモジヨトウ		

7 肥料検査の概要

(1) 検 査

ア 月別立入検査成績

令和 年.月	立入 事業 場数	収 去 件 数					備 考 (立入事業場の所在地)
		生産事業場			販 売 事業場	計	
		知事 登録	指定 配合	特殊 肥料			
5. 10	1	1				1	熊谷市
5. 11	5	2		5		7	日高市、狭山市、寄居町、さいたま市、深谷市
5. 12	3	3		1		4	横瀬町（２）、川越市
計	9	6		6		12	

イ 普通肥料の検査

(ア)検査標品点数及び対象数量

	生産事業場		販売 事業場	備 考
	知事登録肥料	指定混合肥料		
検査標品点数	6	0	0	
不合格点数	0	0	0	
検査対象数量(t)	13	0	0	
保証票検査等に 係る違反点数	0	0	0	

(イ) 分析検査成績

a 種類別検査成績

肥 料 の 種 類	検査標品点数	不合格点数	不合格率(%)
なたね油かす及びその粉末	1	0	0
混合有機質肥料	1	0	0
乾燥菌体肥料	1	0	0
消石灰	3	0	0
計	6	0	0

b 成分別検査成績

検 査 成 分	検査標品点数	不合格点数	不合格率(%)
窒素全量	3	0	0
りん酸全量	1	0	0
加里全量	3	0	0
アルカリ分	3	0	0
カドミウム	2	0	0
ひ素	1	0	0
計	13	0	0

(ウ) 重量検査

肥 料 の 種 類	検査点数（銘柄数）	不合格点数	不合格率（%）
消石灰	30（3）	0	0
計	30（3）	0	0

ウ 特殊肥料の検査

(ア) 検査標品点数及び対象数量

	生産事業場	備 考
検査標品点数	6	
不合格点数	0	
検査対象数量(t)	105	

(イ) 分析検査成績

a 種類別検査成績

指 定 名	検査標品点数	不合格点数
堆肥	6	0
計	6	0

b 成分分析調査成績

分析成分	分析成分点数	不合格点数
水分	6	0
窒素全量	6	0
りん酸全量	6	0
加里全量	6	0
石灰全量	6	0
亜鉛全量	6	0
銅全量	6	0
炭素窒素比	6	0
計	48	0

(ウ) 重量検査

肥 料 の 種 類	検査点数（銘柄数）	不合格点数	不合格率（％）
堆肥	10 (1)	0	0
計	10 (1)	0	0

エ 検査結果の公表（県報掲載状況）

公表年月日	検査点数（銘柄数）			不合格点数			保証票 検査等 に係る 違反数
	普 通 肥 料	指 定 混 合	特 殊 肥 料	普通 肥料	指定 混合	特殊 肥料	
R6. 3 . 19	3	0	0	0	0	0	0
R6. 3 . 29	3	0	0	0	0	0	0
(R6. 5 . 17)	0	0	6	0	0	0	0
計	6	0	6	0	0	0	0

オ 肥料取締法違反の処分状況

(ア) 告発 該当なし

(イ) 注意等行政指導

- a 当センター検査に係るもの 該当なし
- b 他の検査機関から依頼されたもの 該当なし
- c 他の検査機関へ依頼したもの 該当なし

(2) 登録及び届出

今年度の知事登録普通肥料の申請及び届出件数は 32 件（前年度比－14）であった。新規登録件数は 0 件（前年度比－2）であり、肥料登録有効期間延長（更新）申請が 12 件（前年度比－1）であった。書替申請 1 件（前年度比－3）であり、再交付申請 0 件（前年度比±0）、変更等届出が 18 件（前年度比－1）、登録失効届出は 1 件（前年度比－7）であった。

指定混合肥料の各届出は 4 件（前年度比±0）であった。

特殊肥料関係の各届出は計 62 件（前年度比＋22）であった。

肥料販売関係の届出は、216 件（新規 37・変更 158・廃止 17・その他 4）であった。

令和 6 年 3 月末現在、生産業者数は知事登録普通肥料 32 業者・指定混合肥料 11 業者・特殊肥料 365 業者であり、のべ合計 408 業者となっている。また、肥料の有効銘柄数は、知事登録普通肥料 73 銘柄・指定混合肥料 24 銘柄・特殊肥料 478 銘柄、合計 575 銘柄となっている。

ア 肥料の種類別新規登録件数

肥 料 の 種 類	件 数
新規登録なし	0
計	0

イ 肥料の種類別登録更新件数

肥 料 の 種 類	件 数
副産石灰肥料	1
乾燥菌体肥料	4
混合有機質肥料	5
配合肥料	2
計	12

ウ 肥料の種類別失効件数

肥 料 の 種 類	件 数
米ぬか油かす及びその粉末	1
計	1

エ 指定混合肥料の新規届出件数

肥 料 の 種 類	件 数
土壌改良資材入り指定混合肥料	1
計	1

オ 特殊肥料の種類別新規届出件数

肥 料 の 種 類	件 数
堆肥	10
牛ふん	(2)
家きんふん	(1)
馬ふん	(1)
生ごみ	(1)
樹皮	(1)
草木質系	(1)
その他	(3)
草木灰	2
粗砕石灰石	1
計	13

カ 知事登録普通肥料の種類別有効登録件数
(令和6年3月31日現在)

肥 料 の 種 類	有 効 登録数	備 考	
		R 4 年度	R 3 年度
魚かす粉末	8	8	8
魚節煮かす	2	2	2
肉かす粉末	1	1	1
肉骨粉	0	0	0
蒸製骨粉	0	0	0
なたね油かす及びその粉末	3	3	2
ごま油かす及びその粉末	0	0	0
米ぬか油かす及びその粉末	2	3	3
ひまし油かす及びその粉末	1	1	1
豆腐かす乾燥肥料	1	1	1
加工家きんふん肥料	3	3	3
副産植物質肥料	2	2	2
乾燥菌体肥料	12	12	11
副産動物質肥料	3	3	5
混合有機質肥料	12	12	14
食品残さ加工肥料	1	1	1
化成肥料	0	0	0
配合肥料	2	2	2
生石灰	3	3	4
消石灰	13	13	15
炭酸カルシウム肥料	3	3	4
副産石灰肥料	1	1	1
計	73	74	80

キ 指定混合肥料の種類別有効届出数
(令和6年3月31日現在)

肥 料 の 種 類	届出数
指定配合肥料	22
指定化成肥料	0
特殊肥料入り指定混合肥料	0
土壌改良資材入り指定混合肥料	2
計	24

ク 特殊肥料の指定名別有効届出数
(令和6年3月31日現在)

指 定 名	届 出 数
粗砕石灰石	1
米ぬか	5
くず大豆及びその粉末	1
草木灰	5
骨炭粉末	1
動物の排せつ物	15
牛ふん	(1)
豚ふん	(1)
家きんふん	(13)
動物の排せつ物の燃焼灰	3
家きんふん	(3)
堆肥	426
牛ふん	(121)
豚ふん	(47)
家きんふん	(47)
馬ふん	(5)
生ごみ	(47)
樹皮	(4)
草木質系(樹皮以外)	(67)
その他	(88)
発泡消火剤製造かす	3
貝殻肥料	5
貝化石粉末	1
カルシウム肥料	7
混合特殊肥料	5
計	478

ケ 各種申請・届出の処理状況

申 請 ・ 届 出 の 種 類	件 数	備 考
肥料登録申請	0	アのとおり
肥料登録有効期間更新申請	12	イのとおり
肥料登録事項変更届	18	代表者 15、事業所名 2、生産工程 1
肥料登録証書替交付申請	1	会社名の変更
肥料登録証再交付申請	0	
肥料登録失効届	1	ウのとおり
指定混合肥料生産業者届	1	土壌改良資材入り指定混合肥料
指定混合肥料生産業者届出事項変更届	3	代表者の変更
指定混合肥料生産事業廃止届	0	
特殊肥料生産業者届	13	オのとおり（法人 11、個人 2）
特殊肥料生産業者届出事項変更届	36	代表者 25、住所 8、会社名 2、その他 1
特殊肥料生産事業廃止届	13	堆肥（法人 9、個人 4）
肥料販売業務開始届	37	法人 26、個人 11
肥料販売業務開始届出事項変更届	158	事業所 110、代表者 38、その他 10
肥料販売業務廃止届	17	法人 11、個人 6
その他の届出	4	肥料販売届出受理の証明
計	314	

※件数は、申請書、届出書の件数

コ 肥料生産業者及び販売業者数（令和 6 年 3 月 31 日現在）

区 分	業 者 数	有効銘柄数等
生産業者	普通肥料生産業者	32 73
	指定混合肥料生産業者	11 24
	特殊肥料生産業者	365 478
	計	408 575
販売業者	農協系	20 (うち生産を兼ねるもの 0)
	商 系	1,262 (" 387)
	計	1,282 —

(3) 調査事業等

肥料行政の推進や肥料の安定供給に必要な肥料の生産・流通の現状を把握するため、肥料流通実態調査事業による肥料の生産量及び流通量の調査を行った。

ア 肥料生産量調査

(ア) 目的

埼玉県知事登録及び届出肥料の生産量の実態を把握する。

(イ) 調査方法

埼玉県知事登録のある普通肥料生産業者と埼玉県知事に届出をした指定混合肥料生産業者及び特殊肥料生産業者を対象として、令和 5 年 1 月から令和 5 年 12 月までの肥料生産量の調査を実施した。

対象とした肥料生産業者数及び肥料の銘柄数は以下のとおり。

業 者 の 種 類	業 者 数	対象となる肥料の銘柄数
知事登録普通肥料生産業者	33	73
知事届出指定混合肥料生産業者	11	20
特殊肥料生産業者	302	403

(ウ) 調査結果の概要

令和 5 年の知事登録肥料および知事届出の指定混合肥料の生産量は、14,740 トン（対前年比 105%）で前年より僅かに増加した。乾燥菌体肥料（同 142%）、米ぬか油かす及びその粉末（同 128%）の生産が増加した。逆に、消石灰（同 82%）、副産石灰肥料（同 79%）、混合有機質肥料（同 55%）が減少した（表 1）。

特殊肥料の生産量は 78,964 トン（同 94%）で僅かに減少した。生産量の多くを占める堆肥が 76,871 トン（同 92%）と減少し、全体の生産量に影響した。堆肥の種類では、豚ふん堆肥（同 68%）、家きんふん堆肥（同 60%）の減少の影響が大きかった（表 2）。

表1 埼玉県知事登録及び届出の普通肥料生産量

肥 料 の 種 類	生 産 量 (トン)			令和5年払出量 (トン)			調査対象登録 肥料銘柄数 [生産実績のあ ったもの]
	令和 5年 (トン)	令和 4年 (トン)	対前 年比 (%)	国内向 製 品 (トン)	原料用 (トン)	その他 (トン)	
魚かす粉末	6	8	80	6	0	0	8[1]
魚節煮かす	11	58	19	11	0	0	2[2]
肉かす粉末	0	0	—	0	0	0	1[0]
食品残さ加工肥料	5	5	100	0	0	5	1[1]
豆腐かすの乾燥肥料	0	0	133	0	0	0	1[1]
なたね油かす及びその粉末	1,351	1,319	102	835	545	206	3[2]
米ぬか油かす及びその粉末	5,511	4,296	128	2,127	2,457	927	3[2]
ひまし油かす及びその粉末	11	22	50	0	0	0	1[1]
加工家きんふん肥料	0	0	—	0	0	0	3[0]
副産植物質肥料	0	0	—	0	0	0	2[0]
乾燥菌体肥料	2,616	1,838	142	143	2,453	20	12[6]
副産動物質肥料	0	0	—	0	0	0	3[0]
混合有機質肥料	334	604	55	121	272	1	11[6]
配合肥料	3	20	13	0	3	0	2[2]
生石灰	105	87	121	105	0	0	3[2]
消石灰	3,688	4,484	82	3,327	0	350	13[9]
炭酸カルシウム肥料	626	655	96	626	0	0	3[1]
副産石灰肥料	436	555	79	415	0	0	1[1]
指定混合肥料	37	64	58	37	0	0	20[5]
計	14,740	14,015	105	7,754	5,729	1,509	93[42]

注) 1 普通肥料の生産量には、飼料用・工業用等のその他の区分のものは含めていない。

2 生産量と払出量の差は在庫や昨年生産品の出荷である。

3 生産量・払出量は肥料の種類ごとに四捨五入しているので、種類ごとの総和が、計に合わないことがある。

表 2 埼玉県知事届出の特殊肥料生産量

特殊肥料の種類	令和 5 年 (トン)	令和 4 年 (トン)	対前年比 (%)	調査対象 有効届出数 [生産実績あったもの]
米ぬか	854	937	91	5[4]
くず大豆及びその粉末	0	1	0	1[0]
草木灰	64	0	-	4[1]
骨炭粉末	0	0	-	1[0]
動物の排せつ物	1,113	86	1,294	13[7]
(牛ふん)	(2)	(2)	(100)	(1[1])
(豚ふん)	(0)	(0)	(-)	(1[0])
(家きんふん)	(1,111)	(84)	(1,323)	(11[6])
動物の排せつ物の燃烧灰	16	17	92	2[2]
(家きんふん)	(16)	(17)	(92)	(2[2])
堆肥	76,871	83,296	92	362[184]
牛ふん堆肥	(27,442)	(24,828)	(111)	(106[60])
豚ふん堆肥	(6,156)	(9,070)	(68)	(40[15])
家きんふん堆肥	(12,467)	(20,696)	(60)	(32[18])
馬ふん堆肥	(713)	(26)	(2742)	(3[2])
食品残さ	(2,490)	(2,214)	(112)	(40[14])
草木質系	(22,550)	(20,016)	(113)	(61[30])
その他	(5,054)	(6,447)	(78)	(80[45])
発泡消火剤製造かす	0	0	-	1[0]
貝化石粉末	0	0	-	1[0]
カルシウム肥料	3	3	115	7[3]
粗砕石灰石	1	-	-	1[1]
混合特殊肥料	41	53	-	5[4]
計	78,964	84,394	94	403[206]

- 注) 1 特殊肥料の生産量には、飼料用・工業用等のその他の区分のものは含めていない。
2 特殊肥料の堆肥の中の区分は、それぞれ全体の 50%を占める原料により便宜的に区分けした。
3 生産量は特殊肥料の種類ごとに四捨五入しているので、種類ごとの総和や対前年比の値が、見た目上、合わないことがある。

イ 肥料流通量調査

(ア) 目的

埼玉県内における化学肥料、有機質肥料等の流通量を把握し、効率的な立入検査の実施や、需要に応じた肥料の生産指導等に活用する。また、農家への肥料の安定供給や農業関係機関への資料としても利用する。

(イ) 調査方法

埼玉県知事に届出のある肥料販売業者のうち、全肥商連・埼玉県部会の会員（卸売業者）から 25 件、県内の肥料メーカーから 12 件、J A 全農さいたま、ホームセンター等（量販店）、ネット販売業者から 49 件を選定し、令和 4 肥料年度（令和 4 年 7 月～令和 5 年 6 月）における肥料販売量について調査を実施した。

このうち 57 件の業者から回答を得た（回答率 66.3%）。

(ウ) 調査結果の概要

令和 4 肥料年度の肥料流通量は 43,895 トンで、前年度比 66.5%と減少した（表 4）。

成分量での比較では、窒素肥料（前年度比 76%）、りん酸肥料（同 75%）、加里肥料（同 77%）とほぼ同様の減少割合であった（表 3）。

複合肥料（前年度比 76.8%）、石灰質肥料（同 71.0%）も販売量は減少したが、有機質肥料は前年度比 23.7%、特殊肥料は前年度比 53.8%と大きく減少し、流通量全体の減少に影響した（表 4）。

表 3 令和 4 肥料年度 肥料販売量

(取り扱い実数、単位：トン)

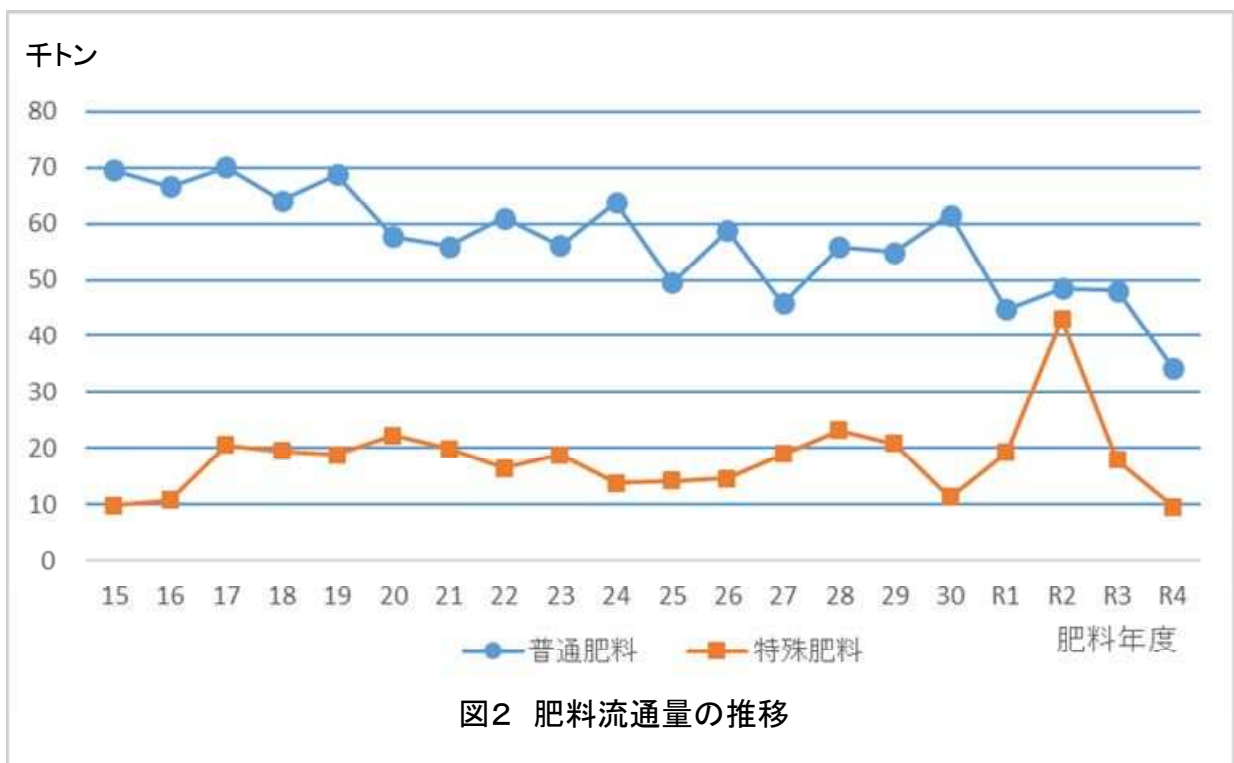
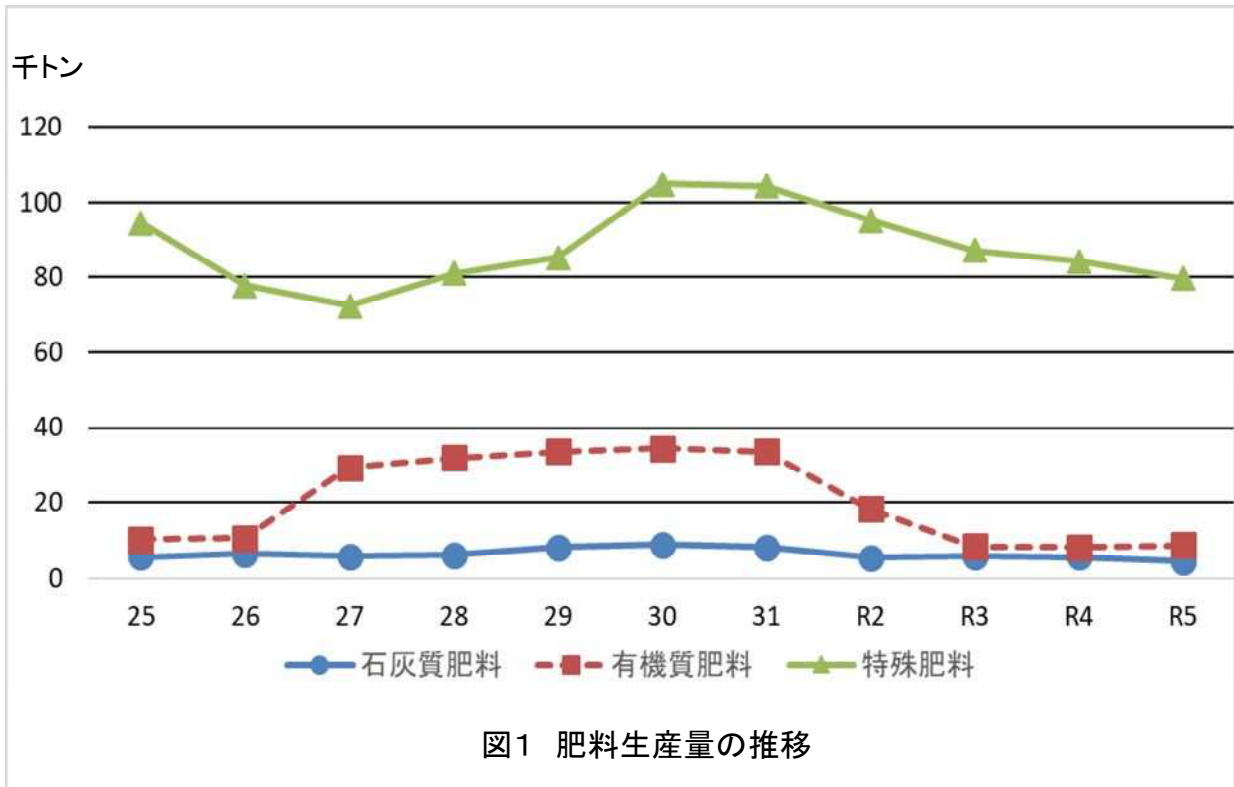
肥料の種類			販売実数(トン)	販売成分量(トン)			R 4 肥料年度		
			R 4 肥料年度	R 4 肥料年度	R 3 肥料年度	前年比	平均保証成分 (%)		
				A	B	A／B%	窒素	りん酸	加里
窒素肥料	単肥	硫酸アンモニア	239	50	59	84	20.9		
		塩化アンモニア	53	13	12	105	25.0		
		硝酸アンモニア	0	0	0	—	—		
		尿素	64	30	110	27	46.0		
		石灰窒素	523	103	218	47	19.7		
		その他	76	23	32	73	30.7		
		小計	955	219	431	51			
	複合	高度化成肥料		1,907	2,366	81	13.0		
		普通化成肥料		286	465	62	8.2		
		N K 化成肥料		121	113	107	16.9		
		配合肥料		712	881	81	13.3		
		(うち粒状配合)		15	56	27	12.1		
		その他		57	84	68	9.6		
		小計		3,084	3,909	79			
	合計			3,303	4,340	76			
りん酸肥料	単肥	過りん酸石灰	72	13	20	63		17.5	
		重過りん酸石灰	12	4	9	49		36.1	
		熔成りん肥	255	51	81	63		20.0	
		加工りん酸肥料	6	2	2	96		32.5	
		その他	129	20	24	82		17.4	
		小計	474	90	136	66			
	複合	高度化成肥料		1,704	2,172	78		12.2	
		普通化成肥料		255	409	62		7.4	
		N K 化成肥料		2	2	81		0.3	
		配合肥料		497	663	75		8.1	
		(うち粒状配合)		5	34	15		8.9	
		その他		52	76	68		8.1	
		小計		2,509	3,322	76			
	合計			2,599	3,458	75			
	加里肥料	単肥	硫酸加里	26	13	5	264		
塩化加里			13	8	11	74			60.0
その他			289	58	72	80			20.0
小計			329	79	88	90			
複合		高度化成肥料		1,681	2,136	79			12.0
		普通化成肥料		257	419	61		7.4	
		N K 化成肥料		120	112	107		16.8	
		配合肥料		487	635	77		8.5	
		(うち粒状配合)		4	29	14		10.2	
		その他		53	79	67		8.3	
		小計		2,598	3,381	77			
合計			2,677	3,469	77				
複合肥料		高度化成肥料	12,826						
		普通化成肥料	3,484						
		N K 化成肥料	716						
	配合肥料	5,894							
	(うち粒状配合)	63							
	その他	582							
合計		23,501							
石灰・けい酸肥料	生石灰	794							
	消石灰	1,287							
	炭酸カルシウム	3,491							
	副産石灰肥料	451							
	混合石灰肥料	63							
	貝化石肥料	333							
	鉍さい珪酸質肥料	1,387							
	その他	242							
合計		8,047							
有機質肥料	植物油かす類	297							
	魚粉類	34							
	骨粉類	62							
	その他	305							
	合計	697							
その他普通肥料		苦土・マンガン質	178						
		その他肥料	44						
		合計	222						
特殊肥料			9,670						
肥料合計			43,894						

販売実数、販売成分量は、肥料の種類の内訳ごとに四捨五入しているので、内訳の計が合計に合わない部分がある。

表 4 埼玉県内の肥料販売量の推移

(取り扱い実数、単位：トン)

年 度 肥料の種類等	2 5 肥年	2 6 肥年	2 7 肥年	2 8 肥年	2 9 肥年	3 0 肥年	R 元肥年	R 2 肥年	R 3 肥年	R3/元比 %
硫 安	425	392	379	391	372	249	194	236	283	119.6
尿 素	248	187	225	237	50	151	148	175	239	136.7
塩 安	42	47	46	49	1	43	37	52	50	95.3
硝 安	4	3	1	2	162	2	1	2	0	0.0
石灰窒素	1,073	857	948	1,354	832	980	630	894	1,089	121.7
その他窒素肥料	94	103	160	90	76	37	76	67	101	150.5
窒素肥料合計	1,887	1,590	1,759	2,123	1,493	1,462	1,086	1,426	1,761	123.5
過りん酸石灰	300	242	215	185	136	138	116	115	115	99.6
重過りん酸石灰	70	40	36	30	25	18	19	21	23	108.0
熔成りん肥	13	21	22	550	484	375	402	480	412	85.8
加工りん酸肥料	37	38	28	10	1	1	1	1	12	1,276.6
その他りん酸肥料	127	137	128	176	43	142	134	91	26	28.5
りん酸肥料合計	1,149	973	940	951	689	674	672	709	588	82.9
塩化加里	30	28	28	28	29	22	12	18	10	56.6
硫酸加里	47	44	31	36	25	25	27	41	19	46.3
その他加里肥料	288	221	258	255	285	333	323	382	357	93.6
加里肥料合計	365	294	317	319	339	380	362	440	386	87.7
高度化成肥料	16,657	17,316	15,815	19,103	16,101	15,496	15,766	15,810	16,252	102.8
(内 有機入り)	(862)	(901)	(1,016)	(1,625)	(1,309)	(984)	(1,083)	(1,408)	(979)	69.5
普通化成肥料	6,089	6,039	5,715	6,670	5,650	5,437	5,214	5,925	5,487	92.6
(内 有機入り)	(2,133)	(2,462)	(2,093)	(2,719)	(2,401)	(2,083)	(2,222)	(991)	(3,463)	349.4
NK化成肥料	859	827	699	1,141	414	1,171	874	587	671	114.3
配合肥料	6,379	6,236	6,013	7,287	6,672	6,790	7,103	7,386	7,342	99.4
(内 有機入り)	(4,741)	(4,757)	(4,768)	(5,473)	(4,911)	(4,744)	(4,828)	(4,950)	(4,920)	99.4
(内 粒状配合肥料)	(138)	(85)	(35)	(111)	(106)	(298)	(425)	(346)	(277)	80.0
その他複合肥料	1,187	1,243	894	1,176	1,303	842	764	1,141	854	74.8
(緩効性肥料)	(5,426)	(5,930)	(5,840)	(5,948)	(6,131)	(6,594)	(6,691)	(6,960)	(8,420)	121.0
複合肥料合計	31,172	31,661	29,136	35,377	30,140	29,736	29,721	30,849	30,606	99.2
生 石 灰	1,228	1,022	1,052	1,092	1,042	1,018	1,007	945	964	102.0
消 石 灰	2,103	1,946	2,044	2,501	2,072	1,826	1,816	1,574	1,721	109.3
炭酸カルシウム	4,942	5,543	5,621	7,476	6,149	5,856	5,584	5,843	5,697	97.5
副産石灰肥料	399	380	398	391	138	134	162	488	808	165.6
混合石灰肥料	346	290	273	257	242	181	191	181	71	39.0
貝化石肥料	679	447	566	797	766	8,205	667	587	383	65.2
けい酸質肥料	1,357	1,369	1,303	1,653	1,502	1,605	1,637	1,869	1,398	74.8
その他石灰質肥料	1,239	933	930	301	220	75	297	244	295	120.9
石灰質肥料合計	12,434	11,931	12,187	14,468	12,131	18,900	11,361	11,731	11,337	96.6
植物油かす	716	870	835	908	876	696	773	1,634	752	46.0
(内 なたね油かす)	(688)	(849)	(818)	(812)	(629)	(686)	(569)	(925)	(741)	80.1
魚 粉 類	42	46	51	50	41	35	39	37	38	103.2
骨 粉 類	9	23	23	132	135	76	79	76	70	91.8
その他有機質肥料	203	334	269	67	96	413	391	340	2,085	613.7
有機質肥料合計	976	1,277	1,178	1,157	1,148	1,220	1,282	2,087	2,945	141.1
苦土肥料	755	180	298	200	308	296	245	185	247	133.3
マンガン肥料	0	0	0	3	1	2	1	1	1	101.7
汚泥肥料	602	61	51	8,837	8,860	8,874	94	1,695	43	2.5
堆 肥	11,590	14,117	15,882	18,163	18,806	9,923	17,020	42,842	17,813	41.6
動物の排せつ物	33	232	67	1,628	308	25	274	18	22	125.3
その他特殊肥料	2,578	2,310	2,473	3,389	2,323	1,397	2,032	162	137	84.5
特殊肥料合計	14,269	16,884	18,910	23,180	21,437	11,345	19,326	43,023	17,973	41.8
肥料実数総計	63,766	64,853	64,778	86,615	76,546	72,889	64,150	92,146	65,887	71.5



(4) 畜政推進事業

畜産安全課の依頼により、特殊肥料の生産届出を促進する目的で、各家畜保健衛生所より推薦された農家の堆肥成分を分析し、結果を報告した。令和 5 年度は 10 件の分析を行った。

表 5 令和 5 年度堆肥分析結果

農家	畜種等	分析項目	窒素全量	リン酸全量	加里全量	銅全量	亜鉛全量	石灰全量	炭素窒素比	電気伝導度	水分含有量
		区分	(%)	(%)	(%)	(mg/kg)	(mg/kg)	(%)		(dS/m)	(%)
A	乳牛	現物当たり	0.6	0.9	0.5	22.4	104.6	2.4	11	2.1	63.7
		乾物当たり	1.7	2.6	1.3	61.7	287.6	6.6		—	—
B	乳牛	現物当たり	1.8	1.3	1.8	15.3	123.1	2.2	13	7.1	41.3
		乾物当たり	3.1	2.1	3.1	26.1	209.5	3.8		—	—
C	肉牛	現物当たり	0.6	0.4	1.3	11.4	46.1	0.4	28	5.6	58.9
		乾物当たり	1.5	0.9	3.1	27.6	112.2	1.0		—	—
D	肉牛	現物当たり	1.5	3.5	1.1	33.2	245.6	3.2	12	5.2	45.2
		乾物当たり	2.7	6.4	1.9	60.6	448.1	5.8		—	—
E	乳牛	現物当たり	2.1	1.5	3.2	27.1	125.0	2.2	14	10.5	28.5
		乾物当たり	2.9	2.1	4.5	37.9	174.9	3.0		—	—
F	肉牛	現物当たり	1.5	2.6	3.3	15.2	125.0	1.0	12	10.7	48.6
		乾物当たり	3.0	5.0	6.3	29.5	243.2	1.9		—	—
G	肉牛	現物当たり	1.9	2.8	2.8	21.2	167.5	1.6	14	7.9	31.4
		乾物当たり	2.7	4.0	4.0	30.9	244.3	2.3		—	—
H	肉牛	現物当たり	1.8	2.8	3.1	18.2	130.1	3.6	16	8.7	31.5
		乾物当たり	2.7	4.1	4.5	26.6	190.0	5.2		—	—
I	肉牛	現物当たり	0.9	2.3	0.9	15.9	132.3	1.6	12	2.9	65.3
		乾物当たり	2.5	6.6	2.5	45.8	381.3	4.5		—	—
J	肉牛	現物当たり	1.7	2.7	3.1	18.1	159.0	1.4	11	10.0	45.5
		乾物当たり	3.2	4.9	5.7	33.2	291.6	2.7		—	—

8 飼料検査の概要

(1) 検 査

「飼料の安全性の確保及び品質の改善に関する法律」に基づき、飼料の安全性の確保及び品質の保全と公正な飼料の取引の確保を図り、公共の安全確保と畜産物生産の安定に資するため、飼料の製造・販売事業場等に立入り、検査指導を行った。立入検査は延べ3回、収去飼料点数は7点であった。収去した飼料は栄養成分及び安全性等の分析検査を行った。

その結果、栄養成分検査及び安全性検査いずれも正常であった。

ア 月別飼料検査状況総括表

項目 年月	収 去 飼 料 件 数							
	規格適合飼料		小 計	非規格適合飼料			小 計	合 計
	配・混 合飼料	動物性 蛋白質 飼 料		配・混 合飼料	動物性 蛋白質 飼 料	単 体 飼 料		
R6. 1						7		
合 計						7	7	7

イ 立入検査状況

立入検査場所	検査対象 箇所数	立入検査 箇所数	収 去 件 数	収 去 件 数 の 内 訳		
				配混合飼料	単体飼料	牧草類
承認配合飼料工場	0					
その他の配混合飼料工場	39	0	0			
単体飼料工場	89	2	2		2	
飼料添加物工場	11					
飼料中継保管施設	—					
飼料輸入業者	12					
飼料添加物輸入業者	8					
飼料販売業者	169	1	5			5
飼料添加物販売業者	27					
運送業者	—					
その他の場所	—					
計	355	3	7		2	5

注) 1 承認配合飼料工場は、関税定率法第13条第1項に基づいて税関長の承認を受けた配合飼料工場（混合飼料のみを製造する工場を除く）とする。

2 立入検査箇所数は、延べ（立入回数）とする。

ウ 立入検査成績

区 分	立入 検査箇所数 a	指摘事項		指 摘 事 項 内 容										計 c	指導件数 c／ b 現地指導一箇所当たり		
		箇所数 b	割合 b／ a	法第2章関係							規格適合飼料	法第32条表示	製造業者届			その他	
				成分規格	製造の基準	保存の基準	使用の基準	表示の基準	特定飼料等	製造管理者							
承認配合飼料工場	2	0	0													0	0
その他の配混合飼料工場																	
単体飼料工場																	
飼料添加物工場																	
飼料中継保管施設	1	0	0													0	0
飼料輸入業者																	
飼料添加物輸入業者																	
飼料販売事業場																	
飼料添加物販売事業場	1	0	0													0	0
運送業者																	
その他の場所																	
計	3	0	0													0	0

注) 1 承認配合飼料工場は、関税定率法第13条第1項に基づいて税関長の承認を受けた配合飼料工場（混合飼料のみを製造する工場を除く）とする。

2 一般表示事項欄には、飼料等の名称、種類、製造年月、製造業者の氏名又は名称及び住所、製造事業場の名称及び所在地について指導した件数を記載する。

3 製造管理者の届出事項に関する指導件数は、製造管理者欄に記載する。

4 立入検査箇所数は、延べ（立入回数）とする。

エ 収去飼料の試験成績

区 分	収去件数	正 常 な も の		正 常 で な い も の		法第 2 3 条 関 係			法第 3 2 条 関 係					正 常 で な い も の の 処 置 (件数)				
		件数	割 合 %	件数	割 合 %	試験件数	正 常 で な い も の		試験件数	正 常 で な い も の				行政指導	指 示	行政処分	告 発	備 考
							件数	割合%		成分量件数	原材料件数	計	割合%					
配混合飼料	0																	
単 体 飼 料	2	2	100	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0					
牧 草 類	5	5	100	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0					
計	7	7	100	0	0	5	0	0	2	0	0	0	0					

注) 正常でないものの処置は、現地指導で終了したものは除く。また、当該都道府県が行ったもの（他から依頼されたものを含む）を記載し、他都道府県へ処置を依頼したものは含まない

オ 重量検査実施状況

製造業種別区分	検査（A）			重量不足（B）						(B)／(A)× 100			
	工場数	銘柄数	個数	工場数	配・混合飼料		動物性蛋白質飼料		単体飼料		工場数 %	銘柄数 %	個数 %
					銘柄数	個数	銘柄数	個数	銘柄数	個数			
配混合飼料工場	0	0	0								0	0	0
動物性蛋白質飼料工場	0	0	0								0	0	0
単体飼料工場	1	1	10								0	0	0
計	1	1	10								0	0	0

カ 現地指導及び行政指導内容

(ア) 当所で検査、指導したもの	該当なし
(イ) 他所等の依頼で指導したもの	該当なし
(ウ) 他所等へ指導を依頼したもの	該当なし

キ 栄養成分に関する公表

公表 年月日	規格適合飼料				非規格適合飼料				合計			
	検 件	査 数	正常な 件 数	違反の 件 数	検 件	査 数	正常な 件 数	違反の 件 数	検 件	査 数	正常な 件 数	違反の 件 数
R6. 5. 21	0		0	0	2		2	0	2		2	0
計	0		0	0	2		2	0	2		2	0

ク 安全性に関する公表

公表 年月日	規格適合飼料			非規格適合飼料			合計					
	検 件	査 数	正常な 件 数	違反の 件 数	検 件	査 数	正常な 件 数	違反の 件 数	検 件	査 数	正常な 件 数	違反の 件 数
R6. 5. 21	0		0	0	5		5	0	5		5	0
計	0		0	0	5		5	0	5		5	0

(2) 調査事業

飼料安全性確保強化対策事業の一環として、自家配合飼料を製造している農家を対象に製品の品質調査及び安全性検査を行った。

表1の農家を対象に、自家配合飼料3点の栄養成分に関する分析調査を実施した。

また、安全性検査としてカドミウム、鉛、及びひ素の分析を行ったところ、すべての飼料において適正範囲内であった。

表1 令和5年度自家配合飼料品質調査 調査対象農家の概要

農家	畜種	経営形態	飼養規模
A	養鶏	養鶏	採卵鶏 174 羽
B	養鶏	養鶏	採卵鶏 300 羽
C	乳牛	酪農経営	搾乳牛 36 頭

表2 飼料安全性確保強化対策事業 飼料の分析結果（現物値）

調査農家	粗蛋白	粗脂肪	カルシウム	りん	粗繊維	粗灰分	水分	カドミウム	鉛	ひ素	亜鉛	銅	鉄	マンガン
	%	%	%	%	%	%	%	(mg/kg)	(mg/kg)	(mg/kg)	(mg/kg)	(mg/kg)	(mg/kg)	(mg/kg)
A	11.4	3.6	1.6	0.5	3.2	6.0	23.1	0.09	0.00	0.18	34.6	3.6	73.1	44.0
B	12.5	3.6	1.9	0.5	1.5	9.6	15.8	0.13	0.00	0.44	38.8	4.2	171.6	41.1
C	3.6	1.0	0.3	0.1	3.9	2.1	74.7	0.03	0.06	0.05	18.8	3.9	92.6	15.1



埼玉県のマスコット

コバトン